地名研究会報

第５７号
平成１０年３月１日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第５７回例会　　平成９年６月１日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・納　栄蔵・小山田　稔・佐野武則・永坂芳彦・馬場　某・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田信芳・福元忠良・松浪由安・三善喜一郎・米原正晃（計１３名）

Ⅱ．麑藩名勝考読会　　P.198 ～ P.202

（問題となった地名および事項）　清水城・思川・去川関・伊能忠敬の測量

清水城

平田　今日の部分は日向国の最後のところです。雛守、去川関、和泉式部の話、思川などが出て来ました。問題点・疑問点などを出して下さい。私はまだ去川関の跡には行ったことがないのですが。

小山田　去年、行って来ました。

平田　あゝそうですか。

小山田　穆佐ですね。忠国の生まれた時に植えた杉の木というのが小学校の上にあります。

平田　忠国の墓は加世田にあるのじゃないですか。

小山田　墓はですね。生まれた所です。

平田　生まれた所ですか。

小山田　父親の久豊か。久豊の墓が穆佐にある。

平田　なるほど。

小山田　ちょっと離れた所ですからね。穆佐小学校の裏山に忠国生誕の碑がる。

平田　あゝ、この話（麑藩名勝考の記事）に出て来るものですね。鹿児島では15代貴久が内城に居城します。16代義久は国分の舞鶴城ですが、家久以後は鶴丸城にいますから、それ以前のいわゆる奥州家が 7代から14代まで清水城に居るのです。二月でしたか、清水城跡で石垣を見付けたと新聞に出ましたが、あれは清水城の本丸跡です。立派なものが残っています。そのうち一般に知らせなければいけないと思うのですけれども。現在は保安林になっていて藪も藪です。入って行けない所です。清水城は久豊の時にも襲われて焼かれていますし、14代勝久の時も焼かれています。不幸な出来事が続いていますから歴史家も忘れてしまったのでしょう。

これは昭和７年に書かれたものですが、林　吉彦という人の『考古学上ヨリ見タル清水城址』という本があります。先日、県立図書館で見つけましたので、それを分析してみようと思っているのですが、この人が現在の清水中学校の裏山にある清水城とは歴史家が勝手に云っているのだと決めつけているのです。清水町の諏訪神社の裏山一帯が清水城だ、という説を唱えてからですね、清水城が二ヵ所あるように混乱しているわけです。

しかし元に返して、三国名勝図会とか天保絵図にある通りに理解すべきだと考えます。「旧射圃記」という石碑があります。久豊の時代、清水城が襲われた時に町人たちが弓をとって戦い、東福寺城を守ります。その賞として弓の道場を与えられたことを記す石碑には、北の方八町余に、八百メートルぐらい北に清水城があると書いてありますから、歴史家はきちっと清水城というものをとらえていたと思います。

石垣は高い所で６m.以上、石垣が３列組んであります。どう見ても、あれは清水城の本丸だと思います。鶴丸城よりも二百年古いわけですから、いずれ

世の中に出さなければいけないと思っております。奥州家は勝久で断絶します。まぁ、無理矢理に貴久に後を譲った形でしょうから、島津氏の歴史家が清水城のことを書いていない一面もあります。歴史家が触れたがらない不幸な歴史があったことは事実ですが、保安林になっていてあまり人が入らなかったのですごい本丸跡が残ったなと私は思います。今は藪で入れませんから、冬あたりに案内します。

思川

平田　思川というのが出て来ましたが、宇都宮の近くにも思川という川が流れています。川の近くに関東地方の女囚を入れる刑務所があり、そこに入っている女囚が「思川〇〇」という歌謡曲を作り、それを都はるみかな、誰かが歌って有名になったそうです。博多の近くかな、福岡県にも思川というのがあります。あちらこちらに歌枕として「思川」という名が付けられているようです。

重富の思川は『三国名勝図会』を見たら思川という名はなく、渡瀬川という名で出て来ます。『薩隅地理纂考』にも出て来ません。しかし西南之役後官軍側は旅団とか師団ごとに戦闘記録を事こまかに作っていますが、その中の一つに別働第三旅団ですかね。重富を攻めた人たちが書いたのには、思川を渡るという記事が出て来ますから、明治10年の段階で官軍側は思川という名称を知っていたようです。したがって『三国名勝図会』にはないが、明治10年には出て来ている。その間に思川という名前が付けられたなという気がします。思いをかけるということで、よい歌枕です。

去川関

平田　小山田さんは去川関跡を見られたとのことですが。

小山田　ただ碑が立っているだけです。他には何もない。何もないのですけど、関守をずーっとしていた方の家があります。現在此処を吉都線が通っています。川の縁に関所跡というのがあり、公民館が建っています。そこに石灯籠の下の部分なんでしょうか、石の柱らしきものがありました。

関守の代々のお墓とか、関守の方が住んでおられた家は廃屋になっているのでしょうか。「立木が枯れるとか」なんとか、教育委員会の方は云っていました。あすこに大きな銀杏があり、薩摩路関所跡と山門院への道という標識が立っていました。あれは重要文化財になっているのじゃないですかね。大きな銀杏があります。去川関銀杏と云って、老人会が管理しているのです。実がなるのですね。女木。勝手に実をとってはならないとなっている。

平田　なるほど。

小山田　関守の方々の墓というのは奥の方にあるのでしょう。惜しむらくはその屋敷には入れない。

平田　屋敷跡には入れない？

小山田　番をする方がいらっしゃるらしいのですけど、見せたがらない。勝手に門の中に入らないで下さいと最初に云われました。入口で。

平田　見せたがらないというのは、何か墓があるのですか。

小山田　外から見ると母屋らしきものがあって、屋根瓦が少し崩れて、全然手入れがされていないという感じでした。

平田　あゝ、なるほど。島津藩の関所でよく知られているのは三つですね。野間関と小川内関と去川関。その他、夏井とか八郎ヶ野とか、七つぐらいあるのです。その中で日向送りとか東目送りとして知られているのが去川関。そこで大抵斬られるということになっていますからね。

小山田　関守をされた方も、鎌倉から下って来た時に付いて来た方ではないようです。島津家にずーっと付いていた人ではないようです。伊勢国かどこかの人という。説明を見ると、そんなことが書いてありました。

平田　高岡郷というのは、出水とか大口とかあちこちから集めて相当な数を送り込んだのではないですか。寄せ集めの集合体が高岡郷士で、気が荒かったのじゃないですかね。そんな所だから、あすこに送り込んで若者たちに処分させたという。

小山田　去川関について何か伝えがあるかなと思って教育委員会にも行って聞いたんですが、全然そういうのはおっしゃらんですね。

平田　斬った記録はとらんでしょうね。二才たちに勝手に肝試しに斬らせたという。各郷から集めたいわゆる二男・三男対策だろうと思います。二男・三男を集めて高岡に送り守備を固めたのでしょう。凄い所だったろうなと想像はしてるのですけどね。一度も行ってませんので。

小山田　バスで行くと、都城から高城に出て、あすこからずーっと上って行けば、一郷一城。そう行ったのばっかり見られますね。

平田　あゝ、そうですか。

小山田　城跡がずーっと連続してます。山城でしょうけどね。南北朝時代の。

平田　高岡筋がいわゆる日向国への道のメインだったと思います。

小山田　でしょうね、去川関があるわけですから。関所跡と云っている所は川幅が狭い。

平田　あゝ、そうですか。

小山田　しかし物凄く深い。上流という感じですね。流れも早く相当大きな石も流れて来るという感じです。向う岸も相当高いです。ちょうど去川小学校の真向側。10号線沿いの信号を渡って少し下った所に碑が立っています。

平田　去川関というのは高岡筋、いわゆる日向街道の関所ですから特に重要だと思います。

伊能忠敬の測量

平田　３週間ほど前、必要があって、伊能忠敬の測量日記を整理して地図の上をたどる作業をしました。1810年と1812年の２回に分けて伊能忠敬の一行が薩摩藩の領内を測量するのですが、測量日記を見て感心したことは、現在ではほとんど行かない内之浦辺塚・佐多辺塚、あちらまでぐるーっと回っているのです。大隅半島・薩摩半島の形をとらえる測量を一つ実施しています。そして甑島も全部回っていますし、屋久島もぐるーっと一回り、種子島も回っていますし、長島も回っています。ですから地形測量をやったことがわかります。それと街道は七つの街道。出水筋とか大口筋とか、先程話に出た高岡筋ですね。それから志布志筋。そういう重要な七つの筋を抑えています。幕府の測量隊は七つの筋と地形測量を主としてやったなということが判ります。郷土史を見直す場合、伊能忠敬の測量日記をみて、測量隊がどこを歩いたかというのを整理するのも面白い方法だなと思います。

それと、読んでいて気付いたことですが、屋久島に行く時も甑島に行く時も、順風を待つわけです。山川港で大体十日から十二日待つのが普通です。船頭が順風と判断したら一気に宮之浦へ渡ってしまう。甑島へ渡る時も、市来湊で十日ばかり待って一気に渡る。前回、配った下野先生の資料に、屋久島に遣唐使が十二日泊っていて、十二日経ってから秋目に向かったという記事がありました。遣唐使の時代も伊能忠敬の頃も、日和待ちは大体十日から十二日、長くて二週間。じっくり待つわけです。そして良い風が吹いたら一気に渡ってします。そういうことに気付きました。ですから船出する場所も決まっていたのでしょうね。そういう意味で、伊能忠敬日記も読んでみると面白いと思います。伊能隊は去川関もそのような測量をしながら通って来ています。七つの街道ですから。

次回からは吉田東伍の『大日本地名辞書』を読んでいくことになります。何から読んでいきますか。案を考えてみましょうね。薩摩・大隅・日向という

順に読んでいけばよい、というのを１案としましょう。それから薩・隅は『麑藩名勝考』で読んで来たわけですから、『麑藩名勝考』にない大島郡の地名から入っていって、日向国の残りを読む。これを２案としましょう。どうしますかね。多数決で希望をとりましょうか。１案でよいという人、手をあげて下さい。それから２案、大島郡それと日向国。大島郡はこれにないわけですから何か面白い地名が出て来るかも知れませんね。日向国は西南之役の戦闘経過が随所に入っていますから、西南之役を眺める意味においても２案の方が面白いかも知れません。薩摩国と大隅国については適当にプリントを配って、各人に読んでもらうことにしましょう。大隅国の大島郡と日向国でいきましょう。読むのに10年ぐらい、10年はかからないかも知れません。

佐野　次回から何ですか。テキストは。

平田　吉田東伍『大日本地名辞書』をコピーして来ます。県立図書館にありますから。次回は最初のものを持って来ます。その次から予習分として１枚余計に配ることにします。『麑藩名勝考』は15年かかってやっと読み終えました。会報も私が途中で入院手術したのが２回あって、３号おくれているわけです。早く追い付かなきゃいけないと思うのですが、テープ起こしが一苦労です。何とか追い付くようにします。

黎明館から、こういう案内が来ております。6 月14日から 9月27日。全部土曜日ですが、古文書講座があるそうです。回しますからメモされて申し込まれたと思います。じゃー、ちょっと休みましょう。

シラス地形について

佐野武則

私の分が「かごしま文庫37号」です。平田先生のものが38号ということです。実は桐野先生が書かれる予定で、かごしま文庫のはじまりの時からかかわっておられたのですが、ご病気で出来なくなり先生の希望で私も共同でやろうという話になりました。そのうちに先生が亡くなり、それでどうしてもということで私にお鉢が回って来ました。中身は全部桐野先生のものだと思って頂ければいいのです。早く構想は出来ておったのですけど、なかなか研究が進まず、書くのにも２年ばかりかかりました。かごしま文庫編集の先生方にも迷惑をかけました。今回やっと出来た次第です。

最初は「シラスと鹿児島の風土」という形で出そうかなと思って、風土に随分こだわったのですけれども、編集の方でそれではひとつも面白くない、もう少し調べたらいいのじゃないかということで、あのようになったわけです。地理屋だもんですからすぐ自然とか風土とか、そういうのを使いたがるのですが、読者が分かり易いように書いてくれということで、こういうふうになりました。

鹿児島県は60％ぐらい、宮崎県も20％ぐらい、南九州はほとんどシラスに覆われています。シラスは何か、ということから入ります。シラス地帯で先人がどのように活動して来たか。その足跡とは何か。その足跡をシラス文化と称してよいのですが、シラス文化の裏に隠されている制度は何だろうか。その地で我々は21世紀を迎えようとしているのだが、シラス文化を改めて学ぶ必要があるのではないか。質実剛健な薩摩の気風というのはシラス文化から生まれて来たのではないか。また、鹿児島の地理的位置、中央には非常に遠いけれども外国に対しては中国や東南アジア、あるいはヨーロッパやアメリカに対して開かれていた、文化の取り入れ口であったと云える。過去４回ほどその近接性を利用して繁栄したことがある。明治以降は、その近接性を利用することが杜絶えて、僻遠性が強く作用しているようである、と。僻遠性を克服して近接性を大いに発揮することが大事じゃないか、と。そういうことを述べています。

前後しますが、中身はシラスの特長やら南九州のシラス地帯を説明しています。これは桐野先生が分類されたのですが、シラス地形を三つに分け、シラス急崖を境にしてそれから上の方をシラス台地。詳しく云えば、高位段丘とシラス台地になります。それから急崖の下の方を、シラス低地。氾濫原と低位段丘のところ。我々が水田を作ったり、居住したりしている所になります。その三つに分けて、いろいろ例をあげて説明してあります。

それと地名との関係ですが、7･8 年前に説明したプリントを持って来ました。霧島周辺の地名、郷土誌に載っている小字を分析して、それと地形との関係を見てみたものです。今日は準備不足だったもんですから、これも引っぱり出して来ました。

南九州一帯はシラスに覆われています。シラス台地とシラス急崖とシラス低地、この三つのところにどんな地名があるのか。平田先生によりますと、地名は地形地名がかなりあるということです。私もどう云った所に、どんな地形の所に、どんな地名が多いのか、ということに興味を持ちました。本当はそのいわれまで、人間とのかかわりとか、その語源まで遡ればいいのですけど、とてもじゃないことで、そういうことは出来ませんので、霧島山麓の地名にどういうのが多いかということを調べてみました。

シラス台地の上には「原」とか「段」とか「平」とか「野」、そう云ったのが多い。それから浸食地形と云いますか、谷の所は「迫」とか「谷」とか「窪（久保）」とか「宇都」。平地には「牟田」とか「水流」とか「池水」とか、そんなのが多いことが判りました。

これは南九州の模式的な地形図です。山がありまして、そこの手前のところにシラスが厚く堆積しています。それを川が浸食して低地が出来ます。このシラスにはシラス台地とシラス急崖、そしてシラス低地がある。この三つに分けられます。開発の時代もそれぞれ違います。端的に申しますと、山間地域というのは開発が古い。縄文の時代から水にも不自由しないし、兎や鹿などの鳥獣類に非常に恵まれていた。だから縄文人が住むには適していただろうと思います。ところが此処は空間が狭いもんですから、後はどっちかというと、忘れがちだったのでしょう。そしてこれは近世後期に士族の拘地として開発されます。

シラス台地というのは水に不自由する所です。笠野原とか十三塚原とか、それから南薩台地とかは常に水に不自由するだけでなく、しかも非常に風が強い。しかも土地が痩せている。真っ平らな台地で笠野原みたいに非常に広い所はどうしようもない。それで開発が非常におくれる。それで江戸時代中期以降、おもに拘地として開発されている。農民も見向きもしなかったそうです。まぁ、島津一門とか高級郷士や麓の士族とか、そう云った者の拘地として18世紀以降、開発されるという歴史をたどります。

シラス低地の場合は、弥生時代以降水田地帯で重要であり、最初は涌水のある崖の下あたりとか、小さな河川もその当時の土木技術でコントロール出来るような所が対象であった、と考えられます。段々土木工事が組織的に行なわれるようになり、シラス低地が開かれます。藩政時代に藩の土木工事として大々的に開発するようになります。

それから、シラス急崖は中世の山城として利用されていました。

シラス地形と地名がどういう関係にあるのか。平田先生からも、それは面白いテーマだと云われてやらなければいけないと思いながらサボっています。

今、知覧に住んでいるものですから、知覧町を少し眺めてみました。税務課で２番目の地図を貰いました。番号が打ってあります。これは昭和〇〇年度ということになるのだそうです。〇〇年度にこの地域の小字を整理したことを示すそうです。航空写真を撮ったのだろうと思います。大きな地図に小字を落としているものです。

これは知覧の２万５千分１の地図です。真ん中付近。知覧の中心方域というのでしょうか、役場があったり工業高校があったり税務所があったり、そういう所です。そこは低地です。麓川という万之瀬川の支流が流れていますが、それよりも南側。そこに木佐貫原という特攻基地跡があるのです。特攻基地跡というのは此処らあたりなんですが、基地跡はシラス台地です。この低地は標高が大体40m ばかりのシラス台地です。

次のページ、拡大図を見て下さい。知覧の麓と特攻観音のある台地。その東側に知覧城というのがあります。自然の浸食谷を利用したいわゆる山城です。自然の地形を空堀としてうまく利用しています。空堀には人間の手で切り通したのもあります。近くに住んでいるもんですから、よく行く機会があります。そのあたりを回ってみますと、自然の地形を実にうまく利用しているようです。本丸とか隈城とか蔵之城とか、古城とか東の栫とか西の栫とか、いろいろあるようです。

次のページ。これは知覧の小字を網羅したのが、年度ごとに出来ているのです。かなり詳しく出ているものですから、これを同じ縮尺ぐらいの地図に移し変えると、シラス地形にどんな小字の名前があるのだということが判ります。これはミューゼアム知覧で整理している資料です。こういうふうにしますと、小字の絵図ばかりでなく、地形のどんな所にどんな地名があるかということが判ります。これを利用しながら今後いろいろ眺めていこうかなと思っております。霧島山麓あたりと、どのように違うのか。これを追々知覧で調べ川辺で調べる作業をして行けば、知覧の地形なんかが判りはせんかと考えているところです。

３月に説明せよとのことだったのですが、手作りの家を手掛けているものですから、そっちの方が忙しくてサボってしまいました。実は今日も棟上げをしなきゃいかんもんですから、ただ説明することだけで終りました。今後、そう云った方向でやっていきたいと思っています。以上です。

〔質疑応答〕

地籍調査について

平田　有難うございました。面白い作業ですね。地形図に地名が赤で示されると一層判り易くなるでしょうね。遠慮なく質問して下さい。

？氏　この地図、これは？

佐野　それは別です。城内というのがありますね。

平田　城内(じょうない)。東の栫、あゝ此処らあたりだ。

佐野　こっちに城内というのがあるんですが、これと大体合わせてみて下さい。それと東の栫。

平田　方向が違うのじゃないかな。

佐野　方向が少し違いますかね。

平田　90度ずらしたら。

佐野　坐り方が逆ですかね。

平田　90度違うよ。

佐野　90度違いますか。あゝこうですね。済みません。縦にこうすればいいですね。あわててやったもんですから、申しわけありません。ミューゼアム知覧が主体となって三木先生たちが調べておられるのですが、その地図をそのままコピーしたのがこれです。これに知覧の小字がきちんと整理されています。これを利用すれば簡単にシラス地形の地名の特長をとらえることが可能です。そういう作業をやりたいと思っているのです。

平田　各市町村は、15年とか20年計画で地籍調査を進めています。ぼつぼつ完成する頃なんです。その資料を貰って現地を歩き、地名を考えられたらいいと思います。

佐野　今云われたように現地に行って、この地域はこういう地名なんだということを確認しなければ本当のことは判らないのじゃないかと思っているのです。そのためにも地域を回りたいと思います。

平田　この字絵図の真ん中辺、城内より上の方に本町とあります。「ホンマチ」ですか「モトマチ」ですか。

佐野　「モトマチ」だと思うのですが、しっかり聞いて来ます。

拘地（抱地）

三善　霧島山麓の３枚目にある拘地というのは。

佐野　これは「カケチ」と読みます。後には仕明地(シアケチ)というようになります。拘地というのは士族だけに許されたもので、税金：年貢が非常に安いのです。えーと、高一石につき租は三斗九升八合（玄米）ですかね。ところが、これだけは九升二合だったのじゃないかと思います。そう云ったことで士族だけに許された開発地です。自作の開墾地、そう云ったものを拘地と云います。

平田　浮免とか仕明地とか、百姓の場合は永作地(エイサクチ)・大山野(ウサンや)。いろんな呼び名のものがありますが、要するに士族の生活を保証するために開墾させるのです。そう云った畑を指します。西郷さんが何処でしたか、山の中に拘地を持っていて、西南之役の時には家族が隠れていたと云います。

小山田　西別府。現在、実業高校があるあたりです。市の説明板に「拘地」と説明があります。

三善　霧島の図面に狭名田(サナダ)・市後柄(イッゴガラ)というのがありますね。狭名田という所はニニギノミコトが日本で一番最初に開いた田だということを霧島町の文化財の人が云っています。実は私の家内が狭名田の生まれでして、栫(カコイ) というのです。「栫」という地名にはどんな意味があるのでしょうか。

佐野　土居とか栫とか構(カマエ) というのは、城のこと。

平田　例えば加世田市村原の「栫ヶ原」は城跡。

三善　狭名田という所は、昔は霧島神宮の御祭田で県知事が田植えに行って、神嘗祭にはそこで出来たものを神宮にあげたという田の跡があります。その隣が狭名田城。私は山城だと思うのですが、城跡があるのです。高台にあるんですね。栫家は高二十石取ぐらいだったような史料が霧島神宮の資料館にあるのです。それで、栫というのと狭名田城。狭名田の田圃のところに栫山というのがあって、私は以前からそれも管理してたのですが売ってしまいました。狭名田と栫山、７～８町ぐらいあります。それで、この資料に涌水地帯であるとありますが、市後柄と狭名田には今は流れていませんけれども、４～５年前までは涌き水がありました。神話の里のちょっと下にものすごい涌き水があって、それが狭名田まで流れていました。今はどういうわけか、流れておりません。そして此処には「桂」という所があります。これは桂久武が開いた集落です。そして桂にみごとな水路があります。この地図を見て涌水地帯であることが判ったような気がします。

佐野　私の本の中で、原口虎雄先生が分類された島津藩の農地というのを192ページにあげてあります。門地・浮免・拘地・永作地などを説明しておきました。それから霧島山麓は火山山麓にシラスが堆積している状態なんですが、大規模な涌水が多いようです。これは桐野先生がされたことですが、涌水がある所は門地か拘地になる。明治以後の開発地かの分類を集落別にしてあります。〇が門地、これは非常に古く、涌水があって藩が重要視していた土地になります。拘地というのはそれよりもず一っと新しいのです。士族が開発した土地で、例えば先程話に

あった桂とか市後柄(イチエ)。

平田　市後柄(イチゴガラ)。

佐野　イチゴガラですか。それから後庵もですね。◎をしてある所が拘地です。　藩が重要視した昔から有名な所は門地として開発されていたのです。拘地はちょっと条件が悪いのですが、桂久武が家来を引きつれて開発したように、幕末から明治初めに開発した土地というのが、かなりあります。

三善　拘地という所は税金が安かったのですか。

佐野　安かったのです。この192ページに。

平田　この本（『シラス地帯に生きる』）に詳しく書いてあるはずですから、それを読んで下さい。

佐野　浮免と同じですから、籾一石に対して米九升二合が課せられるわけです。他の所は籾一石に対して米が三斗九升八合ですから。

平田　ほう、すごいな。

佐野　八公二民といわれるぐらいなんですが、拘地というのは士族だけに許された開発地で、余力があったら開発せよと奨励されていた。但し肩変りがある。戦乱があればかなりの負担を武士たちは負わされていましたので、余力があったら開発せよということで非常に税金が安かった。大体士族は、薩摩の場合、城下にいる士族は別で、大変な生活で地位も低いし、いろいろ出費もあるわけですから、山間地域を開発せよ、そして自活せよという優遇策をとったのではないでしょうか。とくに霧島山麓と東目の場合には、薩摩半島：西目と違って人口が少なかったもんですから開発がおくれて、西目の方からどんどん移住させている。しかもいい所が残っている、と。私は高原やら小林やら裏の方を調べてみたのですが、薩摩の場合には拘地というのは非常に不便な所で、大変なシラス台地とか、ほんの山奥とか、川沿いは欠損地とかにあるのですが、向うは薩摩から見ると人もうらやむような良い所が水田として、拘地として開発されています。

平田　これの２枚目。財部に検校(ケンコウ)という地名があるの？

佐野　財部だったですか。

肥後　検校と書いてありますよ。財部に。

平田　特殊な小字として「検校」というのがあれば、今まで気付かなかったなぁと思って。それからその下の霧島町のは市後柄(イチゴガラ)。「イチゴ」は以前とりあげたことがありますが、一合畑という地名は一合の種子を播く畑ということのようですがほとんどが食べる木苺・草苺に由来する地名です。イチゴ山とかイチゴ川原です。市後柄は苺が生えている川原です。それから変化しています。あすこに池田農場という牧場がありますが、同級生の家でよく遊びに行きました。県道から下って行けば苺が沢山生えていました。

肥後　佐野先生。財部の「検校」というのはどういう場所か、行かれたことはないですか。国分にも検校川というのがあって、その読み方が二通りあるのですが、私は財部の検校は知りませんでした。それから霧島の王子原(オウジバル)は、高原の王子原の近くですか。場所はご存知ないですか。

佐野　高原のは行ったことがあるのですが、霧島のは知りません。

肥後　霧島のはどの辺かな。

佐野　これも、また調べてみます。

肥後　牧園の伊勢段、その下ですね。この伊勢は伊勢神社に関係のある所でしょうか。

平田　でしょうね。王子原、伊勢それから大王、西光寺、八王。これらはみんな神社かお堂の名前。宗教関係の地名でしょう。栗野の水窪・水堀。これは低地地名に入れていいのではないか、どうだろう。

佐野　いや、水窪というのはですね、ちょっと面白い地形なんです。水窪という所はシラス台地の上の方にあって、少し窪んだ所。高位段丘なんですがそこは基盤が出ているもんですから、水が出ている

のです。低地じゃないのです。

平田　あゝなるほど、そうですか。判りました。涌水地ですね。

佐野　はい、あんまり大きくはないのですが、そこが中心になって集落が出来ているようです。

平田　拘地は「ム」じゃなくて「ロ」。

青柳　「ム」を書いたり「ロ」を書いたりする。抱地、拘地。

肥後　抱地？

青柳　シラス台地の「原」、それから「段」とか「平」ですか、大体代表的なのが出ておると思うのですけど、開発の程度とは関係はないのですか。例えば「原」が開発されるとか。

佐野　「原」というのは、ハイと云ったり、笠野原、カサンバイ、ハイとかバイ。その上は紫原、ムラサッバイ。水源地の所は上之原、ウエンハイ。十三塚原は何と云いますかね。

？氏　ジュウサンツカバイと云います。

平田　今の話に関連するけど、鹿児島県の場合、一番早く開ける水田地帯は山田とか迫田だと思うのです。浜田もわりと古いけど、その次になるかな。いわゆる沖積平野が拓かれるのは近世以降、江戸時代からです。江戸時代の終りになって、シラス台地の拘地が開かれていきます。そういうことを知っておけば、鹿児島県の場合、奈良・平安時代は主として山間地の山田とか迫田、それから海岸の浜田。大規模な堤防工事とか用水路工事が行なわれて初めて海岸平野部の水田が開かれて来る。それが終ると土地が足らなくなるから、シラスの原(ハイ)が開発される。麓の武士たちが肥タンゴを担いで登って行くわけです。肥タンゴを担いで足腰がしっかりしていたから山坂達者になる。腰が据わっていて示現流をやるわけですから“一の太刀を疑わず”という兵法になる。山坂達者というのは肥タンゴを担がせて子供たちを鍛えなきゃいけないのでしょうけどね。山に登ることが山坂達者と勘違いしているようです鹿児島県の場合、そう云ったことが大体の開発の歴史と云えるようです。それが「開キ」とか「新開」とか、いろんな地名とも並行していくのじゃないですか。そいう眺め方をすると、どんな所でも歴史を調べられるんじゃないかなと思うのです。

小山田　免税措置のある開発というのは農民にもあったのじゃないですか。士族だけですかね。農民にはなかったのですか。

佐野　農民の場合には永作(エイサク)とか見掛(ミカケ)がありました。それは農民も士族もなんですが、自分で開墾した所をずーっと所有出来るのです。しかし役人の方はこれぐらい税金を出せというようなことで、士族のようにきちっと決めてあるのは百姓にはなかったのじゃないでしょうか。だから適当に、シラス台地の平あたりに行ってからいもを植えたり、いろんなことをしながら生活しとった。ほとんど税金でとられる八公二民の状態だったのです。

平田　薩摩の場合はいわゆるデカン・メロが多く経済的にそんな開発をする余裕はないわけです。一般の百姓というのはそれ以前から住んでいた人々であり南北朝時代に島津氏に負けた武士たちです。平民になって土地を持っていますから、その人々が敢えて土地開発をする冒険はしないと思う。後から入って来た武士というのは貧乏ですから、特権を与えて開発させたということも考えられます。また薩摩の場合は他の地域と違って、鹿児島の金持が新田開発をやる請負新田というのはそんなにやっていないと思います。川内川の下流域に商人の開発新田がいくらか出て来るかも知れませんけど。よくは知りませんけど。

佐野　ほとんど藩営でやっています。商人請負の所はほとんどない。

平田　ほとんどないでしょうね。川内川の河口

一帯も藩営かも知れませんね。開発は。

納　笠野原台地の場合、武士が開拓したというのは、ほとんど「堀」が付いている。人の名前と堀が付いているのです（人名＋堀）。それと鹿屋にはちょうど盆地の周辺に○○屋敷という云い方があるのですね。神屋敷とか蔵屋屋敷(クラヤヤシッ)とか。

佐野　低地の米が出来るような所は、ほとんどが門地(カドチ)か蔵入地(クライレチ)で、そう云った所に百姓を配置して「門」とか「屋敷」が創られます。門よりも小さいものを屋敷と云ってるようです。屋敷というのは中世の「園」に関係があるとする人もいます。要するに藩が百姓を割当ててやった所を門・屋敷と云っていた。それとシラス台地は非生産的な所ですから笠野原みたいな大きな所は周辺部が門地になっています。百姓が作付けをしてやっているのですが、なにしろ南北15Kmとか東西15Kmの真ん中ではどうにもならない。せいぜい人間が耕作出来るのは歩いて行って、まぁ 3Kmか 4Kmぐらいだと思うのです。ど真ん中というのは水もないし荒れとったのじゃろうと思うのです。それを余力のある家老とか地頭になるような人が開発をした。あるいは麓の鹿屋・高隈・串良の郷士の中でも余裕のある者が開発をした。

納　鹿屋の場合の○○屋敷というのは上の原の方じゃなくて、下の段にある。そうすれば○○門、あの門と全く意味は同じ。

佐野　そういうふうに解釈すればよい。厳密に云った屋敷はちょっと違うのだ、という説もあるようですが、税金をとるための門地よりもちょっと小さい。門は大体20石から40石ぐらいの平均です。屋敷はちょっと小さい。

納　私なんかがこの辺でいう○○どん屋敷とは

平田　その屋敷とは違う。

納　それとは別ですね。

平田　門割制度で、門にならないのが屋敷です。

肥後　小規模で人数が少ない。

佐野　一度調べたことがあります。地形図との関係を、川をずーっと遡って調べてみました。平野のど真ん中付近は門地が多いのですが、段々上流に行けば屋敷というのが出て来る。そしてさらに上流に行けば拘地になる。

平田　なるほど。

佐野　また山地になると、門地になったり屋敷があったりして拘地もまた混合しているというようなふうです。

平田　それは面白い。山間地の門地というのは歴史が古く、平野部の門地は新しい。

佐野　ど真ん中にあるのは門地でも名子が多いのです。名頭はどちらかというと崖下の涌水があるような所に居ります。便利の良い所です。新しく開発したような所は名子ばっかりがいる。そんなことが川辺のあたりにはあります。

平田　これは面白い話でした。

三善　霧島川の西にある狭名田(サナダ)、此処が今話に出たような地形です。私が今換地で持っている所が梅屋敷という所です。約1600坪ぐらいの所です私が引揚げて来た時に百姓をしたらいいのだけど、あんたが調べられて問われたら都合が悪かろうというて農地にとられたのです。それで、どうして宅地が多かったのかと母に聞いたら、昔は百姓は税金をとられるからいらん、デカンでよかと、そういうて土地を買わなかった、と。そういう話を聞きました

佐野　それは、こうじゃないですか。藩政期には百姓にものすごい年貢を納めさせていた。

三善　税金が高いから。

平田　なるほど。

三善　そういう話を聞いて、それは何故だろうと不思議に思っとったのです。

平田　武士が多かったので百姓は相当税金をとられたのでしょうね。

三善　狭名田に公民館みたいなのがある。その近くに屋敷があったのですが、最近また税金が高くなると云って、急に杉を植えだした。狭名田のみどころというのですか、道路に面して場所も良いからやがて此処は狭名田部落の中心地になるからということで、母が早くから売ろうと云いよったのです。それを売るな、やがて高くなるからその屋敷だけは残しとけというて残しました。そのうち温泉を霧島町が引くということで、集落の風呂場を作るならば湯を引くという話があって、そこに老人ホームを建てようという話になりました。役場に行って町に寄付するから老人ホームを作ろうという話をしたら医師会が反対するとかで老人ホームは出来ませんでした。梅屋敷というのが厳然としてまだあります。宅地は税金が高いから木を植えて山にしました。その下が狭名田で、日本における田圃の一番の元祖とのことで町で史跡に指定した。

平田　霧島神宮の田圃だったのですね。

三善　戦時中は知事さんが来て田植えをして、その米は霧島神宮にあげた、と。そういうことが表示してあります。

平田　どうも有難うございました。

三善　その辺のことはもっと調べてみないと。

平田　えーと、次回は。

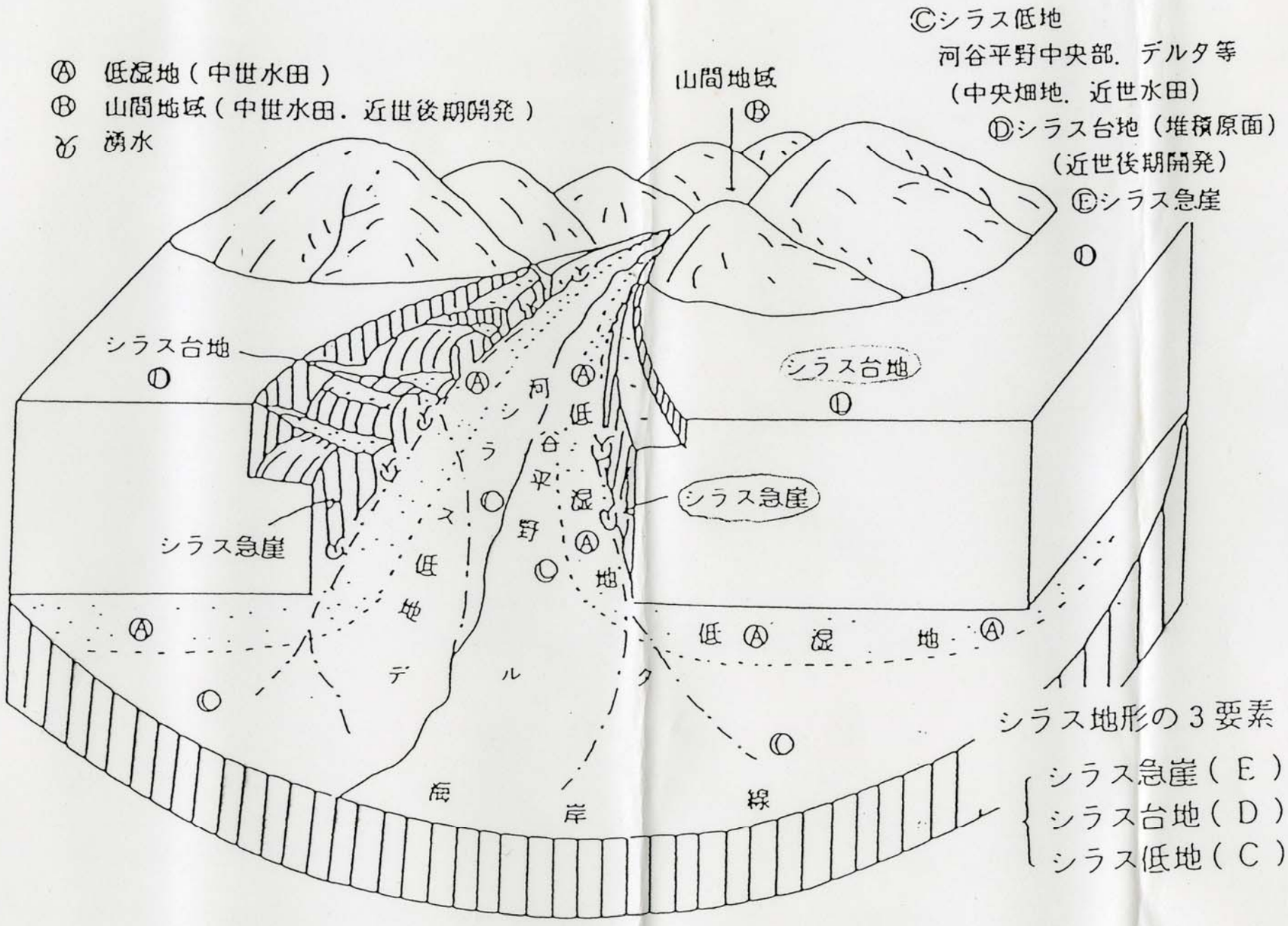
米原　その次の次にお願いします。次はいつ。

平田　９月です。では１２月にお願いします。

肥後　９月はよろしいですか、なければ。

平田　もうだいぶ老齢なんですけども、指宿出身の方で、先日『ふるさとの息吹き』という本を出されました。その中に指宿の地名をだいぶ扱っておられます。また古代朝鮮語と鹿児島語の関係を調べておられるので、ちょっと面白そうだなと思っています。交渉してみますが、他になければ次回は肥後先生にお願いします。今日はこれで終ります。

シラス地形模式図


Ⓐ 低湿地（中世水田）
Ⓑ 山間地域（中世水田．近世後期開発）
湧水
Ⓒシラス低地
河谷平野中央部．デルタ等
（中央畑地．近世水田）
Ⓓシラス台地（堆積原面）
（近世後期開発）
Ⓔシラス急崖
山間地域
Ⓑ
シラス台地
Ⓓ
シラス台地
Ⓓ
シラス急崖
シラス急崖
シラス低地
河谷平野低湿地
デルタ
低湿地
海岸線
シラス地形の３要素
シラス急崖（Ｅ）
シラス台地（Ｄ）
シラス低地（Ｃ）

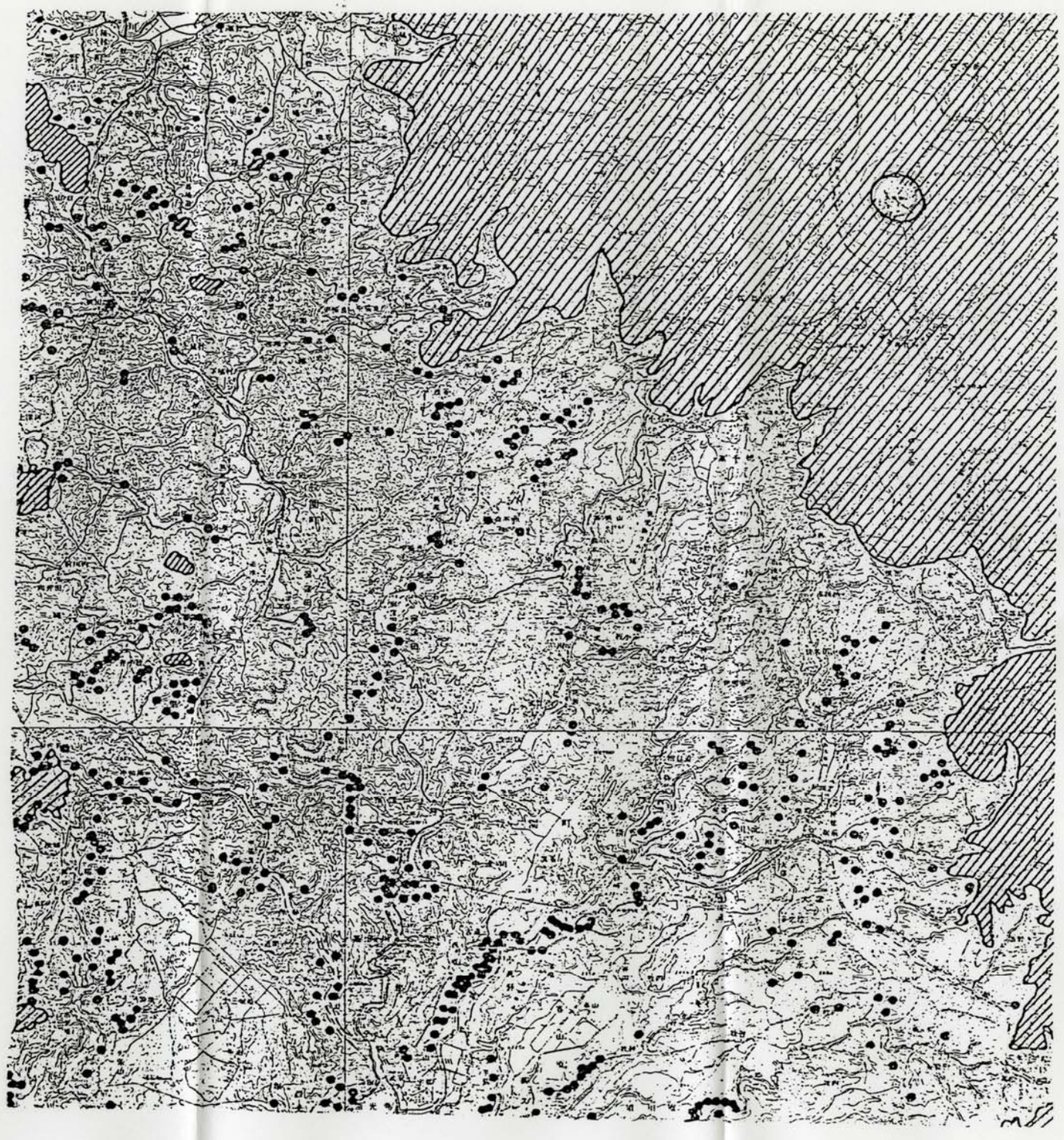
霧島山麓の地名

佐野武則

(1) 台地の分布

(桐野原図)

(2) 霧島山麓の湧水分布



(3) 霧島山麓の小字名と地形

(角川・日本地名大辞典で作成)

地形 / 小字名 / 町・小字数	シラス台地				シラス侵食谷				低地		
	原	段	平	野	迫	谷	窪	宇都	牟田	水流	特殊な小字名
財部町 636	(43) 6.8%	(23) 3.6%	11 1.7%	9 1.4%	(26) 4.1%	(42) 6.6%	9 1.4%	4	0	2	芒貫(ナガイ) 検校(ケンコウ)
霧島町 184	(20) 10.9	2	1	6 3.3	(23) 12.5	7 3.8	4 2.2	0	0	1	草場(2). 市後柄(イチゴバラ) 泉水. 豊後迫 東多羅(ダーラ). 王子原
牧園町 993	(82) 8.3	14 1.4	27 2.7	1	(195) 19.6	30 3.0	9 0.9	4	1	0	成政(ナリマサ). 下府鳥(フドツ) 伊勢谷
栗野町 476	(29) 6.1	2	9	8	(32) 6.7	11	3	2	4	1	牧野(2) 水窪. 水堀(ミズホリ). 大水堀 大王
吉松町 263	8 3.0	1	4	0	7 2.7	5	0	2	0	6 2.3	八王(ヤツオウ) 西海子(サイカイジ) 宇塩(ウシオ)
Total 2552	(174) 2位 6.8	(42) 5位 1.6	(52) 4位 2.0	24 7位 0.9	(283) 1位 11.1	(95) 3位 3.7	25 6位 1.0	12 0.5	5 0.2	10 0.4	
	11.3%				16.3%				0.6%		

※ 1位(迫)11.1%, 2位(原)6.8%, 3位(谷)3.7%, 4位(平)2.0%, 5位(段)1.6%

No3

(4) 霧島山麓の開発

◎ 抱地
○ 門地
⬠ 明治以後の開発地(除温泉地)

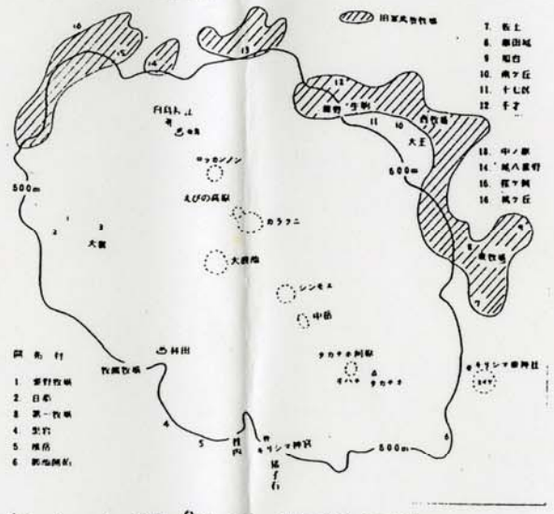
(桐野利彦原図)

梅

まとめ

- 霧島山麓は南九州一の大湧水地帯である。
- 上水道設置までは湧水にほとんど頼っていた。
- シラス台地はよく侵食されて、シラス侵食谷がよく発達してる。（迫、谷、原、平、段などの小字が多い。）
- 西目からの移住者が多い。
- シラス低地は古くより門地として開発（シラス台地には抱地が多い。）
- 火山斜面は明治以降の新しい開拓地である。
- シラス台地に原、平、段、野
  〃 侵食谷に迫、谷、窪、字都
  〃 低地に牟田、水流
  ｝などの小字が分布している。

(5) 霧島の開拓村（明治以降）



火山山地斜面が開拓村

開拓村	入植年次	記事
大王開拓	大正 3年	桜島大噴火の難民52戸，島津氏の杉山伐採跡地に入植、標高300m緩斜面
生駒・環野開拓	昭和22年	旧陸軍放牧場の払下げ、引揚者など500m前後の高冷地，薄物用大根など
大霧開拓	昭和21年	国有林の払下げ、満洲開拓団の引揚者800mの高冷地、酪農、後継者の確保
猪子石開拓	昭和20年	旧陸軍演習地の払下げ、当初70戸入植昭和50年大手開発業者進出、現在1戸

地名研究会報

第５８号
平成１０年６月７日
鹿児島地名研究会

Ⅰ．第５８回例会　平成９年９月７日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・大田照夫・小川秀直・納　栄蔵・小川秀直・川野雄一・木場武則・永井啓介・永坂芳彦・永田典男・肥後芳尚・平田信芳・福元忠良・松田　誠・三善喜一郎・米原正晃

（計１５名）

Ⅱ．問題となった事項　①河頭太鼓橋の由来と現状　②針原という地名　③水戸という地名

河頭太鼓橋の由来と現状

平田信芳

今日は肥後先生に問題提起をお願いしてあるのですが、昨日急に手紙を頂戴し、河頭太鼓橋のことが新聞に大きく書かれているけれどもよく判らない。説明してくれないかということでした。それで河頭太鼓橋の説明から入っていきたいと思います。また出水の針原が土石流で大きな被害を受け全国の注目を集めています。香川県の小川豊という方は災害に関連する地名についていくつも本を書いておられる方ですが、肥後先生に針原はこういう所じゃないかと、いろいろデーターを送って来たそうです。小川豊さんの見解を紹介したいとのことです。それから国分に水戸(ｽﾄ)という地名があるのですが、その類例を知りたいとのことです。甕藩名勝考の読会は前回で終りましたので、今後は『大日本地名辞書』をコピーしてそれを読むことにします。今日は熊毛郡から始めます。あとでプリントを配ります。

河頭太鼓橋の説明に入ります。プリントは 8月12日付の新聞と 8月 4日付の洞穴の跡というコピーがあります。それと昨日ばたばたと追加をインプットしたのですが、「河頭太鼓橋」というＢ４のもの。これらにもとづいて話をします。

河頭太鼓橋の由来を原典に立ち戻って整理してみました。1987年、10年前のことですが、鹿児島市教委が出した『鹿児島市文化財調査報告第４集』に鹿児島市の石橋を全部調べたものが載せてあり、写真入りで細い寸法・一つ一つの由来が書いてあります。それを読んでみます。

「架橋由来は『県維新前土木史』によると、1840年頃迄、甲突川は西方を迂回していたので、山を切り開き、直線に変更し、山の下端石盤を橋台として架けられたと察せられる。石材は小野石であり、嘉永元年(1848)、岩永三五郎の設計である。地元の人の話では藩主が郡山の花尾神社への参道として架けさせたともいわれている。」

橋および周辺のうつりかわり：「武之橋が完成に近付いている頃、この橋のアーチが組み立てられていたので、三五郎はあまり姿を見せられなかった。そこで三五郎は地元の石工、山田竜助・原田孫之進・田中源次郎等に現場の棟梁としてアーチ石橋の架け方を教えたと思われる。この橋は地元の人が初めて自分達で架けた記念すべき石橋であるといわれている。橋の上流側に歩道橋が架けれれている」これは撤去されています。「又、近くには河頭中学校や河頭浄水場ができている。」

いわゆる文化財としての近辺の状況が説明してあります。これが10年前に出されていますが、市教委が出す部数は 300部ですので、ほとんど一般の目には触れておりません。

そこで『維新前土木史』を探してみました。昭和９年に県土木課が作成した立派なものです。河頭太鼓橋は「鹿児島郡伊敷村大字上伊敷字河頭と大字犬迫字久木田」間の甲突川に架けた。「径間54尺、拱矢22尺」これはアーチの径です。「幅12尺」橋の幅です。「本川は元と西方に迂回したりしに、山を斫り開き、直線に変更し、山の下端石盤を橋台として架したるものならんと察せらる。架設年代は弘化嘉永の頃ならん」。

今度はそれよりも古い『鹿児島県地誌』に当ってみました。これは明治17年に出来ています。「太鼓橋：甲突川ニ架ス。本村（犬迫村）ト小山田村ノ界字河頭ニアリ。石造長拾壱間広サ弐間半」。同じ様な記事に「郡山街道、犬迫村ト本村（小山田村）ノ界ニ架ス。石橋ナリ。長拾壱間広サ弐間半」があります。二つの記事からは同じものであるとの見当がつきます。郡山街道というのは「藩主が郡山の花尾神社への参道として架けさせた」とあるのに対応し『鹿児島県地誌』には「肥後別路」「肥後別街道」「郡山・宮之城街道」などの別名も出ています。郡山・入来・宮之城・大口を経て、小川内(コガワチ)関から肥後国へ出る道です。

江戸時代の幹線は出水筋です。伊集院・川内・阿久根・出水へと出るいわゆる肥後街道。肥後側から見ると薩摩街道になります。これとは別に郡山・宮之城・大口・小川内関を経て、水俣あるいは佐敷へ出る道が肥後別路と呼ばれるもう一つの重要な幹線になります。河頭太鼓橋はそれに架けられた石橋になります。

右側の（４）、家老調所広郷の下で実務を担当した武士が海老原清熙です。この人が明治16・17 年頃渡辺千秋知事から調所広郷の業績をまとめるように云われます。それで調所広郷の記録をいろいろ残すことになったのです。その写しが県立図書館にあります。その中に一つに「海老原清熙履歴概略」というのがあります。これは明治10年代としましたが明治17年頃のものです。その中に「新上橋、西田橋、高麗町橋、武之橋」それから「川上ノ方ハ玉江橋、入佐土橋、皆岩永三五郎カ手ニテ石橋ニ架スルーーー」とあります。玉江橋までは甲突五石橋ですが、入佐土橋というのは６番目の橋になるわけで、これが河頭太鼓橋だなと見当が付くわけです。

海老原清熙は調所広郷の片腕として岩永三五郎や阿蘇鉄矢を指揮し、天保～嘉永の間、藩内の土木工事に当たって人物です。また入佐土橋は近くの伊集院に土橋(つちはし)の地名があり、県内に見られる苗字も土橋(つちはし)ですので、入佐土橋(いりさつちはし) と読むのでしょう。

それから宮之原源之丞という会計担当の武士がいます。先日、新聞のひろば欄には「宮原」としましたが、県立図書館の本の表書をそのまま写したのであのようになりました。「宮之原」が正しいようです。「宮原」と書いても「ミヤノハラ」と読むのかも知れません。源之丞はロがあるものが正しいのですが、この活字はワープロにはないのでこのような形で打ちました。宮之原源之丞の記録は嘉永二年閏四月、調所広郷が切腹した直後とみられます。それまでの仕事をまとめて引き継ぎ書類として提出したものと思われます。その中に藩営土木工事について甲突川の川浚え、稲荷川の川浚え、どこの石垣は何時工事をして工事費はいくらかかった、というふうに綿密な記録を残しています。その記録が「御産物御仕登(ごさんぶつおしのぼり)・金銀銭御蔵御納高(きんぎんせんおくらおんおさめだか) 万控(よろずひかえ)」になります。これは県立図書館の開架図書に和綴本の写しがあります。これを見ると、それぞれの橋の費用が判ります。

拾い出して来たのは甲突川の六つの石橋と稲荷川の六つの石橋です。甲突川の石橋は皆、高い。西田橋の 7,127両とか、玉江橋が一番安くて 1,560両。四連・五連のアーチだからでしょう。ところが、アーチが一つのものになると 100両ぐらいになっています。非常に安い。アーチ一つのものを作るのにそんなにかからなかったということです。稲荷川の例を見ても判ります。ほとんどが 100両前後です。永安橋の 900両は例外です。これは後に永安橋に変りますが、最初の名前は抱真橋です（板書）。抱真院という寺のそばに架けられたものです。岩永三五郎が鹿児島で架けた最初の石橋で、元々は三連アーチです。日豊線の鉄橋のところに架かっていたのです。鉄道が出来た時に移して二連アーチの永安橋に作り直したのです。最初は三連アーチ、したがって 900 両かかったわけです。稲荷橋は 110両、大乗院橋が81両、一ツ橋が91両。黒葛原橋は 200両かかっていますが、此処は両岸が高い所なので基礎作りに手がかかったのだろうと思います。それで倍ぐらいかかっているわけです。

このように眺めると、西田橋の 7,000両は桁はずれに念を入れたということが判ります。今まで石橋にいくらかかったというのは書かれていましたが、原典が何かということは示されませんでした。原典は宮之原源之丞の記録です。今後これを利用して下さい。薄い本ですからなかなか気付きません。コンピューターでの検索も題名が長いので枠からはみ出し、そんな本はありませんと出てきます。御産物で打つと出て来ます。宮之原源之丞ではまだ試していません。

（６）には安永五年三月吉日とありますが、これは1776年、アメリカ独立の年になります。「川直御新田」という石碑が河頭中学校の校庭にあったことを 8月22日付の新聞で紹介しました。

肥後　池田さんの記事。

平田　ちょっと貸して下さい。会員の池田さんがこういう資料があることを連絡してくれました。「川直御新田」、これは太原久雄さんの『甲突川絵日記』の中にあるものを掲載したのです。太原さんは天文館とか稲荷川流域について数冊の一般向きの本を書いておられます。私は大抵持っているのですが、これだけは持っていませんでした。太原さんは「川直」と読むのか「川並」と読むのか判らない、そんな川の名前はないとし、池田さんも「川直」とは読んでいないのです。その資料をもらった時は忙しかったのでそのままにしていたのですが、数日後よく見ると、「川直」という崩し字であることに気付いたのです。これは大変なものだと気付いたのです。1776年に川筋を直したことを示す史料になります。どういうふうに直しているかというと、河頭太鼓橋の所はもともとは岩山で川は西の方を廻っていた（板書）。それを安永五年(1776)、50～60メートルになるでしょうか、直線状に切ったのです。元々の川の跡は水田にしたのです。名付けるとすると入佐御新田ですね。御新田とありますから藩営事業だったわけです。

今度は歴史考古学の観点になりますが、此処には道があったと思います。そして土橋が架けられていた。宮之原源之丞の記録には「入佐出橋」と書いてありますが、土橋(つちはし)か出橋(いでばし)か謎だと新聞には書きました。日本全国の地名を調べると、出橋という井手と橋を兼ねた橋を示す地名に気付きません。土橋という地名は沢山ありますから、土橋と考えておきます。先週の土曜日だったですか、河頭太鼓橋の謎と「ひろば欄」に書いたのは、此処に四つずつ二組、柱穴の底の方が見えています。柱穴は普通40～50cmの深さですが、底の部分しか残っていない状態です。これを一つ一つ厳密に実測してどういう角度で柱穴が掘られていたかという推定が出来たらと思います。恐らくこれは土橋の橋脚だっ

たと思います。それが二組残っているわけです。1848年に河頭太鼓橋が架けられているのですが、この間が70年ぐらいありますから、土橋は３回架け替えられたのじゃないか。此処の柱穴グループで１回、別の柱穴グループで１回、太鼓橋のところに１回あったかも知れない。そして1848年に石橋を架けた時、1776年に開いた所を岩永三五郎が少し拡げさせてると思うのです。というのは完全な柱穴が残っていないからです。謎が多いから実測が必要と問題提起してるのです。

それから新聞で洞穴が見付かったと大きく報道されていますが、此の辺から入っていく洞穴があるのです。こういう具合に洞穴が入っています。その出口を探しているのですけれども、よく判りません。そうして此処に川跡と知らずに河頭中学校を建てているのです。河頭中学校のプールのところが、この岩山の先端部あたりになります。

河頭中学校の上流側に温泉がありますが、この辺から見ると、此処はダムです。岩山を20m ぐらい切り開いてダムにしている。そして河頭太鼓橋は水の落し口になります。この辺に行かれたら、これは江戸時代のダムだと、すぐ気付きます。

どういう組み合わせになるかというと、①御新田を作った。②川直しをして直線的な河道を作った。③それに少し手を入れて石橋を架けた。④洪水時に石橋に強く当たらないように此処にカーブを作った（水勢を弱める工夫をした）。こっちから見ると此処は低くなっていて川の跡だなと判ります。もし溢れた時はこっちに流すようにした。恐らく三五郎の知恵だろうと思うのです。そのようなことが考えられます。⑤溢れた水やこちらを流れる山水を流すために小さなトンネル水路を設けた。此処、カーブになっているところは渦を巻くわけですから、そのままにしているとこの辺に砂が溜ります。渦を巻いたまま砂が溜らないようにこっちに水吐け場として作ったトンネルがこれだろうということです。真ん中の丸味、これが「へこみ」になります。下から２段目の後から６行目あたりに「洪水の勢いを弱めて下流に流す土砂吐きと説明しているところです。此処に砂が溜らないように、渦を巻いている泥水をこっちの方に流して太鼓橋を守る、そういうことを考えていたのではないか。

実は、この文章の最初の方は私の文章で、河頭太鼓橋の見直しと題してその歴史を説明した文章を８月３日にみんなに配ったのです。それを基にしてある河川工学者が作った文章です。長かったので半分ぐらいに縮めたのですが、新聞社の方がそれでも長いとのことで苦心して書き直し、やっとこれだけにしたのです。だから難しい文章になったと思います。

今度、文化財保護登録制度というのが出来たので二月にそれにもとづく河頭太鼓橋の登録を請願したのですが、否決されました。市の文教委員会は文化財保護登録制度ということのみにとらわれて、河頭太鼓橋の意味・その歴史的な価値は何も分析しませんでした。

七月、此処に別れの意味を兼ねて遊びに行って、トンネルがあることに気付き、市民グループが調べ始めたのです。市民グループはこのトンネルに熱中し、報道機関もこれにとらわれていますが、全体的に見る必要があると思います。全体の流れとしては御新田作りと水路作りがあった。そして石橋を架けた。石橋に洪水をコントロールするダムの役割があった。それを鹿児島市は知らずに河川敷跡に中学校の敷地とした、ということです。

もし此処を拡げても水の落し口が少し広がるだけで、ダムそのものは残るわけです。８・６水害後、太鼓橋の代りの橋を架けようとしてその準備が進んでおりますが物騒な所に架けるもんだと思います。太鼓橋の下流に河頭大橋というのがあります。８・６水害の時は、流れて来た木材などが河頭太鼓橋を通過して河頭大橋に全部引っかかって、ひどい目にあっているのです。それに輪をかけて上流側に橋を架けたら、川は本来の河道を流れようとするのが自然ですから、此処がやられるわけです。どんなことをやっても河頭中学校は洪水に痛めつけられる運命にあります。此処を逃げ出すのが正解だろうと思いますけど、そこまではやりきらんと思います。河頭中学校を此処に建てたのがそもそもの誤りだったのです。

そういう歴史的な経緯も知らずに河頭大橋というのを架けて、この道を造ったのです。河頭大橋は全体的に低く、これに全部引っかかって８・６水害の時はこの辺がやられたのです。当時の航空写真がそれを示しています。今後も啓蒙をしなければならないと考えています。

（質疑応答）

青柳　「川直御新田」という石碑は私も見たことがあります。ずーっと以前に。すなおに「川並」と読めたですよ。知識が入って、もし「直し」と読むのであれば、ちょっと私は疑問だと思うのですけど。

平田　この字を見ると「直し」ですね。

青柳　あゝ写真では。

平田　この写真の文字をみると「直」ですよ。

青柳　あゝ、そうですね。字をよく見ていなかった。「並」とは読めないですね。

平田　太原さんも「並」か「直」か分からないとしている。

青柳　どっちかというと「直」ですね。

平田　今までこれを「直」と読むのに気付いていないのです。

青柳　ちゃんと読めば「直」なんですね。

平田　早くから「直」と読んでおけば「川直し」という意味からその辺を見直すことが出来たはずです。しかも、これは河頭中学校の校庭にあったのです。校門の脇、生垣の横に。

青柳　河頭太鼓橋の付近は地図を見れば、あすこを掘り込んだというようなことはすぐ判るみたいな気がする。

平田　うん、そのことは誰も気付いていない。

青柳　橋の横に店がありますが、そこは岩盤の上だから。

平田　この辺のこと？

青柳　はい、その石碑のと掘り込みと関係があるのは大体分かるというか。

平田　分かるはずなんだけどね。しかも河頭中学校の校庭にあったのです。石碑はこの位置にあった。

青柳　はい。

平田　本来はこの辺にあったのかも知れませんが。

青柳　橋のそばですよ。どんなに云っても河頭太鼓橋からは30m ぐらいしか離れていないと思います。

平田　昔は此処に洞穴があったそうでう。

青柳　洞穴？川のでしょう。

平田　いや。

青柳　川から掘り込んでいる穴はいくつかありますけど。

平田　こっち（左岸）に？

青柳　いや、向う側。

平田　こっちに二つ見えている。

青柳　はい、見えます。

平田　これの出口を今探しているのです。それとこの上にトンネルがあったそうです。以前はトンネルをくぐって河頭中学校に通ったというのです。消防自動車が通れないからとのことで削ったのだそうです。それは仕方のないことですけど。

問題はこういうことなんです。50年経ってるわけでしょう、河頭中学校は。50年間、社会科の教師が校庭にある石碑に気付かなかった（笑い）。それを云ったら河頭中学校の先生が可哀そうですけどね。誰かが気付いて、これは何だと取り組めば「川直」

という意味、旧河道の上に校舎が建っているという危険性にもっと早く気が付いただろうと思うのです。しかも、これが水害後に移されたのじゃなくて、それ以前に移されたという情報も聞いています。

青柳　そうですね。あそこは流されるような所じゃないですね。考えてみれば、まぁ高い所にあって水はよけて流れているから、あれで流されるということは絶対ないですよ。

平田　体育館は3mばかり水があがったのでしょう。

青柳　でしょうね。あの地形から云えば一番低い所にありますから。

平田　まぁ、河頭中学校の先生を責めるのは酷だけど、案外地元の人は気付いていないということですね。しかも、それが50年間続いている。普通の人が気付かないのは仕方がないのですが、社会科の教師が何人も居るんですよ。50年間ならば数十人です。現在の鹿児島市の中学校の先生は、高校の先生もそうなんですが、受験一本槍で足元のことなんか生徒に教えようともしない。そこに問題があると私は考えるのです。

受験戦争に生徒たちを追いやっているのはむしろ教師の方であって、教師が冷静に考えたら足元の歴史であっても学ぶことは多い。現在地球の温暖化が云われたり環境破壊が云われる時に、生徒たちを連れて歩けば環境問題であってもっと違って来ると思うのです。そういう意味で私は河頭中学校の社会科の教師の責任をつつきたいと思うのです。

青柳　つつかれた人は返事をしないといけないですね。

平田　安永五年の石碑というのは、鹿児島県ではベスト＝テンに入る古いものです。古い石碑はそんなに多くはないのです。安永年間か、二百年ぐらい前の石碑か、では困るのです。そんな古いものが校庭にあるということだけでも、生徒たちの見る目は違って来るだろうと思います。今のところ孤軍奮闘ですが、頑張らざるを得ません。新聞の投書欄に郷土史家という肩書きを書いていますが、郷土を愛する歴史家という意味で郷土史家と名乗っているのです。ただ市町村の歴史を物好きに調べるのが郷土史ではないと云いたいのです。

肥後　平田先生のファンが案外多くて、先生の文章を久しぶりに見たので何かすっきりしたという。しかし、かねての文章に比べて今回は読んでみても判りにくいから教えてくれと云われたもんですから読み直してみたのですが、この図でもぴんと来ないので急拠説明して欲しいとお願いした次第でした。今説明を聞いてよく判りました。

針原という地名

肥後芳尚

先程、針原の史料を配りましたが、これは出水市針原川の上流で起きた土石流に関連して考えてみようとの資料です。このところニュースで川の問題が続いているものですから、今回は急拠平田先生に説明をお願いした次第です。

５月末に国分の上野原遺跡が見付かり、６月は上野原・上野原で明け暮れたわけです。７月に入ると10日に針原集落の土石流による水害でした。このところ針原と上野原とで新聞を賑わしています。針原の水害は全国的な話題となって、先程話があった小川さんから手紙をもらいました。針原というのは崩壊地名だから、現地に行ってもう少し調べろということが文字の外に読みとれました。

小川さんという方は、以前は建設省の技官で主に四国地方の水害・災害の現場で工事にたずさわった人です。現場に行って植物地名が崩壊につながっているということを知った経験から地名の研究を始めた方です。小川さんはいろんな本を書いておられますが、榛の木のことはとりあげられてないのです。それで資料的に整理してみました。これは小川さんの『災害と植物地名』から抜き出したものです。

針原の状況は専門家が現地に入って調査し、地滑りか崩壊地かの議論がされているようです。鹿大の下川教授とか地元の先生方は崩壊説に傾くというか崩壊地説が強まっているようです。私は現地も見ていませんのでどっちであるか分かりませんが、地滑りと崩壊地というのは専門家が見ても区別しにくいのだそうです。地滑り・崩壊の予知法として、まず第一番目に地名が地滑りか崩壊かどちらかを知る、と。これは小川さんですから地名を最初にもって来てあります。しかし一般の人は地名は知っていないわけです。今回も災害が起きて、やはりあすこは危険地地帯だなということが判るわけです。新聞や行政機関も後になって、そういうことを云っているようです。地名はどうなのか、ということで『災害と植物地名』の説明から抜き出してみました。

小川さんがあまり力を入れていないというか論及していないのに注目して、まず古語辞典で「はり」を眺めてみました。「墾」は開墾です。これはテレビだったと思うのですが、針原地区は天草から入植して石原を拓き、非常に苦労して開拓した所とかでこの「針」も開墾とまんざら縁のないことではないと思うのです。それから榛(ﾊﾘ)。これはハンノキです。川岸によく密生している落葉の喬木です。ハリハラは出水の場合は「針原」と書いてありますが一般には「榛原」。小川さんの説を見ると「榛」があげてないのです。小川さんは「ハイバラ」というのを「萩」の方に強く結び付けて「吐(ﾊｷ)」・「剝(ﾊｷ)」とか、それと流合(ﾊｷｴ) を考えておられる。九州では一般に流合(ﾊｷｴ) と云います。河川の合流点を。そういうことでしたので「榛」の方から針原を眺めてみました。

榛木(ﾊﾝﾉｷ)と云っても一般の方にはあまり関心がないと思いましたので、ちょっとくどいかなと思ったのですが上原さんの『樹木大図説』からのコピーを付けておきました。ここにあげてある通り、榛木はハンノキ属。これの学名のもともとの意味は、川の堤の中に生えている、あるいは水辺に栄える木という意味だそうです。実際、川べりなんかによく繁茂している木です。ハンノキ属では一般に榛木がとりあげられていますが、鹿児島の場合はヤシャブシが多いのです。榛木はここに書いてある通り方言が多いのです。ハリ、ハリノキ、カワラトノキ、これは川原によくある落葉樹です。稲の架木として重宝にされています。

それから627ページの、ヤマハンノキ。これもやはりハリノキ。いろんな名前が付いて困ってるのです。ヤマハンノキはヤシャブシと呼んでいる所もあるそうです。このヤマハンノキは砂防用とか緑林樹用として植えられ朝鮮の緑化によく使われた木です。

次にヤシャブシ。これは鹿児島にも多い木ですけれども、垂水方面では方言で「ソバイノ」と云います。金峰町では「ヤッサブシ」と云います。ヤシャとかヤシャノキというのもあります。これは木の実から染料をとったので、ヤシャというのだと書いてあります。染料に用いるのだそうです。それとこのヤシャブシは痩地によく生える木で、石ころの多い所などに生えていて、イワシバとかガケバリというような名前でも呼ばれています。葉の特色はこの図でご覧になって頂ければ判ると思うのですが、非常に水辺を好む木であるということ。それからヤシャブシの隣にヒメヤシャブシとあるのですが、方言ではハゲシバリ、キシシバリ、イワシバリ、ガケシバリ、ジャリシバリ。その名前から見る通り、石ころの所によく生える木で、崩壊地とか、そういう所によく生える木です。

針原は見ていませんが川があって、そして石ころが非常に多い所だそうですから、ヤシャブシあるいはヒメヤシャブシがよく生えている所じゃないかなと思っています。現地で植生を調べないと判りませんが、鹿大の下川さんたちが現地に行って調査されていますから後日植生も聞きたいと思っています。そういうことからして、あすこは水気の多い沢でハンノキ、ヤシャブシ、ヒメヤシャブシなどが多い所じゃないかなと考えているわけです。そういうことから、あすこはやはり危険地帯である。県の方もそういう地区に指定してダム：堰堤を造ったわけですが、新聞によると堰堤を造ったことで皆が安心しきって反って逆効果になったのじゃないかということが書いてありました。もともとそういう地名に関心をもって調べておけば、あるいは今回のような災害を未然に防ぐことが出来たんじゃないかなぁと思います。

水戸川について

肥後芳尚

今まで平田先生が、川のことをもう少し調べたらいゝのじゃないかと何回も云っておられますが、そのことも念頭において国分の川の名前に関連した話になります。川はただ水が流れるだけでなく、川の個性とか川の性格というものがあるんだな、ということを考えさせられました。南日本新聞社が出した各市町村の地図で一通り川の名前を見てみました。危険な名前ということまでは気付きませんでしたが、それぞれの地域と川でその性格・歴史・用途などを調べたら面白い結果が出るのじゃないかなと思いました。

（３）は国分市の地図です。今度、新しい郷土誌を作る時に問題になったのですが、水戸川のよび名についてです。地元では水戸川(ずぢゃ)と云います。海岸の方に干拓・須戸川と文字が見えます。２枚目の地図には須戸となっていますが、地形図には水戸川というのが使ってあるのです。それで水戸と須戸の全国例を見たのですけれども、水戸は案外少ないのです。角川の資料集で見たのですが、須戸の方は川に限らず「スド」という地名は見えるのですが、水戸というのは少ないのです。

それで諸橋さんの『大漢和辞典』の説明を見たのですが、①海水が出入する口、②川が海に入る所、③その入口からの通り筋、という説明がしてありますから、実状の通りだと思うのですが、やはり②がいゝのですかね。

これは『国分府中誌』から引用しました。東さんという方が書かれたものです。想像図とありますが想像というよりスケッチというのかな、正確でないという意味の想像ですから、そのつもりで見て下さい。これは新川です。川直し以前は大津川と云います。気色の森の所から国分平野を横切り、川跡を通って広瀬の方へ流れて行きます。下流では広瀬川となってます。昔は国分平野を蛇行していました。大雨のたびに大水に見舞われ、非常に難儀しているということで海岸の方へ真直ぐ掘り通したのです。それで元々の小村の方の、広瀬川の河口を「水戸川(ずぢゃ)」と呼んでいます。ところが東さんのこれを見ると、左側の方に、竜波見の近くに水戸川の原というのがあります。此処にも水戸川がありますから水戸というのが何か特定の意味を持っているのか、ご存知の方がおられたら教えて頂きたいと思ってここにあげたわけです。県内でこの字「水戸」を使った所があるのをご存知の方はないでしょうか。

平田　「スド」という地名をご存知ありませんか。「ス」というのは中洲とか洲崎の「ス」。それから

「ド」というのは場所を示すことば。水戸と書くのは、ミトかミナト。それを「スイト」と読むのは聞きませんので、水戸を「スド」と読むのは国分だけかなと思っていたのですけど。これが本来の大津川：広瀬川の流れですね。

肥後　そうですね。

平田　１Kmぐらい上った所に「湊」があるわけですね。

肥後　小さい時は、スドガワというのは、今の湊付近に限られた川かと思っていたのですけど。これを見ると竜波見・野口のあたりまで水戸川という文字が見えたもんですから。

平田　なるほど。

肥後　それで広い範囲に、この名があるのかなと思って。

平田　これはちょっと離れすぎてはいませんか、竜波見・気色の森・安蛇水流は。

肥後　想像図と書いてありますから、単なるスケッチ。正確でない名称でしょうけれども。それでも古川とか大津川排水とか用水とか、いろいろ入り混って書いてあります。用水の付け替えはありますが、この川がなくなるはずはない。

平田　水戸川がなくなるはずはない。

肥後　排水はですね。自然に出来た川ですから、そのまま名前が残っているはずです。それで“この川を知っちょいやすか”と地元の方に聞き直してみたのですけど、若い人はもう駄目ですね。一・二回聞くだけでなく調べ直さないと、若い人たちは全然関心もないし、忘れられて杜絶えてしまいますから。とくに名前もないような、こういう用水とか排水ですね。以前は必ず名前が付いていたはずですから、こういうのを今のうちに聞き取り調査で調べておかないと、古老が亡くなればすっかり忘れられてしまうのじゃないかなぁと思います。

此処で問題にしたいのは、水戸(ずど)という地名が他にないか。そして須戸は何か意味があるのか。『鹿児島万能地図』を一通り見ましたが、県下では見当りませんでした。

平田　「スド」という地名があるのをご存知の方は教えて下さい。

肥後　この『府中誌』の例のように身近な名前の判らないものを調べることも必要だなと思います。用水があれば排水があるはずですから。生活用水はどこかで排水の溝と連なるわけですから。

平田　市役所の河川課か、県の土木事務所に尋ねられたら。

肥後　県の河川の大きな地図はあるのですけど、あれに小さなのが入っているか、どうか。

平田　市の下水道課なんてのは、こんな細かい所の地図も持っているはずです。

肥後　今後はそれを当ってみるつもりです。

平田　木場さん、川内にはそんな地図がありますか。川とか排水路の地図なんてのは。

木場　それは気が付きません。

平田　一週間ほど前に片岡さんが来られて、今日持って来た昭和３年の地図をもらいました。その時地名関係の本は全部整理するから貰ってくれとの事でした。その時、出水の針原が話題になりました。戦後、朝鮮から引き揚げて来て最初は米之津で勤めた、と。米之津の宿屋に下宿して、そこの娘さんと一緒になったとの話になりました。奥さんを米之津から貰った、と。ところが奥さんは出水の麓を見たことがないというのです。麓と在・町という対抗意識があってかのことでしょうね。そういう話が出ました。鹿児島県では麓と町、それから在と新たな開墾地などを分けて眺める差別した見方が強い、と。麓意識があって、その下に町がおかれる。米之津の人達、すなわち町の人達は肥後国との境に近い檜木(ひぎ)を田舎扱いにする。米之津の人達は檜木を見おろすのだ、と。そして檜木の人達は後に入って来た

針原(はいわら)な衆を見おろすのだそうです。針原の人たちは新しく入って来た人達で、若い、と。さっき話に出ました天草から入って来た人達になります。あすこは扇状地帯ですから、いわゆる崖崩れし易い所なんです。そういう所でなければ開墾地は残っていない。そこに入ってミカンを植え付け、現在はみごとなミカン山になった。国道３号に沿って行くと、右手の方にミカン山があります。そこが針原地区なんです。ミカンで儲け、いわゆる出水ミカンとして当った。後から来た衆が儲けあがってとしょのんちょっわけです。鹿児島の悪いところじゃなぁという話になりました。

麓と町、町と在、そして新たに入って来た所。新たに入って来た所は条件の良い所じゃなくて、危険地帯だということ。古くから居った衆は“あすこは崩ゆっど”ということを知っちょいやっはずだ。後から入って来たから崩ゆっということを知らんでむくろいき開墾をしやった。そういう面があるのじゃないか、と。出水ミカンはスーパーマーケットにいつも入ってますからね。「針原ミカン」では売っていない。

そういう扇状地、水吐けの良い所、崩れ易い所、そういう所には榛木：ハンノキがよく生える。鹿児島では竹が生える所はよく崩れると云いますが、崩れる所には一番最初に女竹なんかが生えるのじゃないかと思います。

小川さんは土木屋さんですが、崖崩れの場所に行くたびに共通する地名があることに気付いて調べられ始めた方です。崩壊地名に植物の名が当てらたのではないかとするのが小川さんの主張です。私は崩壊する所にそういう植物が生えるのだと、自然に考えたい。そういう植生地名の所は崩れ易いのだと理解する方がいいと思います。針原という所はやっぱり崩れ易い所、しかも先日北薩地震があってひびが入っていたわけでしょうから、あゝ云った災害が起こったのだろうと思います。

肥後　南日本新聞に河頭太鼓橋のことが平田先生の名で書かれていたのですが、読んでも判らないので教えてくれと話しかけられたものですから、今日はいい機会だと思って急にお願いしたのです。また新聞でご承知の通り、６月は上野原、７月は針原。毎日のように新聞をにぎわしました。針原の水害は全国的に注目されていますし、小川さんからも勉強しろというような示唆を受けましたので、此処で取りあげました。３番目の水戸：国分の水戸川、これも川に関係したことですので取りあげた方がいいと考えました。今日与えられていたテーマは「干支に因む地名」ということでしたが、どうも時間内には終らないし、この三つで時間一杯になると思って準備して来ませんでした。またの機会に発表させて頂きます。

〔質疑応答〕

納　国分市役所のあたり、あの辺が川跡でしょう。あれはこの地図ではどの辺になるのですか。

平田　川跡と書いてあるでしょう。

納　小村のところに川跡というのがあるもんですから、どの辺になるのかと思って。

平田　どこに書いてあるのかな。あゝ此処だ。上小川の先の方に。

納　この図面でいけば、右下隅に水戸川。水戸川のちょうど上の方に川跡と書いてあるでしょう。市役所のあの辺が川跡じゃないですか。

平田　此の地図でも市役所あたりですよ。これは地図が縮めて描いてあるから。

納　これでいけば、真ん中に向花があって、新町、府中となる

平田　そうですよ。ここらあたりが市役所になります。あの一帯が川跡です。そしてお寺がある。

納　あゝ、あすこにな。

肥後　病院のマークが書いてあるでしょう。救急病院かな。この辺が川跡。

納　府中のところに向花。あの右側にも向花がありますか。

肥後　府中も向花に一部入ります。

平田　府中の東側の方は向花に入ります。

納　いわゆる昔の国分の町は向花でしょう。

平田　そうですよ。

肥後　大字が向花です。

平田　もとの図書館あたりまで。国分寺跡も大字向花です。そして上小川とは国分小学校のところで隣合っています。

納　そんなら向花というのは府中の東側を回り込んで新町の辺まで入っとたのですね。

平田　新町は府中の北側になります。姫城岳の麓一帯。

納　姫城は国分市と隼人町の境になるところ。

平田　そうです。じゃー、今日はこれで。次回は三善さんの話になります。

▩ハイバラ・ハイバル（拝原・灰原・波居原）

①「和名抄」の地名

阿波国美馬郡蓑原郷（現在・徳島県美馬郡脇町拝原）、遠江国蓁原郡蓁原郷（静岡県榛原郡榛原町）、丹波国多紀郡榛原郷（兵庫県多紀郡）。

②ハイはハキ（吐き）の転で、吐き原のため湿地化している土地。すなわち湛水化している土地。

③扇状地で自然堤防裏の低湿地へ、谷川が入り込んでいる地形。降水集水地。

④本川への水吐きには樋門・樋管による排水施設が必要。

⑤この土地に居住地を求め、豪雨のたびに床上浸水となり、苦労している例もある。

▩ハキ・ハギ（把木・葉木・萩・波寄・破木）

①「和名抄」の地名で、筑前国上座郡把伎郷は、現在の福岡県朝倉郡把木町である。

②「岩波古語辞典」によれば、

(1) は・き（吐き）(イ) 口中より物をぱっと外へ出す。(ロ) ことばに出してぶちまける。

(2) は・ぎ（剝ぎ）(イ) 表皮をむき取る。(ロ) 身につけたものをぬがせ取る。はだかにする。(ハ) 官位などを剝奪する。

③ハキ・ハギは、(1) 剝き・吐き、(2) 剝ぎ、で川の水を剝くの意と、地すべり崩壊を意味する剝ぐがある。

④九州では、一般に河川の合流点地名であって、本川に対して支川が水を剝く所の意。地すべり崩壊地もある。

⑤本川と支川が同時流出ということは、ほとんど考えられないが、支川の鉄砲水で対岸の河岸が川崖になるケースは随分あるので、ハキ・ハギの支川流出の対岸地は、崩壊に注意して護岸の設置をすること。また住居地は、河岸から相当の距離をとっておくこと。

⑥崩壊地名の同類項は、五十音のハ行とカ行の組合せで訛った地名が多い。

ハカ、バカ、ハキ、ハギ、ハク、ハケ、ハゲ、ホカ、ボキ、ホケ、フキ、フク、フケ、など。

ただし、机上で判断せずに現地踏査のうえで判断せねばならない。他の意味の場合もあるので……。

「災害と地名」より

地すべり地と崩壊地（崖くずれ）

地すべり地の特徴は、

(1) 動きが緩慢である。（年数ミリ程度）

(2) すべる規模範囲が比較的大きい。

(3) 前兆現象が現われる。

(4) 何年も続く動きを示す。

このような特徴であるため、急に人的被害などにつながるといった傾向は少ない。避難する時間も十分あるし、発生の予知・予測もできる。

崩壊地の特徴（崖くずれ）

(1) 突発的に発生する。

(2) 前兆現象が現われることは少ない。

(3) 規模は小さい。

(4) 発生は継続することが少ない。

両者とも崩壊現象の前には、湧出水が濁る。水量が多くなったり、少なかったりする。という事前現象がある。

崖くずれと地すべりは正しく区別されていないが、山の特に急な傾斜部分のくずれを「崖くずれ」といっている。崖くずれは突発的に起こるもので、一般に土や岩の割れ目に沿ってくずれる。くずれた土や岩は、くずれた高さと同じ距離にまで到達する。崖の麓がさらに傾斜地である場合は、さらに遠く、崖の高さの数倍の距離にまで達する。

しかし、水分を大量に含んだ土である場合には、崖の高さの五～六倍以上にも達するという。一般に崖の高さの二～三倍にまで達するので、その範囲が危険区域ときれている。崖くずれは、特に西日多く発生している。これは台風に伴う雨と火山花崗岩の風化が崖くずれを起こしやすくしていることに起因している。

地すべり・崩壊の予知法

(1) まず、地名が、地すべり・崩壊かどうかを知ること。

(2) 次に、近年にない降雨、たとえば、十年間平均の日降雨量や時間雨量を記録的に破るような豪雨があった場合には、山側の石垣とか、谷水、井戸水などを注意する。地すべり・崩壊のある前兆には、必ず、地下水となった湧出水や、井戸水に変化が起こる。多くなったり、異常に少なくなったり、はてはハタと止まったりする。

(3) 急傾斜地では、コンクリートのり枠工などが施工してあれば、必ず水抜き工が施工してある。そこからの排水量、排水の濁り具合（濁りが出だすと、間違いなく崩壊運動がすすんでいる）を30分おきくらいに観察する。

(4) イ 湧出水が少なくなり、

ロ 湧出水が濁れば、直ちに避難をする、

ハ 早いときは、20～30分後、遅いときは数日後に崩壊する。

(5) 注意するところは

① 堤防の漏水

② 急傾斜地の崖下【施工の有無は関係なく、コンクリートのり面（＝斜面のこと）保護工のあるなしにかかわらず】

③ コンクリートのり面保護工のある場合は水抜きから出てくる水に注意。

④ のり面保護工のないところでは、崖すそか

「災害と植物地名」より

②

「岩波古語辞典」より

一はり【榛】ハンノキの異称。野原や川岸に密生する落葉半喬木。実と樹皮は黒・茶色の染料とする。「住吉（すみよし）の岸野の一にほふれど（染メルガ）」〈万三八〇一〉

はりはら【榛原】榛（はり）のはえている原。「引馬野（ひくまの）にほふ一入り乱り衣にほはせ旅のしるしに」〈万五七〉

は・り【墾り】《四段》新しく土地をひらく。開墾する。「住吉の岸を田に一・り蒔きし稲のさて刈るまでに逢はぬ君かも」〈万三四四〉。「墾、ハル・カヘス・オコス・ホル」〈名義抄〉

樹木大図説 上原敬二著1より

Betulaceae かばのき科

落葉喬木，灌木，葉は単葉，互生，鋸歯あり，雌雄同株，約7属100種，主として北半球にあり，通常早春開花す。ここには5属を説明するがその分類は主として雄花の構造により，併せて果実の部分の形による，近縁のものを除けば葉の形態によつて識別されうる。

Alnus はんのき属

落葉喬木，灌木，雌雄同株　葉は互生，鋸歯あり稀に全縁，時に羽状に浅裂する。約30種，北半球及び南米に分布し，暖帯にあり，乾湿の地何れにも適す，本来の造園樹ではないが土地改良上，治水砂防上重要な役目をもつものがある。ハンノキと汎称するものはハンノキ，ヤマハンノキを指す，古語ハリノキも同じで，これはハギではない，万葉集巻七巻十のはりはらの歌はハンノキを詠じたものである。榿の文字もまた同じ，蘇東坡の詩に「三年榿木行く行くつくべし」「榿木三年已に焼くに足る」と，蜀本紀に「蜀人榿木を以て薪となす之を種うる三年にして焼くべし」と，杜甫の詩に「飽くまで聞く榿木三年大なりと，為に歌せ渓辺十畝の陰」「榿林日をささふ風に吟ずる葉」とある。

万葉時代に榛摺（はりずり）といつたのはハンノキ類の果実の黒灰をすつたものらしく，後世には果実の煎汁による浸し染及び樹皮の煎汁による染色法が発見された，何れもタンニン染のことで，前者は鉄分の多い泥とともに用いて黒色を，後者は媒染料によつて黒，茶褐色を染め出す，果実を鉄分に富む泥と共に用いて染めたのが武蔵の「黒八」染である，ヤマハンノキの樹皮を用いて漁網を染めることがあり「あみかわ」という，山梨県の甲斐絹の染料にも使う。材は緻密であつて軟く，床柱（丸柱）に用うる外家具，漆器木地，挽物，杓子，木櫛，寄木細工，鉛筆，マツチ軸木，小箱，経木等の材料とする。炭としては黒色火薬の原料に役立つ。

学名アルヌスはこの樹のラテン名であるというが又 al（近く）lan（河堤）の合字だともいう，英名 Alder の語源はアングロサクソン語 Alr, Aler, Alor でこの樹のゲール語は Fearn，イギリスにはこの樹の北欧語 Orl を現に使つている地方あり，その語源は Olr である，イギリスの地名で Alder に因むものは Allerton, Allerbeck, Ellerslie, Balfern, Glen-farne 等である。別の説では Alnus はラテン語 Alor amne（水辺に栄える）から来たともいはれる。ドイツは Erle，フランスは Aune である。

はんのき

Alnus japonica Steudel (Betula japonica Thunb.)

Japanese Alder; Japanische Erle

ハリ，ハリノキ，アカハリ，チハリノキ，ヲハリノキ，オホバハリノキ，ハリギ，ハンノキ，ハノキ，ハノギ，ハヌキ，ハアノキ，ハンベ，ハンギ，ハンツゥ，ハナノキ，バン，バンノキ，バンギ，バンダ，バンドノキ，バンゾゥ，バンサゥキ，バンザゥギ，ハットノギ，ソロバンノキ，ソゥダバン，チャバン，コバン，ケンバンノキ，ヤチシバ，ヤチバ，ヤチバ，ヤチッバリ，ヤヂバ，ヤッバ，ヤチッバ，ヤッカ，ヤチハンノキ，ヤチハノキ，カハラハンノキ，ヤチバハンノギ，ヤツハンノキ，サトハン，ンゲシバダ，サトハンノキ，ハシバミ，ユツバ，ヤチクワ，ヤチカ，サルノクシ，キツネノカンザシ，ヤシャボノキ，カンノキ，ヤシャ，ホンヤシャ，ヤシノキ，ブナノキ，アワコゥヂ，オカバ，ヤッゲンボゥ，ツクナベ，ミヅキ，ヤツクハ，タットケネ，サルケネ，ケネ，ニタトケネ（以上4，アイヌ）赤楊，榿，播，榛，棵，水棟，五里木，楡理木，茶条，水東果，水凍果

ハンノキの枝葉

形態　喬木，雌雄同株，高15m，径0.6m，樹皮淡褐色，粗渋，不斉に裂開する，幼枝は灰褐色，稍3稜，稍無毛又は褐色軟毛粗生す，葉痕は半円形，冬芽は有柄（これは区別点）2～3個の同大の鱗片により密に被はれ，宛も1鱗片の如く，細長不斉三稜形，上端彎曲，繊質，灰白色の微粉を以て被はれる。葉は有柄（長1.5～3cm）長楕円状卵形，広披針形，鋭尖，鋭又は楔脚，短凸点に終る低平細鋸歯，上面光沢なく，下面は淡緑色，脈わきに赤褐色の毛叢あり，その他は無毛或は少毛，側脈7～9双，上方に弓曲す。花は早春葉に先つて開く，雄花序に2～5個の花穂，稍頂生，雌花穂は1～5個1花序につく。果実十月成熟，初め緑色，後暗褐色，球形又は卵状楕円体，物類称呼にヤマダンゴ（尾張方言）という。長15～20mm，径9～15mm，種子は褐色球形又は倒卵形，長3～5mm，径3mm，狭翼あり，1立240gr，155000粒，1kgで650000粒。かつて木村有香博士は上高地で1花の中に雌雄両蕊をそなえたものを発見したと報じている。

ハンノキの果枝

分布　北海道，本州，四国，九州の水湿をふくむ低地，低山帯に普通に見る，水田の畔，河辺の堤防上，用水のへり，水田地帯の並木などにも植栽されている。乾地や痩地にも生ずる，それは根に一種の根瘤バクテリアが附き空気中の窒素をとつて固定するによる。朝鮮，満洲，ウスリーにも生ずるが中国には未だ見ない。日本では関東地方で特にハザギ（稲架木）として重用されている。上越線で東京から越後に入つた許りの水田までは見られる。埼玉県北足立郡戸塚村新井高吉氏邸内のものは直径約1mもあ

幼枝は無毛，葉は広卵形，短鋭尖，短狭脚，下面軟毛，稍革質，長6～9cm。北海道産。

けはんのき　var. koreana Call. (var. rufa Nakai)

幼枝に赤褐絨毛あり，葉下面にもあるがこれは後に無毛。本州，朝鮮（元山）に産す。

あかはんのき　var. rufinervis Honda

葉は赤褐，主脈にのみ有毛，脈は淡紅色。本州産。

次に間種としてはハンノキとヤマハンノキとの雑種に A. Mayri Call. あり，ウスゲヒロハハンノキという。これに似て毛の少いのを A. borealis Koidz. ヒロハハンノキという，共にハンノキより葉幅広く，楕円形，広楕円形，短鋭頭，稍不明の欠刻あり。

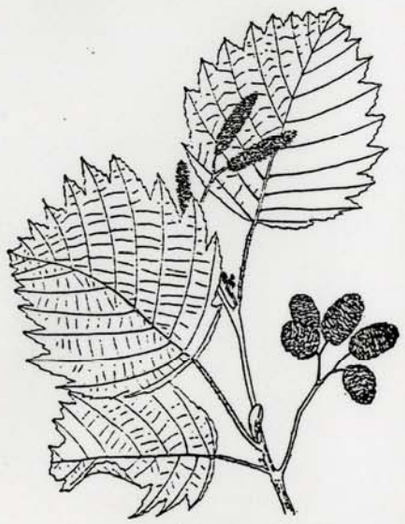
さくらばはんのき

Alnus trabeculosa Hand. Mazz. (A. Nagurae Inokuma)

小喬木，枝は灰褐色，幼時は帯黄色毛あり，又は無毛。葉は長楕円形，卵状楕円形，短鋭尖，急鋭頭，細鋸歯，鈍円又は浅心脚，上面平滑多少の毛あり，微光沢，下面脈上少軟毛あり，乾くと赤褐色，葉柄はハンノキより短く0.5～1.5cm，側脈はハンノキより多く9～12双。花の構造もハンノキと異る。果穂は毛と同じ。本州（東海道以西山陽まで）稀に産し，中国中部に分布す。

けやまはんのき

Alnus tinctoria Sarg. (A. hirsuta Turcz., A. incana Willd. var. hirsuta Spach., A. sibirica Fisch. var. hirsuta Koidz.)



ケヤマハンノキの枝葉（花実ともにつく）

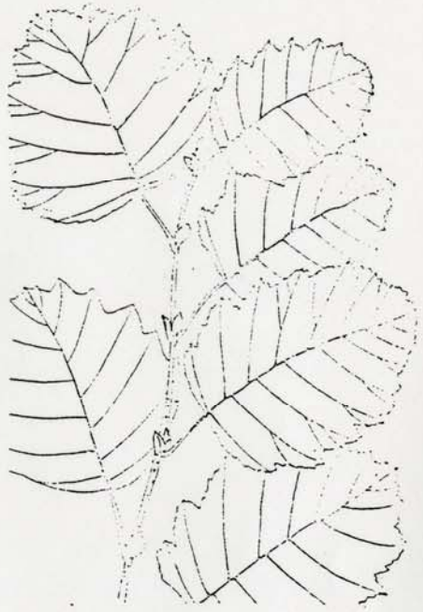
ケハリノキ，エゾヤマハンノキ，ヤマハン，ハンノキ，ケネ（アイヌ）イフレカニ（樺太）

喬木，高18m，径0.8m，樹皮は帯紫褐色，幼枝は黄褐色，密軟毛あり，冬芽は倒卵状楕円体，短柄，灰色密毛あり。葉は広卵円，広楕円形，薄膜質，鈍乃至鋭頭，時に微円頭，鈍又は截脚，縁辺は6～8片に欠刻状浅裂，不整鋸歯，上面は鮮緑色，有毛，後に無毛，下面は密に軟毛，側脈6～8双，葉柄1.5～3cm，葉長，巾共7～12cm。四月開花，十月成熟，葉，花，果ともセイヤウハンノキより大形。果穂は卵状長楕円体，長15～25mm。

北海道，本州，四国，九州の山地に普通見る，河岸，平野，山地，山崩地等にまゞ天生する。時に純林をなす，朝鮮，シベリア，樺太にも分布す。アメリカには1890年マリース氏によつて苗が入り，1892年にはサージェント氏が日本産種子を入れて自ら播種しアーノルド樹木園に生育している。アメリカでは造園樹とする。

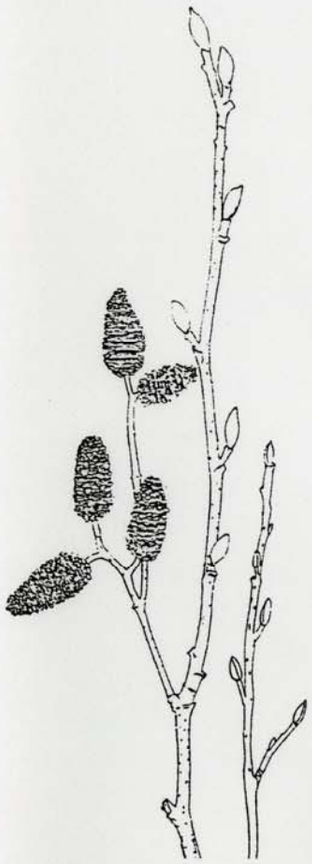
変　種

やまはんのき　var. glabra Call. (A. hirsuta var. sibirica C. K. Schn., A. incana var. glauca Regel)



ヤマハンノキの枝葉

ハリノキ，ハンノキ，ハリ，ハリギ，ハルノキ，コバハリノキ，ミヤマハリノキ，ヤマハリノキ，ノマハリ，ハノキ，ヤマハリ，スマハリ，ハキ，アカバリ，アカハン，アカハンノキ，アカハリ，クロハリ，ハンベ，アカッバリ，マルバハンノキ，カハラハンノキ，ヤチハンノキ，ヂハンノキ，ヌルバハンノキ，バン，ヤマハルノキ，バンノキ，ヤシャボ，ヤシャボノキ，ヤマヤシャノキ，ヤシャブシ，ヤジバ，ヤチバ，ヤッバ，ヤツバ，ヤツクハ，マチバ，ヤツグハ，ヤヅグハ，ブナノキ，サガミブナ，オホヤマブナ，ツチシバリ，サガシブナ，オカバ，アカギ，アツサ，アシカハ，メホソノキ，ケネ，キニ（以上2，アイヌ）サンオリナム，オリナム（以上2，朝鮮）山榿，木硯，山榛子。



ヤマハンノキの果枝と冬芽

幼枝無毛，葉下面無毛（時に脈上に少毛）著しく粉白色を呈するを特徴とする。実や樹皮の利用，産地等皆同じ。砂防用，地力維持用，下木用として有益な林業樹種であり，殊に朝鮮に於て最も多く用いられ半島の緑化に著しい貢献をしたものである，造園樹としては通常用いない。

こばのやまはんのき　var. microphylla Nakai (A. hirsuta var. microphylla Kusaka)

枝は一層密生，樹皮に光沢あり，葉は小形，葉柄及び葉下面に褐色絹毛あり，果実も小形，タニガハハンノキともいう，上高地，尾瀬，日光，福島，青森に多く，寒冷地のもので峰通，窪地に見る。朝鮮にもあり，満洲では栽植し臭梨と呼ぶ。青森県三戸地方では古来栽植された肥料木で著名，ヤマハンノキより生育よく，切替畑とし，農作物と輪作する。

えそやまはんのき　var. velutina Hara

幼枝，葉の上面に有毛，下面灰白乃至赤褐色細毛密生す。本州以北，朝鮮，満洲にあり，地方ではケヤ

マハンノキともいう。

やしゃぶし

Alnus firma S. et Z. (A. Yasha Matsum.. A. firma var. Yasha Winkl.)

ヤシャ，ヤシャノキ，オホヤシャブシ，ヤシャムシャ，ヤシャブシャ，ヤシャビシャ，ヤシャブナ，オホバヤシャブシ，ヤシャグス，ヤシャンボ，ヤシャビシャク，ヤシャボッチ，ヤシャハンノキ，ヤブシ，カワゥブシ，ハゲシバリ，ハギシバリ，ツチシバリ，ガケバリ，ハゲ，キブシ，フシ，フシノキ，フッチノキ，フチノキ，ニックゥゥブシ，イハシバ，ユワシバ，イハバ，ネハリシバ，ハゲラカクシ，アヅマ，ハンノキ，ハイノキ，ハルノキ，ブナ，オホバミネバリ，ヤナシデ，カハラシデ，ハゼ，ソゥバル，ソゥバリ，オハグロノキ，ヤシナラ，ツケナベ（これらの方言はオホバヤシャブシにもあたる）

小喬木，大灌木，高6m，径0.3m，樹皮灰褐色，肥厚，幼枝ジグザグ形，よく分岐し，灰褐形，初め少しく有毛，冬芽は紡錘形，稍彎曲，鱗片は暗紅褐色，光沢あり。葉は有柄（0.7～1.2cm）狭卵形，狭卵状三角形，円形，漸尖，鋭頭，円脚，低平にて短凸端に終る鋸歯と短凸端のみの鋸歯と交互に生じ，初め下面脈上及び時に上面に伏毛あり，後に毛は少しく残るか失う，下面帯青白色，脈は隆起す，長5～10cm，巾3～4.5cm，側脈は13～17双。果序卵状広楕円体，長15～20mm。白井博士は果序の大なるもの，径20～25mmで，葉も托葉も著しく広いものをオホヤシャブシと称した。本州，四国，九州の山地に生じ，暖地では落葉しないことがある。

オホバヤシャブシの枝葉

果実より褐色の染料をとつて衣を染める，黒八丈というのがそれであるがこれは必ずしも伊豆諸島のみの産でなく，東京西郊五日市方面で「いつがいつまで黒八織よ，やめるてだてはないかしら」という民謡にある通り地元大久野村でも弘化年間にこの染色を行つていたという，これは果実の煎汁に鉄分の多い泥土をまぜこの中に素地を一日2～3回つけて水洗すると染る，黒い光沢が強い。この果をヤマモモの皮と共に煎じその汁を明礬と混じて紙に塗ると淡褐色に染る，唐本の表色は昔はこうして作つた。ヤシャブシは山地土留，地力維持用にヒメヤシャブシと共に使はれる。

みやまやしゃぶし　var. hirtella Fr. et Sav.

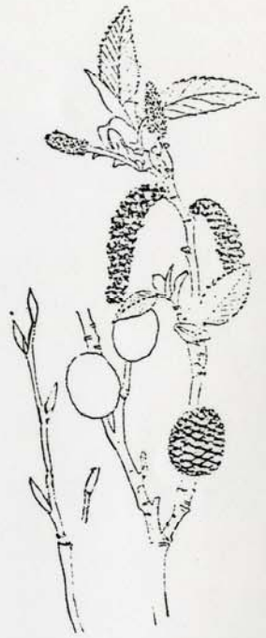
ニックゥゥブシ，ケヤシャブシ，ヤマハンノキ，ヤシャブシ

枝葉に毛の稍多いものをいう。朝鮮にも産する。

おほばやしゃぶし

Alnus Sieboldiana Matsum. (A. firma var. Sieboldiana Winkl.)

樹形，大さは前種に似る，枝は稍太く，黄褐色，灰褐色，無毛，よく分岐す（ヤシャブシは稍細く，幼時有毛）葉は卵形，三角状卵形，時に狭卵形，幼時下面脈上に伏毛あり，漸鋭又は短鋭尖，円脚，突起に終る重鋭鋸歯あり，上面時に帯紅緑色，下面淡緑色，光線にあてると銀粉を散らす如し，側脈12～15双（ヤシャブシは13～17）下面主脈の紅色のものあり，葉長6～10cm，巾3～6cm，ヤシャブシとは花穂の数を異にす，関東より近畿の沿海地方に生ず。八丈島の西山（八丈富士）に径0.5mのものが立つている。



オホバヤシャブシの花と果

ひめやしゃぶし

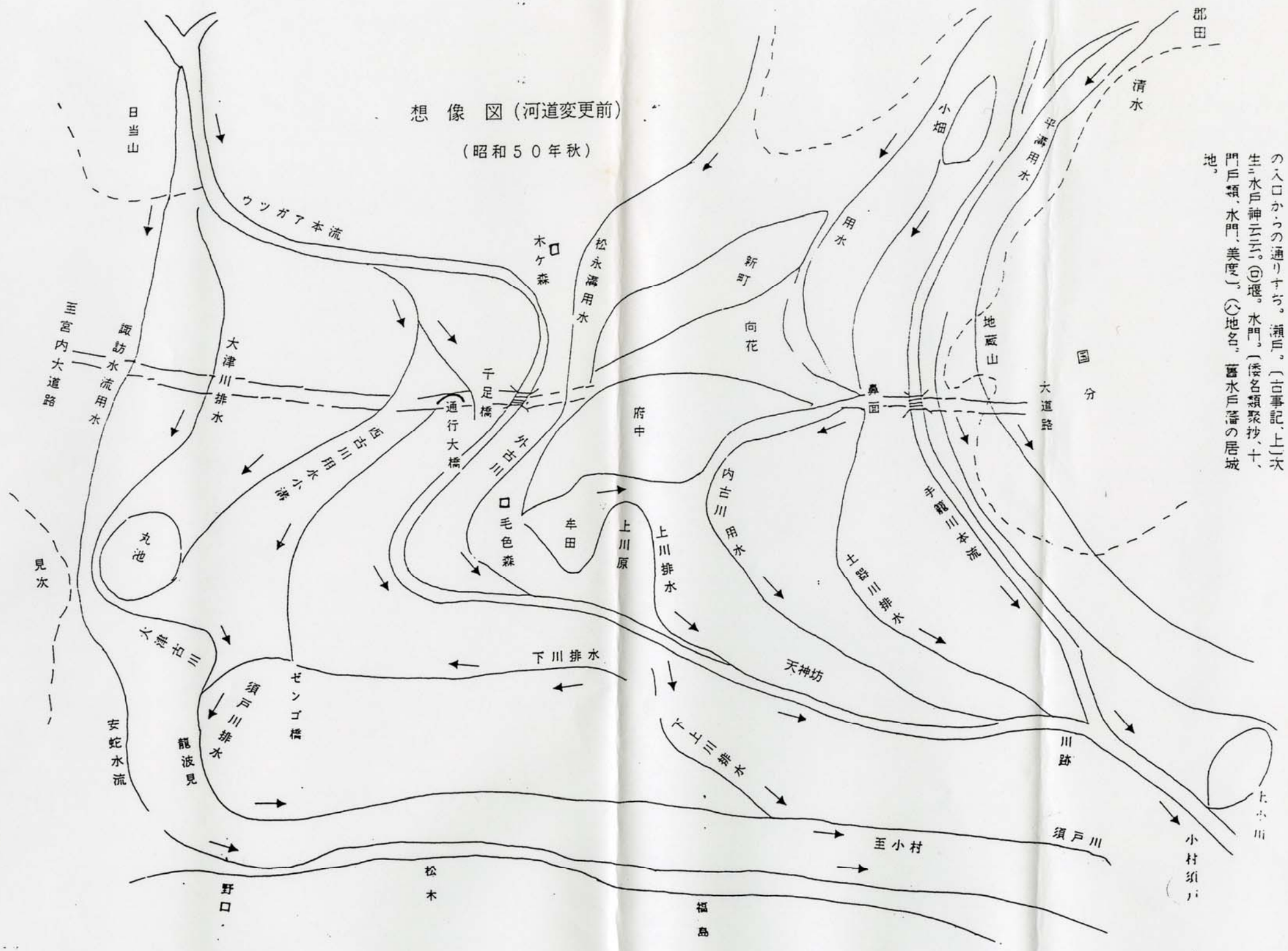
Alnus pendula Matsum. (A. multinervis Call., A. firma var. multinervis Regel)

ハゲシバリ，ツチシバリ，ハグシバリ，ヤマシバリ，イハシバリ，ガケシバリ，ジャリシバリ，ソゥバリ，ミネバリ，ハクサンミネバリ，コバリ，ヤシャヤシャブシ，ツチヤシャ，ヤシャノキ，ヤシャブシャ，ヤシャビシ，ミヤマヤシャブシ，ハゲ，ハゲカクシ，ヤチバハンノキ，ヒメハンノキ，ヂシバ，シバ，イハシバ，イハバ，イハバシバ，イハハゲ，マシバ，ニハシバ，ユワバ，イワバシバ，ドシャドメ，ヒラナラシ，メボソ，マルバヤナギ，フシノキ，ヤナシデ，イヌシデ，カハラシデ

ヒメヤシャブシの果枝

小喬木，灌木，稀に高7m，径0.3m，枝よく分岐し年々密生，肥地では10年で1株2m平方を被う，樹皮栗色，平滑，枝稍細く幼時有毛。冬芽は短柄，紡錘形，鱗片赤褐色，光沢，稍彎曲す。葉は狭卵，広披針形，ヤシャブシより細長，葉柄は有毛，長さ0.3～0.8cm，長鋭尖，広楔脚，突端に終る低平重鋸歯あり，下面淡緑色，脈上に伏毛あり，上面平滑，時に小粗毛あり側脈20～26双，下面に隆起す，葉長4～12cm，巾2～4.5cm，托葉は大形，時に宿存す。四五月開花，葉に先だつ，果穂は3～6個（ヤシャブシは2～1

国分府中誌（昭55）より



【水戸】239ページ ㊀水邊の家。（白居易、張常侍相訪詩）水戸廢不レ卷、風牀席自翻。㊁妓樓。女郎屋。（五雜組、人部四）隸二於官一者爲二樂戸一、又爲二水戸一（國初之制、綠二其巾一以示レ辱。（福惠全書、保甲部、驅二逐娼妓一）娼婦水戸一併責懲。㊂①海水が出入する口。又、大河が海に入る所。其の入口からの通りすぢ。瀬戸。（古事記、上）次生二水戸神一云云。㊃堰。水門。（倭名類聚抄、十、門戸類、水門、美度）。㊄地名。舊水戸藩の居城地。

地名研究会報

第５９号

平成１０年６月７日

鹿児島地名研究会

Ⅰ.第５９回例会　　平成９年１２月７日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・池田　純・臼木正昭・太田照夫・納　栄蔵・川野雄一・小山　更・小山田稔
中間さん・永井啓介・永坂芳彦・永田典男・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田功美子・
平田信芳・福元忠良・三善喜一郎・米原正晃（計１９名）

Ⅱ.『大日本地名辞書』読会。pp.1802～1803

【問題となった地名および事項】　国上・多祢の由来・塹泊・土人・駅謨郡

国上（くにがみ）

平田　安房について粟穂（あわほ）が「あんぼう」に訛ったというのは、なるほどと思います。例えば信有郷を「しなう」と読めば、シナが生えている（科生）の意味になります。「生（お）」と読む地名が屋久島にはいくつか見えますので、栗生・粟生・麦生はそのように理解すれば何とか解釈できます。屋久島の「ヤク」という意味は判りません。種子島の「タネ」は、米の種子に基づいたものと考えざるを得ません。

納　　１８０３ページの一番下の段、熊毛郷。その次に小さな字でカッコして国上と書いてありますね。その下のところ前から４行目に「熊毛祠なり、この地を国上と呼ぶ、国神の義にや」と書いてあります。カミの場合「上」の方がいいのじゃないかと思うのです。というのが、島の形から云って国上は島の上の方、北の方にあります。琉球列島に行けば沖縄本島だったかな。

平田　国頭と書く。

納　　国頭（くにがみ）と読ましてますね。それから下の方、南の方は島尻（しまじり）という。島尻という呼び方があります。確かにあすこには浦田神社がありますが、その神様よりも島の上、島の頭

多祢の由来

平田　国神の義なりというのは吉田東伍の解釈です。云われる通り国の上というのは都に近い方が上になる訳ですから、その地名だと解釈でいいでしょう。熊毛（くまげ）という意味は判りません。周防国にも熊毛郡というのがあります。１８０３ページになりますが、出雲国にも多祢郷というものがあります。その郷の由来は、稲の種子が此処に落ちて多祢と呼ぶようになった、と。種子島の場合も南の方から伝わって来たいわゆる赤米：ジャヴァニカ。その種子に因んだ地名だろうと思います。それと茎永（くきなが）というのもやっぱり稲の茎が長いという意味から付いた地名だと考えてよいでしょう。他に例がありませんが、茎永はそのように解釈してよいと思います。

小山　今云われた御蔵島（みくらじま）、伊豆七島の御蔵のことですね。島のことでしたね。

平田　出雲国風土記に多祢郷という郷がある。

小山　今おっしゃったのは伊豆の。

平田　今は１８０３ページの下の方を問題にしているのですが。

納　　タネの名の起こりですが、土地の人から聞いたのですが、種子と関係があることを云われた事を覚えています。

納　あそこは他所からの移住者が多いですね。

平田　種子島ですか。

納　はい。

平田　甑島あたりから行ってますよね。

納　私が聞いたのは、甑島」から移住した人、それから桜島から移住した人ですね。それから他所から商売人として入った人もおります。あすこの品物をいろいろ買い付けるために。

平田　あぁ。

納　種子島の場合、国上に桜島からの移住。桜園（さくらぞん）という部落があるのです。この辺が桜島から来たということです。それから西之表の奥になりますが、「鞍に勇」と書いて土地の人は鞍勇（くらざみ）と云います。この辺が甑島から入ったという話もあります。甑島の人もいうのですよ。俺達の分かれがあすこに行っているだろう、と。言葉を聞いてもアクセントなんかが甑島のアクセントと似ているのです。

平田　あゝ。

納　それで、移ったんじゃないかなと云う話もあります。

平田　それはあるでしょう。甑島から移ったのはいくつも記録がありますから。これは以前能勢さんが話したことですが、パラオ諸島の人たちが入植して「原尾」という地名を付けた。これは有名な話です。いろんな所の人がいるのでしょうけど、土着のひとがやっぱり多いでしょうね。相対的には。

納　相対的にはですね。

平田　それと今一つは、日蓮宗の寺が特徴的だということです。鹿児島県ではあまり見られない現象です。鉄砲伝来の時の当主、種子島時堯の娘が島津義久の奥方になって国分に来ます。それで国分に遠寿寺（おんじゅじ）という日蓮宗の寺が造られることになります。三国名勝図会を見ても日蓮宗の寺はそんなにありません。日蓮宗が盛んであったということが種子島の特色の一つになります。

それと移民が多かったこと。平安時代まで遡ればやはり流人の島であった。だから貴族・貴種が流されて住みついた、ということも云えると思います。幕末でも有名な人たちが流されて、そのまま亡くなっています。江戸時代の初めでは島津一族の女性で永俊尼という人が切支丹の疑いで流されますが、節を曲げなかったわけです。幕末ではいわゆるお由羅騒動の時のリーダー：山田清安の妻山田歌子が流されています。彼女は京都から来て、結婚三年ぐらいの時に流されてしまったのです。種子島で和歌を教えたことは有名な話です。

種子島の場合は思想犯というか政治犯が流されていますから、流人としては質のよい人たちが流されていた。そう言った意味で文化のレベルが高いと云えます。しかし種子島というのは南北約１００キロメートルぐらいあるわけでうから、トッピーの上から見ても種子島が見えてからが長いこと。

納　一周して、確か３６里と云やせんか。

平田　３６里ですか。

納　３６里と記憶している。

平田　もっとあるのじゃないかな。

納　狭い所で、２里というたか。

平田　あぁ、幅がですか。

納　幅が。

平田　あれは直線的にも長いですよ。トッピーで屋久島を出ると、すぐ種子島の門倉岬の沖に出ますが、それから西之表に着くまで延々と乗ってますからね。あれは長い島です。種子島に詳しい下野先生が見えておられたらもっと話題が出たのでしょうが。

塰泊（あまどまり）

納　西之表に塰泊という所があるのですが、海の下に土を書いてあります。「塰」。それで、この海と土を離して書くべきか、それともくっ付けて書くべきものか。

平田　さぁ、それはどうですかね。

納　あちらで使っている漢字では海と土がくっ付いとるんです。（板書）。こういうふうになっている。

小山　くっ付いています。。

納　他の何かでみたのでは、海と土でなく、下は士か。土じゃなくて「士」ですね。

小山　「士」ですか。

平田　「士」でしょう。

納　これは離すべきだ、と。海士と書いてアマと読むんだ、と書いてありました。どうしても私は判らんとですよ。

平田　それはもう理屈じゃない。われわれも判らんですよ。

納　これを塰（あま）と読むんですね。別にこういう蜑（あま）があるのです。

平田　アマというのは潜ってナガラメとかアワビをとった人たちでしょうけど。

納　そこは漁村です。大きなガジュマルもあります。土をくっ付けるべきか、離すべきか。

小山　両方あるのでは、別々じゃなくて。

平田　文字はあったと思うのですよ。

池田　鹿児と麑。麑という字も漢字が一緒になっている。

小山　そう、いろいろありますね。久米と粂。どちらもクメですからね。

平田　なるほど。

小山　色々あるのじゃないでしょうか。塰もあったのじゃないでしょうか。

池田　海士だったら、潜るアマだと考えられますよね。

納　その部落は漁村なんです。

平田　海士。海の男ですか。

小山　昔は印刷じゃなくて全部筆記でしょう。士が土に変わる可能性は多分あったと思うのです。厳密には判らないのじゃないでしょうか。誰かそれを研究されないと。

平田　最近、漢和辞典を引きませんが、諸橋漢和辞典に当たってみるか康熙字典に当たる以外に方法はないと思います。現在日本で使われている漢字は相当制限されて淘汰されていますからね。それと古文書を読むときに悩まされるのは現在使われていない異体漢字が沢山あることです。ですから、あまり神経質に考えなくても良いと思います。地名には現在の漢字にはないものを使っているものが多くあります。

納　この前は琉球が話題になりましたね。

平田　あれは当用漢字の責任です。先程の御蔵島はありましたか。

小山　いや、判りません。あれは飛ばしましょう。

土人（どじん）

永田　１８０４ページ、宮之浦のところに「土人」とありますが、土人という場合の範疇はどうなんですか。

平田　土地の人という意味でしょう。

永田　土地の人？

平田　原住民。

永田　土地の人。簡単に云えばそうですけど。どういう意義があるんですかね、他に。

平田　うーん。

小山　三国名勝図会は全部土人ですね。あれは、そう呼んだのじゃないでしょうか。別に大きな意味があったのじゃなくて。

平田　土地の人ということじゃないですか。差別的な意味ではないと思います。夷人雑類的な土人ではないと思います。

納　北海道のアイヌもそうですね。

平田　アイヌの土人法ですか。

納　土人法という場合、現在われわれが考えている、いわゆる土人とは違いますね。

平田　『大日本地名辞書』をずーっと見て見ないと、吉田東伍がどういう理解をしたかは云えませんけど。

永田　土着民ですかね。

平田　土着民と考えるのが自然でしょう。

永田　どの時点から土着の人というか。それも考えないと判らんですね。何代住めば土着の人になるのか。

平田　あぁ、他所者論議ですか。漢籍の場合、例えば史記や後漢書などの史書でも「土人」という表現を使っていますからね。漢文の場合はその土地に住んでいる人・原住民を土人と表現するのじゃないですか。読む時には差別用語としての土人感覚とは思われませんけど。

平田ｶ　１８０３ページの最後の行に「土人の土地の如くに」とありますから、まぁ土着の人。

平田　土着の人でいいと思います。

馭謨郡（こむぐん）

池田　馭謨郡のコムは何ですか。

平田　それは判りません。和名抄に出てくる郡名・郷名はほとんど意味が判らなくなっています。それを解釈するのはちょっと無理。

池田　あんな所の小さな島で、これを見ると二つの郡があるのですが。

平田　離れているし、一郡一郷という形でとらえたのでしょうね。

池田　地域が広すぎてまとめるのが出来ないから地形的な問題がありますね。

平田　簡単に連絡することはできませんからね。これは伊能忠敬の測量日記を読んで気付いたのですが、大隅国・薩摩国を測量する時、内之浦辺塚とか佐多辺塚などの隅々まで回っています。そして鹿児島を発って山川に行き、そこで大体十日から二週間待つのです。

屋久島から種子島に渡るときも安房でやはり１０日から２週間我慢するのです。そして順風を得て渡る。種子島から帰って来るときも西之表でじっくり待ちます。昔の人は風待ちとなると船頭の判断に任せきり。一般の人はあきらめて当たり前だと思っていたのじゃないでしょうか。島との連絡は順風を得たらぱっと朝出て夕方には着くような勢いで行っていたようです。実際は風待ちの期間が長かった。現在の人たちとは違った感覚で処理しなければならないでしょうから、一郡一郷という考え方は当然出て来ると思います。

池田　それから泊という地名が出て来たのでしょうから。

平田　泊というのは全部風待ちの港ですよ。

池田　それから来ているのでしょうね。

平田　他にありませんか。なければ前半はこれで終わりましょう。

徐福伝説と串木野の地

三善　喜一郎

平田　徐福。ジョフクと読んでもよいしジョフツと読んでもよろしいのです。今日の話は「徐福伝説と串木野の地」ということです。串木野市に徐福資料館というのを設けておられる三善喜一郎さんの話です。近くＭＢＣですかＫＫＢですか、徐福伝説のオペラをやるとのことで、参加者を募集しているようです。串木野市が積極的に宣伝する伝説です。三国名勝図会の冠嶽の項と紫尾山の項で徐福のことが書いてあります。古くから徐福伝説があったことが考えられます。

徐福は秦の始皇帝から不老不死の薬を手にいれろと命ぜられて蓬莱山にやって来るのですが、結局は手に入れることは出来ませんでした。しかし『今昔物語』では、手に入れて帰った時は始皇帝が死んでいたという形になっています。それほど有名な話です。また伝説というだけでなく、二十年ぐらい前ですかね、中国の学者が徐福は神武天皇だという説を真面目になって書いております。日本でも徐福に関心を払わなきゃいけないと思います。三国名勝図会にあるわけですから串木野の方が徐福伝説に関心をもたれるのは当然だと思います。今日はその意味で日本各地にある徐福伝説を含めて話して頂けるのではないかと思います。

三善　資料を二つ出しておきました。「徐福登陸の郷顕彰記」と「串木野市島平浦考証記」の二つです。今年の五月私は中国に行きまして、徐福の出生地だとか、この港から出たのだという所を見て来ました。中国では徐福ゆかりの地を５～６ケ所選んでおりますし、日本でも徐福伝承の地が２２ケ所あります。私が徐福のことに取り組んだ由来等については話しが長くなりますし、また本日の発表の目的でもありませんので省略します。

今日、徐福のことが全アジア的な話題になっています。そのきっかけは中国で全国土の地名調査が行なわれて、たまたま徐福村というのが発見され、そこから中国でも徐福のことが大きく取り沙汰されたようです。

私はさきに徐福を尋ね探り、『伝説の人、徐福を訪ねて』、この本を４～５年前に書きました。世の中は、まさしくわが意を得たりというような状況になって来ました。先程話があったように、台湾や香港あたりの学者が徐福は神武天皇だと云っております。昔は徐福のことを研究するのもはばかっていなければならないような国体観念でした

私は若い時に旧満州国で特高警察に関係していたので、こんな問題を口にしたら日本の警備課や警察の警備あたりはどうするだろうか、今云ったら捕まらせんかな、と思っていました。われわれは皇国史観に基づいた歴史しか知らないからです。

串木野に徐福が来たことは『三国名勝図会』にも引かれておったことですが、徐福のことを云うだけでも思想的にこわいなぁという感じがあって表面には出せない問題でした。日中友好平和条約が成った時、そういう噂は出てはおったのですが、日本の学者は口をつぐんでいました。

私は満州から引き上げて来て、事項該当で逮捕されるのじゃないか、公職追放は免れない、いつかはひっつかまる、と危惧を感じていました。そのような中で兵庫県の警察学校に入りました。昭和２１年・２２年の頃です。その時代まではＧＨＱからにらまれて公職追放をまともに受けたのが監視の下士官兵あるいは特高警察の警部補以上の人。ほとんどが公職追放を受けております。私にもそういうこわさがあったし、またどうせ捕まるのならば日本の豚箱に入った方が友人が面倒を見てくれるだろう、アメリカやソ連に引っ張られるほどでもないと考えて兵庫県の警察に潜り込んだ次第です。帝国憲法の最後の警察学校、そして新憲法の第１期の警察学校出身になります。

そういう形で兵庫県の警察学校を出まして、芦屋警察署の深江という駐在所に勤めました。当時、兵庫県で戒厳令が布かれたことを皆さんはご存じですか。戒厳令が施行されたことなどご存じでないと思います。朝鮮戦争勃発時、北朝鮮の朝連と韓国の民団と、二つあったわけです。北朝鮮はいわゆる共産勢力、韓国はまぁ自由主義側です。その時に北朝鮮の役員の人達をひっつかまえてトラックで六甲山の方に送ったことがあります。進駐軍がまだ幅を利かせている時分は、中国のことを云ったり、共産党・共産主義国家のことを話したりすることも危な

い時期でした。

徐福のことは早くから少々は知っておったのですけど警察界の思想取り締まりを知っていましたから徐福のことは出す時代ではないと思っていました。そういう中で私は内々、徐福はひょっとしたら神武天皇じゃないかなとの観点から日本の古代史を見ていました。そしたら「徐福は神武天皇なり」という説を中国のエイ・テイコウ（永廷高？）という人がまず出されました。現在台湾におられる方ですが、日本の工科学校の機械科を出たコ・ショウショウ（胡尚章？）という人がそれに続きました。私が市役所に勤めている時に、その人が偶々冠嶽に徐福の伝説があるそうだがと調べに来られました。宮崎市内で測量事務所に勤めておられるという息子さんを連れて来られ、その時にいろいろ話を聞きました。その先生から神武天皇＝徐福という十いくつかの例をあげた資料を貰いましたが、そう言った書類も私は持っております。それを読むと、なんだやっぱりと思います。われわれが小学校で習った天孫降臨の話、ニニギノミコトが高千穂峰に天から降って来てその孫が神武天皇になる。天から人が降って来た話を、われわれは歴史的にも不思議にも思わず、ずーっとそのまま信じていました。私なんかは不惜身の命をかけて大東亜戦争で戦ったわけですが、われわれはだまされてこんな馬鹿なことをやったんだなともまだ昭和２０年代には云えませんでした。そういう一般的な風潮の中で私はひそかに徐福伝説のある所を探っていました。

現在は日中友好の盟約が成って、どこもかしこも徐福のことを一生懸命に宣伝しているのです。佐賀県では佐賀県徐福会というのが出来ております。それから和歌山には徐福の墓があると大いに宣伝しております。京都府の伊根町という所では、ここに徐福が上陸したんだと盛んに云ってるし、富士吉田市では、徐福がかいたという文献が公開される時代になって来ました。浅間神社の宮司の家にあった防空壕みたいな所で、此処は絶対に開けたらいかんと云い伝えられていたためにその文献が保存されて来たのです。私ども日本徐福会としてもその書類を点検しようということになり、私も行ってその文書を見ました。それはいろんな本に内容が紹介されております。兎に角、徐福が日本に来た一族の名前を書上げた文書が、浅間神社の宮司の家に保存されていたのです。これは「富士文書」と呼ばれる古文書です。今まで世に出なかったものが公開されるようになりました。

天皇・皇后が中国に行かれた時に、西安にも行かれました。西安には碑林公園（西安碑林）というのがあります。中国全土に八千本ぐらいの記念碑があるそうですが、そのうちの六千本を集めてあります。石の公園と云われるぐらいにあるわけです。その中に「平成」という日本の年号の原書になる碑もあります。それを天皇・皇后が見て揮毫された「明仁」という刻文の拓本を私は西安でもらい、それを大事に持っております。

兎に角日本では、徐福に関係する古文書はすべて抹殺されています。そういうことで私どもは徐福のことをあまり知らない。冠嶽の徐福伝説、蘇我馬子の伝説、これらは旧事記によるということが書いてあります。旧事記とは先代旧事記ですかね？

平田　先代旧事本紀。

三善　旧事本紀。これは現在、天理大学の図書館にあり、国宝になっている文書だそうです。『三国名勝図会』の冠嶽と紫尾山のことは、これによって書かれたとあります。私は定年で辞める直前、串木野市の図書館長でした。旧事本紀を見たいと考えて取り寄せたことがあります。何巻かあって、しかも漢文でとても読めないのです。旧事本紀のどこに冠嶽のことが書いてあるのか、突き止めようと思ったのですが、一冊の本の中では見当たりませんでした。

旧事本紀は聖徳太子の頃、蘇我馬子が主になって仏教を主体に書いた本のようです。

私が徐福に取り組んだ経緯はいろいろあるわけです。五年前、この本を出した時も、関心のある人が訪ねて来ていろいろ話を聞きました。それと日本で徐福の伝説がある所があっちにもこっちにも出て来て現在２２か所あります。中国の方でも俺の所で船を造ったんだ、俺の所で徐福が生まれたんだ、始皇帝に不老不死の薬をとの命令を受けたのは琅邪台の此処だったとか、あるいは三千人の童男童女を集めて訓練した所は此処ですよとかいろいろで、徐福が船を出したという所も三つ四つあります。

今年の五月、行った所は杭州湾沿いの慈渓という所です。そこに達峯山という山もあります。四百メートルぐらいの山で、とても連れて行ってもらえる状態ではなかったわけですが、日本から八十歳の老人が来るのだから是非登ってもらいたいと駕篭を作って待っていました。その駕篭に乗って慈渓の若者五人が私を担いで約７キロ、山を見せてもらいました。登ってみたら、羽田孜元総理：羽田代議士の書かれた徐福の石碑がありました。現在は羽田となっていますが元々は秦（はた）だったそうです。武田信玄と真田昌幸が戦った時、負けた真田方に付いていた羽田さんの先祖がこんな名前はいかんと現在の書き方に変えたそうです。羽田総理の従兄で羽田計樹という方と十五日間同じホテルに泊まりました。その方は愛親覚羅氏：満州国皇帝の弟薄傑の侍従武官をした人で、皇帝の弟と一緒にロシアに連行されようとしたけれども、うまく逃げることが出来たのだそうです。１２月初めか１１月の末に串木野に来たいという連絡があったのですが、富山の方に出かける北陸旅行と重なり駄目だ、と。来る時は羽田元総理を連れて来なさい、そうしたら串木野は徐福のことで名が知れる、と。また、来年４月に先程話があった東京オペラが徐福のことを主題にしたオペラを組むことになっているから、その時には羽田元総理を連れて来られたら徐福のことが注目される機会になるだろうからということを連絡しました。

それと、江蘇省連雲港市で徐福が生まれたというニュースがありました。１９８２～８３年頃だったと思います。

日本の徐福会について触れますと、巌谷大四先生が会長、作家の飯野孝宥先生が理事長になっておられます。東京で日本徐福会が結成された時に私も行きました。「島平浦考証」に中にその経緯を書いてあります。今年の５月、第５回国際シンポジウムがあった時に、串木野の徐福のことについて話してみないかという招待もありまして作ったのが「登陸の郷顕彰記」になります。これを日本徐福会に出したら、通訳の方からこれは２０分かかり、通訳すると４０分になるから縮めて欲しいということで「島平考証記」に縮めたわけです。中国語に翻訳したものが広い紙のものです。

そして今度は、平田先生の方から徐福と串木野の地名に関しての話をして欲しいとのことでした。これは早くから一応まとめておったわけで、この程度の話をすればいいのだろうと快諾しました。今日は地名研究会ですので、徐福に因んだ地名について二・三説明をしたいと思います。

先程、種子・屋久の中で少彦名命のこととか桂庵玄樹のこともちょっと出て来たようですが、地名の研究はどっちかというと考古学よりも我々がずーっと先祖から聞いた地名の方がより正確なものがあるんじゃなかろうか、という気持を以前から持っておりまして、串木野でも郷土史研究会の中に地名調査の班を作って地名調査を進めて来ました。こうゆったものは大事なことですが、興味を持つ学者先生もすくないようですし、活動も進んでおりません。しかし、各市町村の要覧を読んでみますと、まずその

土地の沿革というのが書かれておるわけです。

私は市役所に二十数年勤めていましたが、今ばやりの基本構想とか基本計画とか、企画主幹として串木野の沿革などにも頭を突っ込みました。串木野の名の起こりは１ページにもあるように越木野ということと、冠嶽神社の祭神が素戔嗚命であり、スサノオノミコトの別名クシケノノミコトに由来することなどを知りました。吹上浜の北端が長崎鼻で、そこに現在「さのさ荘」という国民宿舎があります。その付近の森が「越木野」ということを書いた本があります（『日本の地名の起こり』？）。そこにたまたま大人跡（うしとあと）という字名が残っております。「ウシトアト」一帯は墓地ですが、そこを区画整理して市営墓地にした時に甕棺が４個出たという話を聞きました。「主さん、この甕棺は何じゃろうか、四つでたが」と。当時は甕棺のことなど何も知りませんでした。吉野ケ里で甕棺三千個が並んでおったことから甕棺の意義も判って来たのですがその頃知っておれば甕棺を大事にとっておいたのですけれども。何か宝物を入れて埋めたんじゃなかろかい。何が入っちょったね、と。墓地係長の話では水が入っとった、それと砂が入っとった、と。まぁそういう程度でした。昔は串木野の漁民が漁に行って遭難した時は死骸が腐るっから水甕に入れて持って帰ってそのまま埋めたという話があったからそれじゃなかろうか、というぐらいなことをいうて深くタッチしなかったわけです。

吉野ケ里が有名になり行ってみましたが、ああこれが串木野にもあったのだなと思いました。弥生時代の集落があったに相違ないと考えるようになりました。吉野ケ里が環濠集落であったことから大人跡を考えると、串木野高等学校の運動場・市役所・郵便局の一帯は一つの段丘になっております。流川（ながれご）というのがその集落の北側を流れておりますし、南側には石川河（いしかわご）という溝があります。集落があり、大人跡という地名があって甕棺が出たり。それから郷之原という台地では石器や土器類が出て来ます。串木野は大体そういう文化的な古代的なものに興味をもつ人は少ないのですが、串木野という地名の起こり、大人跡という地名などから考えると、此処には古くから人が住んでおった。そして２２００年前に徐福が来た、と云えます。

行政当局は冠嶽ばっかり云いますけど、私は前の塚田市長にも云いました。徐福は飛んで来たのじゃないのだ、船で来たとすれば、船が着いた所から顕彰すべきではないか、と。現在も浜競馬があり、照島神社もあります。子供の頃、照島には皮の靴を履いた中国から流れ着いた神様がおられる、この神様は子供の神様で子供好きであったと聞いて育ちました。照島神社の社伝を調べますと、造像の神様、漁労・航海の神様などいろんな七つ八つの功徳が掲げてあります。ある人は云うのです。照島の神様はめずらし、いろいろな功徳を持った神様じゃっち。これはどうしたわけじゃろかい」と。大巳貴神・大山祇命・少彦名命、三柱の神様を祀ったのが照島神社だと神社の沿革にはあります。その中で少彦名命は外国渡来の神様、外国（とっくに）の神様といわれています。大国主命（大巳貴命）と力を合わせて国土作りをされたのだ、と社伝には書いてあります。

この少彦名命が徐福ではないか、と。私はそういう感じを持つと同時に、子供の頃それと似通った話も聞いておったわけです。私は若い頃牡丹江からずーっと入った東支鉄道の綏芬河・東寧に、１０年ばかり、わが青春を埋めるというような形で警察に勤めておりました。当時は牡丹江から先は未だ中国人も入れなかったのですが、汽車の中で県の教育長という方と同席し、いろいろ話したら徐福の話は今見ていた小説に書いてありますよ、とのことでした。徐福は実在の人ですかと聞くと、始皇帝との関係を教えてくれました。そして私に東満の旅行記念と

いうことでその本に署名してくれました。今でもそれを持っております。その時に徐福は実在の人であったいう確信が得られて、それからは徐福伝説のある所をずーっと見て来ました。

たまたま和歌山県新宮市に行った時に「秦徐福之墓」というのを見ました。徐福のことを書いた碑があり、あぁこれだと帳面に書きよったところが、若い青年が来まして何をされているのですかという。徐福のことを調べに来たのでこの碑を写すのだ、というと、そんなことはしなくても市役所に来て下さい、徐福に関するいろんな資料がありますよ、というてくれたのが新宮市の観光課長だったわけです。そして新宮市役所で徐福に関するいろんな資料をもらいました。徐福が来たればこそ、此処に墓もあるんだなと感じました。あすこでは徐福が紙漉きのこと、捕鯨の技術を教えた、と盛んに宣伝しています。徐福の顕彰ということよりも、むしろ観光の面で取り上げています。徐福の墓は新宮駅の１００メートルちょっと前の方、２００メートルぐらいですか。その当時はまだ当局も力を入れていなかったのですが、最近は徐福公園というのが造られ立派な中国風の門が出来ております。そして元中学校の校長をされていた方が資料館長をしておられます。徐福・徐福というて来られるもんだから俺も一つ勉強せにゃいかんと、張り切っておられます。奥野という先生で、もう８７～８８歳ですか、まだ元気で徐福のことを研究されています。その方などと一緒に日本徐福会を東京で設立したわけです。その後は日本の文献よりも中国の方に後漢書東夷伝とか史記とか、いろんな歴史書がありますので、むしろ中国側から眺めようとしています。日本はまだそういう文字もなかった時代ですから当然と考えます。

われわれは日本の歴史を見る時、日本書紀か古事記によって日本の国体というものを理解しておったわけですけれども、最近は堂々と日本書紀は８割、古事記は５割が嘘だ、という本が出ております。『日本正史』という本で、堂々と書店に出ております。それ以来私は日本書紀・古事記は読むに足らずと考えております。

去年、佐賀で徐福会の定例会がありました。私は佐賀県徐福会の幹事にもなっておりますし、会の度に召集もありまして、時々行っております。その時の話ですが、兎に角われわれ日本人は今まで教えらた日本書紀・古事記を頭に入れない方が良い。こんな生知れんことを知っているから間違った歴史観が生まれたんだという説明を聞きました。それ以来私は日本書紀・古事記には目を向けておりませんし、古代のことは日本には文字もなければ記録もないのだから、五千年の歴史のある中国の側に視点を変えて日本という世界を見ないと判らない、と考えるようになりました。

もうそろそろ神武天皇は徐福だぞ、というても咎める人はいないだろうという気持を持ったのが十年ぐらい前です。しかし、そういう話を串木野あたりですると、頭が変になったな、巻ききったなと未だに侮蔑を受けておるわけです。たまたま東京オペラが来て歌劇をやることになって皆が知るようになりました。ＮＨＫが東京オペラと合同で徐福の勉強会をやるから来てくれということで東京に行きました。各地における徐福研究家、徐福伝承のある（地の）行政の人たちが集まっていろんな議論をした時に、ＮＨＫが密着取材をしてくれました。その時にもいろいろな資料を持って行って、そう言う話をしたわけです。私は徐福が鹿児島県に、別けても串木野に上陸したという視点を据えて、この地名の問題、いろんな歴史を見ない限り、日本の本当の歴史は成立しないと考えております。まだ鹿児島県では徐福というものを浦島太郎や花咲爺、かぐや姫みたいなあんな物語的にしか理解していないもんだから歴史が解けていかない、と思っているわけです。

別けても、地名調査につきましては平田先生の本なんかを読んでもそうだと思います。地名調査から歴史をたぐっていくのが本当にわれわれが納得出来る学問だと、私も自信を持ったわけです。

「串木野への徐福渡来と地名」ということについて二・三あげてみます。お手元にプリントがありますから、これはゆっくりお読み頂き、判らないことはお尋ね下さい。来年の４月、北京で日中友好の記念で、徐福部会というのが特に出来るそうです。それにも行きますので、串木野と徐福、鹿児島県と徐福を宣伝しようと考えています。徐福が来たればこそ日本に初めて文化的なものが育って来たのだ、と。簡単に云えば、味噌・醤油は徐福が来て教えたのだ。神武天皇が持っている刀、日本に製鉄の技術があったのだろうか。耳津の浜から御東征の時に船に乗って行かれたが、そういう船が日本で出来ただろうか。あるいは男軍・女軍という軍隊を統率する指導・統率する知恵が当時の日本人にあっただろうか。そういうようないろんなことを考えると徐福こそ日本の古代史の出発点にある人物であり、その曙光を持って来た地が鹿児島で、別けても串木野である。中国の戦国時代に負けた武将はほとんど日本に亡命して来たそうですが、この吹上海岸にたどり着いています。

市来に「江夏」という姓があります。姶良郡には江夏百貨店があります。あの先祖も中国の江夏という所から来たとの云い伝えがあります。加治木に島津さんが城を造られた時にも、江夏の先祖がいろんな方位とか縄引きとかをした技術者だったということです。江夏さんの先祖の墓にも行って来ましたが、中国との関係が深いと思いました。江夏さん自身も大体そう思っておられます。野球の江夏投手も本来は「コウカ」だ、と。「コウカ」は市来に来たと云っておられます。それは兎も角、中国に一番近いのが、わが薩摩半島、吹上海岸。金峰町にしても加世田にしても野間池にしても、いにしえの時代の交流の地はやはり薩摩半島だ、と云える。その眼で日本の歴史を見ない限り行き詰まってしまう。徐福が三千人という百工技芸の士を連れて来た、船を造ること、米を作ること、製鉄・冶金、それから味噌・醤油の醸造、そして漁労など。あらゆる古代の文化をもたらしたのが徐福であると云える。そういう日本の文化の流れをみれば、やはり邪馬台国が大和にあるんだとか北九州とか、どうとかこうとか云う中で、上野原遺跡が９５００年前の村だったという話を聞いて、私は、やった、と喜びを感じたわけです。日本古代の発祥はわが薩摩にある、と。この考えで云っても良い頃だ、と。今までそんな事を云うたら馬鹿じゃなかろうか、頭の方は大丈夫かということが多かったようです。

私は地名から見て、そこを掘ってみると必ず遺跡が出て来る。現在はそこを掘って埋蔵文化財を見て見ないと承知しないのですが、地名というのは埋蔵文化財以前に摩滅しないで残っています。地名・地字という観点でこの会を平田先生が始められてからず一っと遅れてこの席に入って勉強しているわけです。地名から考えても、２２００年前：紀元前２世紀に三千人の中国のエリートが日本に来たんだと云えます。そのことから文化が始まったという歴史観をもって日本を眺めると、大和にある政権が、日本武尊がどうして日当山に来たのか、和気清麻呂が来たとかが自然に理解できるわけです。ただ日本には神と仏のいろんな問題がありますが、まつろわぬ者が熊襲・隼人。これこそが先程話があった土人であり、われわれの先祖だと私は思っているわけです。

私どもは去年あたりから徐福元年というたとえで世間を見ています。鹿児島県でもいつかは徐福の問題が花咲く時代が来るのじゃなかろうかと思います。先程出ました種子・屋久の問題で、タネは種子という話がありましたが、稲を持って来たのが徐福だと

云われています。徐福が五穀の種子を持って来たとはっきり書いてあるわけです。稲作りが始まって日本は弥生時代になるわけですが、稲作りはどこで始まったかという問題は、やはり順序から云って種子島だと思います。種子という字の意味から考えてそう思うのです。

話は別になりますが、冠嶽の山の上に「五反坂」という所があります。そこには水も流れています。串木野には五反田川という川が流れていますが、あれは本当は「五反岳川」です。私は県主催の会で五反田川は間違い、五反岳川だ、地図に載っていると云うたら、県の秘書課長から口止めされました。そのことはよく知らないので、この会では発表してくれるな、と。大河ドラマ「翔ぶが如く」が宣伝された時に出来た県観光協会の地図にも五反坂川とある。五反田川とは書いてないのです。

平田　もう時間がありませんので。

三善　徐福のことは今後鹿児島県でも大きく取り上げられると思います。私が約５０年ぐらいに亘ってこのこと一筋に集めた資料等がありますので串木野にお出での節はお立ち寄りください。

平田　日本徐福会理事でもあり、いろいろ集めておられるようです。串木野に行かれたら資料館にもお出かけ下さい。次の会がひかえており時間がありませんが、何か質問・意見がありましたら出して下さい。

〔質疑応答〕

小山　先日、ＮＨＫがやってましたよ。徐福の生地を見つけたという番組を。

平田　中国の方で徐福研究が盛んになって来ていますから話題になると思います。中国からやって来るルートを考えると遣唐使の道が参考になります。遣唐使船はほとんど鹿児島県にたどり着いていますから鹿児島県が話題になると思います。鹿児島県と徐福の結びつきを強調する説が出て来るだろうと思います。

今日の締めくくりをしておきます。大人跡（うしとあと）の話が出て来ましたが、これは巨人伝説の一つで大人足形（おおひとあしかた）とか大人形（おおひとかた）、そういう地名が鹿児島県に１４ケ所ぐらいあります。それと同じぐらいに「弥五郎」という地名も１４ケ所。鹿児島県には巨人伝説の地名が都合２８ケ所あります。

それから、越木野が串木野に訛るというのはちょっと行き過ぎじゃないかと思います。串木野と同じような地名、桃木野・桑木野それから栗木野、チャチャノキ野。そういう「キノ」地名が鹿児島県には２３ケ所あります。川辺の庭月野もその一種だと思います。この「木野」が何であるのか。奄美の方では「キナ・チナ」というのは開墾・焼き畑を示す地名と云っていますが、桑木野・桃木野などから考えると、そういう「木が生えている野」と理解してよいと思います。その場合、「クシ」という木があるのか。それが謎です。

邪馬台国問題は３世紀ですが、徐福はそれからさらに５００年ぐらい遡ります。史記の始皇本紀にも徐福のことが書いてありますし、後漢書にも書いてあります。それから北畠親房の神皇正統記も徐福のことを取り上げております。最近中国でも注目されている、と。徐福はそういう存在です。今後は中国の方から地名を見ていかなければならないだろうと思います。そう言った意味で興味のある話でした。今日はこれで終わります。

鹿児島地名研究会会員名簿

平成１０年６月７日現在

青柳　俊二
池田　礒男
池田　純
上野　尭史
江之口汎生
江平　望
尾嵜　一治
小川　秀直
小山田　稔
大田　照夫
納　栄蔵
片岡　八郎
上赤　一豊
唐鎌　祐祥
川野　雄一
川崎　幸義
霧島　一浩
小園　公雄
小原　親英
小山　更
木場　武則
佐野　武則
坂本　誠
下野　敏見
染川　一幸
永井　啓介
永坂　芳彦
永田　典男
能勢　正之
長谷川順一
花園　正志
花田　潔
原口　泉
肥後　芳尚
平田功美子
平田　信芳
藤浪三千尋
二見　剛史
本田　親虎
本田　碩孝
松田　誠
松浪　由安
松山　健
三木　靖
村山　謙一
山崎　盛隆
与倉　辰夫
吉原　林昭
米原　正晃

鹿儿岛县串木野市私设徐福资料馆主持人
日本徐福会　三善喜一郎

一、日本徐福会成立时，我是在东京丸之内的东京商工会议所八楼召开成立大会时的发起人之一。从那以后，我尽自己的最大努力弘扬徐福方士的日本渡来及其功德。
我出生于一九一六年六月，已经是八十一岁的老朽了。
我的出生地传说是徐福的登陆地点，九州西海岸吹上沙丘的北限地（北纬31度，上海的正东方向）的串木野市岛平浦。

二、日本研究徐福渡日的大家羽田武荣先生在他的著作（徐福浪漫）的七十四页上，对串木市做过详细介绍，请大家参照。

三、方士徐福在串木野市岛平浦（屋敷港）上陆后，据说得到了（史记）上所说的平原广泽之地称王，并举行了封禅大典。还留下了地名、地字和遗迹。
我通过文献资料和遗迹考察了解到的有关徐福方士登陆后，经过那些路途到达冠岳，又是怎样从紫尾山到达宫崎到达熊野（新宫市）到达富士山麓（山梨县富士吉田市）的情况，今天在这里就不谈了。

四、然而，今天能有机会在中国参加千宣城徐福国际学术研讨会，向大家介绍我所知道的徐福渡日的史实，我感到光荣，在此向主办这次研讨会的各位先生表示深深的谢意。

五、在今天的研讨会上，我作为一名日本的徐福研究者，想在此介绍几个一直没有人研究的问题。
①相邻的市来町乡土志八百三十九页的河上系图资料有下述记载"大藏氏者，汉高祖十五代后胤，后汉考灵帝之孙＝阿知王其子阿多倍，辞汉家而入和国，任内大臣，嫁齐明天皇，女帝产三王子……"
②在连云港市花果山南麓有古迹"阿育王塔"。
③据冠岳顶峰院文书记载，串木野市指定，串木野市冠岳的开山，开基者阿子丸仙人为保护文物。
阿知王、阿多倍＝阿育王＝阿子丸仙人等古代人物之间有什么关联？

六、徐福从慈溪市达蓬山出发来日本。在日本秦波止这个地方登陆后，位于其东方的串木野市的齐连山可以不可以说是徐福的望乡之所呢？

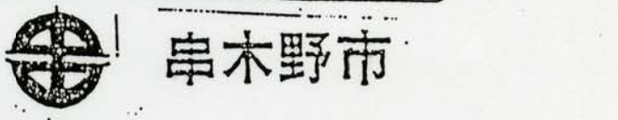
七、与市来町相邻有一个东市来町，据东市来町的乡土志记载（一四五页）在东市来町字上养母和下养母的交界处，朝南的山坡上有一个太秦神社，祭祀的是秦始皇。在日本只有京都和养母这两地有这种神社。
从冠岳往东，有与徐福的时代有关系的市来贝冢和挖掘出黑曜石的山。
至于市来町这一地名，如果把徐福称为徐市，那么毫不掺假地可以说，这里是徐福＝徐市到来的町。

八、传说徐福出航的各地的各港口，韩国济州岛的朝天浦、西归浦的海口部的地象和岛平浦的地象海象完全相像。从瑕邪台眺望大海和从冠岳眺望、从孔望山眺望东部大海之间的相像，如果不是实地来串木野市考察是不会知道的。
前些时，佐贺县徐福会事务局长村冈央麻女士来到串木野市参观后，来信说："看来徐福最先是在串木野市上陆的。串木野市应该满怀自信搞成一个新的观光地点。"

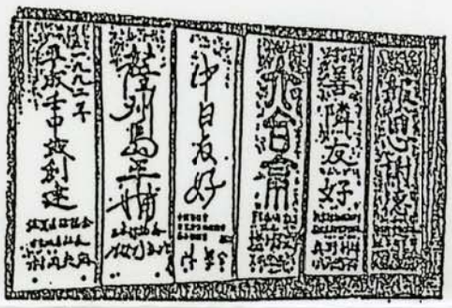
九、徐福登陆之乡、我现在的居住地，不知是出于尊敬还是出于蔑视，被周围的人称作"岛平班固"或"小濑班固"。这和中国汉代的历史学者班固是否有什么联系？

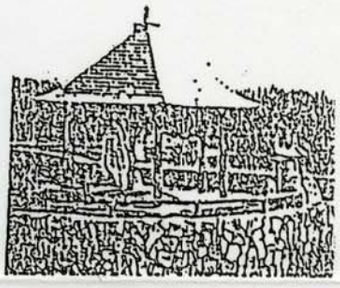
十、被称之为秦屋敷、秦邑（yi）的地方是对于至高至尊的徐福的尊称吗？此外，还有"前尊""后尊"这样的地名。

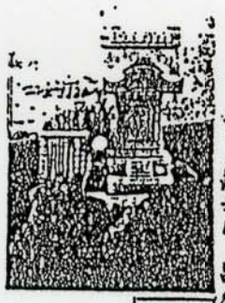
我期待贵国的徐福研究家能到串木野市来进行实地考察。以上我讲了我所知道的关于徐福的情况和提议，希望诸位能进行情况调查，在此结束我的报告。谢谢。



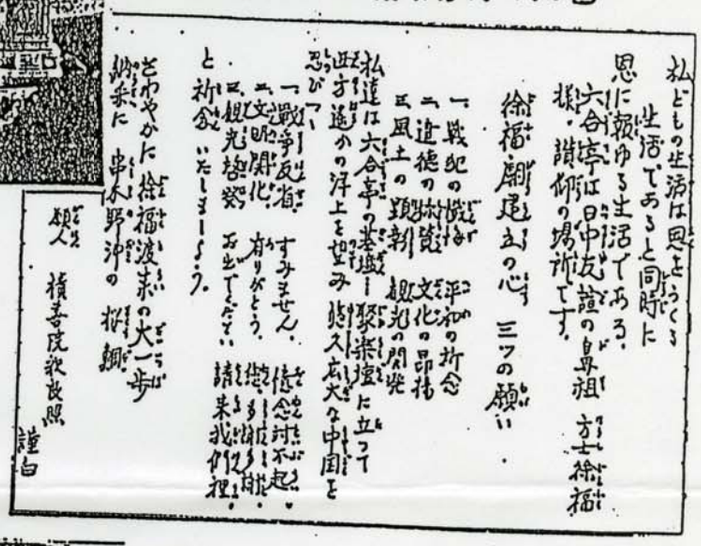
從一神人來脱冠　仙工景象遶天壇

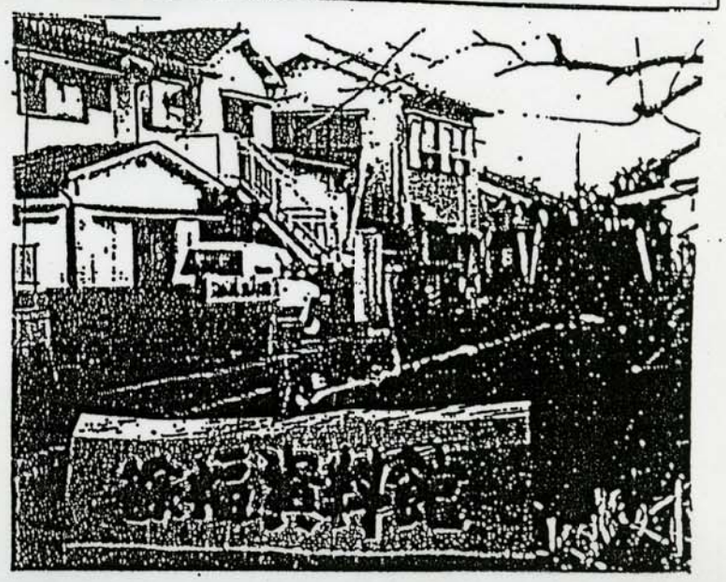






日本肇国の幕開けの地





方士徐福を訪ね・探り求めて20年！

① 串木野市照島海岸に上陸	○ 串木野市照島海岸は会稽、東冶の東（上海の東480海里）に在る。 ○ 登陸の地照島に奏波止（しんばと）と称する波止あり。ここに古い宮柱の跡と思はれる遺跡もある（字須賀） ○ 照島神社。祭神は樂师方士、少名彦那命（外国渡來神）。 ○ 松尾大明神詞（渡來人奏族の氏神を祀る）。	
② 遡行経路～西岳に至る	○ 神の川（醉之尾川）須納瀬（須賀川）五反坂川（五反田川） ○ ～生福（王子脇）冠岳（王子廟）あり。 花川～祓川～東岳～中岳～西岳～阿弥陀堂	
③ 栖止（しばらく住む意）	○ 大人跡（うしとのあと）という地字あり。現在市民勤労者体育館所在地附近。 ○ 班部の墓（はんべのはか）地字大人跡の西端に在り かめ棺四体出土 … 現況は住宅地となる。 ○ 班固　島平、小瀬集落住民への古称 ○ 環濠集落 … 郷之原台地（北 … 流れ溝 南 … 石川山溝 に囲（かこま）る 現況　市役所、市民文化センター県立串木野高校が所在する。 この附近より多数の土器、石器出土。 ○ 遺跡　村の下遺跡、城ケ崎遺跡、井手下遺跡 後期縄文、弥生期の土、石器出土の地 ○ 守山（モイヤマ）、中尾の森　史跡地あり	
④ 平原広沢の王となる封禪の地	○ 川内市隈之城平野。入來院。祁答院、市來院、伊集院などの穀倉地帯を府瞰一望出来る冠岳頂峯院。 院宣の地　冠岳　三岳の頂上に祭祀の跡。それぞれ山上は平坦なり ○ 冠岳神社の祭神は、櫛御気野命（くしみけのみこと） 別名　須佐野男之命 ○ 串木野の地名の起りは語原アイヌ語でクシキシキネ 芦原（あしはら）を越えて行く地形の意といわれる。 ○ 桂庵禪师（1427～1508）の文詩 徐福曽従海外來　　初知日域是遙來。 従一神人來脫冠　　仙工景象遶天壇。 ○ 西岳の下に平坦なる地あり。ここに天狗岩と称する重ね石の遺跡〃天壇跡あり ○ 西岳516m頂上に速玉男命を祀る西岳神社あり。	
⑤ 徐福望郷の地	凉松鼻 斉連ケ岡 唐船ケ尾 あたご山	○ ここからの西方（東支那海）の眺めは恰も、孔子と始皇帝も東方の大海を望んだという中国の孔望山の眺めと全く似ている山。 ○ 徐福の生地。斉の国とは一衣帯水。眼前の海を距て斉の国に連なる〃密教寺の跡。十六塚の遺跡あり。 ○ 戦時中は防空監視哨本部が設置されたところ。 ○ 軍船見送りの山
⑥ 霊山、冠岳の古代性（熊野椎現扶桑初降ノ霊地也）頂文院文書	四神相応の地といわれる	○ 冠岳の地景は四神に相応した最も貴い地相で官位、福緑、無病、長寿を併有する地相で我が国の平安京もこの地相を有するとされた。 東 青龍 左 流水 東岳 西 白虎 右 大道 西岳 南 朱雀 正面 窪地 北 玄武 後方 丘陵 中岳
	関山（開基）	○ 開山は阿子丸仙人という古文書あり。
	用明帝勅願	○ 興隆寺、蘇我馬子宿弥創建の寺 … 585年日本最初の寺　今はなし 古文書記載（至貞享5才1103年…云々）
	東岳（486米）本宮跡	○ 串木野市を東西に貫流する2級河川　五反田川の源流に五反坂という小字地に水利あり（標高486m）　反別五反余りの開田地跡あり。 山上の平地にイネの源流をみる、田の跡 ○ 熊野神初降の霊地といわれ熊野神～三社の剃当寺頂峯院設置さる。 ○ 四大奇岩　　裝束岩、宝生岩、仙人岩、護磨岩あり。 ○ 三大洞窟　　虚空藏洞、不動窟、大岩戸洞窟あり。
	中岳 516米 中宮跡	○ 材木岳、経ケ山、の奇峯あり　この岳下に白山神社、蘇我煙草神社、傘石、等の奇岩、古跡あり。
	西岳 516米 西宮跡	○ 凉松山鼻（等身大の阿弥陀石佛あり）眺望絶佳。西薩の高岳を一望に納める処。重ね石（天狗岩）の奇石あり。天壇．徐福脱冠封禪の祭祠跡？　広場あり。
⑦ 考古文献資料	1. 旧記　旧辞本紀。 2. 冠岳之次第1449年．天台21代住僧座主観澄著。 3. 文詩島蔭漁唱。1478年儒学者桂庵玄樹禪师著。 4. 鎮国寺頂峯院來由記1669年真言43代住僧権大僧都法印秀盛著。 5. 三国名勝図会1843年天保14年 6. 鹿児島県地詩1882年明治15年 7. 串木野郷土地理纂考 8. 徐福研究1984年（昭和59年）台湾彭双松氏著	

方士徐福は串木野に上陸栖止し。霊峯といわれる冠岳に至り「平原広沢の王となる封禪の儀」を行った。

串木野郷土史研究会長　三善喜一郎

地名研究会報

第６０号
平成１０年９月６日
鹿児島地名研究会

Ⅰ.第６０回例会　　平成１０年３月１日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・池田　純・納　栄蔵・尾嵜一治・川崎幸義・小園公雄・坂本　誠・肥後芳尚
肱岡修一郎・平田功美子・平田信芳・福元忠良・二見剛史・吉原林昭（計１４名）

Ⅱ.『大日本地名辞書』読会。pp.1806～1808

【問題となった地名および事項】　俊寛配流の道（鳩脇・逢の湊）、硫黄島

俊寛配流の道

平田　中村勘九郎が「俊寛」を硫黄島で演じてから、硫黄島は全国的に注目されるようになりました。話の内容は平家物語に詳しく書いてあるわけです。鬼界島というのは平家物語の記述を考えると、硫黄島であることは疑えません。今日は長門本平家物語の記事に目をつけられた小園先生がお見えですが、長門本平家物語によって俊寛たちが島津庄から赤坂、とがみ（止上）を経て気色の森を通り、正八幡を拝み、そして鳩脇から流されたことが明らかになって来ました。今日のところで何か疑問があれば出して下さい。

なければ先程の話の続きをします。帰りの道は、坊之津、逢の湊、木入津（喜入）、鹿児島、そして向嶋。それから鳩脇を経て八幡崎に上がったという帰りの道が、長門本には書いてあります。従って逆に行ったとすると、島津庄（都城）から止上神社を経て気色の森の所に出て、それから鳩脇。鳩脇というのは隼人町清水の海岸ですが、そこから船出して向嶋（桜島）に渡ります。それから木入津に向かいます。木入津から逢の湊。逢の湊というのは知覧町東塩屋に現在でも藍の浦があるのです。これは良い湊です。普通は海路で行ったと考えられておるのですが、喜入から藍の浦に行くには南に下ってさらに西に回らなきゃならない。そういう海路の取り方は考えられないのじゃないか。というのは文化年間に伊能忠敬が大隅・薩摩を測量していますが、山川から屋久島に渡る時に、大体十日から二週間風待ちでした。そして屋久島を一周した後に安房から島間に渡る時にも十日以上順風を待つわけです。また種子島を一回りして西之表から山川に向かう時も順風を待って渡りますから、喜入の湊から順風を待って船出した場合でも直接は藍の浦（逢の湊）へは行けない。根占とか佐多とかに寄り、東風を待って行かなきゃ逢の湊・坊津へは向かえません。そんな船旅は考えられない。木入津（喜入）と逢の湊（藍の浦）はむしろ陸路で行った方がストレートで、しかも短期間に流人を連れて行ける道だろうと思います。

喜入と藍の浦は、こういう道が考えられます。喜入から八幡川を遡って行くと、向こうは加治佐川というのにつながっている。加治佐川沿岸伝いに下って行けば藍の浦にたどり着きます。佐野さんの『シラス地帯に生きる』によれば、加治佐川流域が頴娃から知覧一帯にかけて一番早く集落が出来た地帯だということです。陸路を選んだとすると、八幡川・加治佐川というルートを辿るのがスムーズに罪人を

運ぶ道だろうと思うのです。喜入から藍の浦まで、あっちに寄りこっちに寄りして囚人を引き連れて旅をしたとは考えにくい。これは『地名が語る鹿児島の歴史』の中で「俊寛配流の道」というのを取り上げました。そう言った直線的な道を考えた方がいいと思います。八幡川と加治佐川を結ぶ線は指宿バイパスとの交点に頴娃インターチェンジが出来ていますから、このルートは昔から利用されていたと想定されます。これは小園先生の今後の研究材料の一つとして提供します。

小園　今云われたことは、なるほどと思うのですが、鳥脇から船で木入津まで行ったとして、そこでまた陸路をとると向こうでも船を準備しなければならない。鳥脇から出て行って、また鳥脇に帰って来るわけです。八幡は鳥脇から行ってますよね。八幡・鳥脇のルート。

平田　八幡崎でしょう。

小園　八幡崎？

平田　八幡崎というのは、鳥脇からさらに天降川に入って来るのです。

小園　私が云ってるのは隼人町の八幡。八幡・鳥脇。だから鹿児島の八幡にも関係があったのかなと思ってですね。帰り着いたのも八幡・鳥脇ですね。そして、そのまま大隅正八幡（鹿児島神宮）に行くわけでしょう。今おっしゃった鳥脇から出て行くのに小舟であった、と。どの程度の船であったのかが問題ですが、私は案外規模の大きい船であったのではないか、と思うのです。

平田　喜入からいきなり藍の浦に直行する航路というのはちょっと考えられない。

小園　ず一っと回って行くのはない。そんなもんですかね。

二見　鹿児島湾内にはいくつ湊があったのですか

平田　まぁ、いくつの湊と言うたらいいのか。

小園　中程には浜の市とかいうのがありますけど

二見　浜の市は昔からあったのですか。

小園　浜の市に軍勢を集結せよという戦国時代の文書があります。

二見　浜の市の次はどの辺にあったのですか。

平田　今の質問はどう考えたらいいかな。結局ね、唐人町が出来た所。唐人町を探して行けばよい。湊のあった所には大抵唐人が来てますから。

二見　国分あたりにもあったのですか。

平田　国分は当然あります、大隅国の中心ですから。国分には高麗町もあるでしょう。そして唐人町もありますね。そう言った商人たちが住みついた所は湊の存在が考えられます。『上井覚兼日記』を読むと、上井覚兼は宮崎地頭ですが、宮崎・鹿児島間の往復には決まったルートをとっています。鹿児島からまず領地の白浜：桜島に渡ります。そして敷根に渡る。敷根に董十八官（董玉峯）という明の商人がいますから、そこに泊まってそれから都城を経て宮崎に行く。鹿児島に出て来る時も、同じ道を辿ります。

湾奥にある湊は、今云った浜の市、国分湊、敷根、福山、牛根あたりもそうでしょうね。それと垂水。これはあまり聞きませんが、垂水は当然考えられます。それから湾口に向かって、古江、高須、神之川、根占、それに伊座敷あたりでしょうね。

小園　だけど俊寛の頃、1177年というあたりを想定すると、のちの戦国時代の唐人町とはちょっと時間差がある。

平田　それはそうですが、郡の中心地に近い所に船が着くと考えてよいでしょうね。

二見　そんな内容はどこに書いてあるのですか。

平田　郡の数は薩摩国が十三郡、大隅国が八郡になってますから。

小園　昔はどうですかね、湊（港）というのが本当にあったのかな。例えば鳥脇は入り組んだ川の入口ですよね。

平田　鹿児島県の場合はほとんどが河口港でしょうけど。

小園　根占あたりも雄川の河口。万之瀬川もそうでしょうから。湊というのは博多とか有名な大輪田泊とか、ああ言った所が湊と云える。普通は船を泊める所を湊と云っていると考えてよい。逢の湊の場合、船はこっちに回って準備しておくのか、あるいは、また別の船を。

平田　それは考えられるでしょうね。

二見　坊津はどの泊にも船が入って来るような感じになってますけど。

平田　逢の湊からだと坊津は沿岸伝いに行けると思うけども。

小園　坊津からは竹島とか硫黄島は見えてます。坊津から出たというのは想定されますね。

平田　坊津から出たことは確かでしょうね。坊津から渡る時にも順風を待って一気に渡ると思うのです。帰る時も同じです。

二見　坊津に行くのは陸路から行ったのですね。

小園　そこはね。

二見　海路からでは南に行って、さらに西に行くことになる。

平田　山川から硫黄島をめざして行くとしても、冒険だったと思うのです。

小園　平家物語は盲僧：琵琶法師が語るわけですから、途方もないことは云わない。硫黄島から成経や康頼が赦されて帰る時は、そう言った陸路を通ったとは書いてないですよね。水路だけでず一っと来てるようですね。

平田　受け取られる感じからはその通りです。

小園　先生の説だと、帰りは坊津から上がって逢の湊を経て木入津に出て来た、と。私は帰りの船便を考えた場合、案外直通の船がき来たのじゃないかなと思うのですよ。

平田　帰りの場合、房の泊（坊津）を出てその次は鹿児島と書いてあるでしょう。あれは鹿籠の可能性もありますね。その次が逢の湊でしょう。逢の湊からいきなり木入津に来てるわけですからね。船で来たとすると、藍の浦の次は川尻あたりに来てもいいし、山川が出て来てもいい。山川の次が喜入でなければならない。問題は川尻・山川に寄って来るかな、ということです。

小園　福原を出て瀬戸内海を通って来るわけですけど、俊寛たちが上陸するのは大分県の佐賀------

平田　さがの岬（佐賀関）。

小園　その次がヨネなんとか（米水の浦）に上陸する。

平田　上陸するのは宮崎付近。そして山越えで島津庄（都城）に出る。

小園　そうそう、船で下って大淀川の河口付近に上陸してやって来るわけですね。船で乗り継いで来るということは、すでにその時代は平清盛の日宋貿易もあるわけですから、船はかなり進んでいた。小舟で運んだというのは？

平田　大きな船であっても、喜入を出ていきなり逢の湊というのは。南に下って西に向かうような航路はその頃の航海技術ではとれないと思う。

小園　しかし、詳細な記述で湊・湊を来たことを表現してるのですね。陸路で行ったと書いてあればですが----。

平田　地図の上で見ると、喜入から藍の浦に行くルート：海路だけがぐる一っと回っている。京都からの他の経路はほとんど全部直線的に来ている。

小園　島津氏が高原の伊東氏と戦いますが、その時も島津の軍勢は鳥脇に上陸している。長浜の上に城があるわけでしょう。あすこに上陸して霧島の方に向かっている。

平田　地図をもって来ればよかったのだけど、長浜の上が生別府城（おいのびゅうじょう）あすこは鹿児島湾に突出した所で戦略的に重要な所になる

硫黄島

平田　硫黄島という所は見るからに凄い所です。海からいきなり７００メートルぐらいの山が突き上がっていますからね。ちょうど鹿児島市の向かいに桜島があって裾野を引いていますが、その裾野の部分がなく、いきなり海の上から突き出した山ですから、これは凄い山だなと思います。そして山腹に硫黄がこびり付いてるのが見えますからね。あれは硫黄を取るのに好都合であり、昔はいい金になったでしょうね。

小園　硫黄は貴重な日本の商品の一つですね。

平田　日宋貿易の貴重な商品です。恐らく、宋の時代、これで火薬を作ったのでしょうね。

小園　竹島から三島丸で進みますとね、竹島を離れたなと思って振り返ると、ぱっと目の前に硫黄岳が立つとるのですね。びっくりしました。現在頂上では硫黄だけでなく、なんとか石を。

平田　カオリンでしょう。

小園　鉱石を採取するために頂上までダンプが行きますね。

平田　僕が行った時は立入禁止だったよ。

小園　硫黄島の港は、あれは古い噴火口ですね。きれいな円い湾になっている。

平田　海の色が、これには黄色と書いてありますが、真っ赤だな、煉瓦色。別府に血の池地獄というのがありますね。あの色ですよ。青い海じゃなくて真っ赤な海です。そんな中に入って行くわけですから鬼が住む島と感じるのは当然だと思うのです。硫黄島の別名が鬼界島と考えてよいでしょう。それと１８０６ページの真ん中辺に軽大臣の灯台鬼という話がありますが、これは『三島村史』に詳しく書いてあります。

三見　これは神社ですか。

平田　神社が建てられています。これは父と子が代々遣唐使になった物語です。父が向こうで捕らえれて燭台を持つ鬼に化けさせられます。遣唐使になって行った息子が父に巡り逢って救い出して来る物語です。この話は普通は云われませんが、三島村ではこと細かに語り継がれているようです。

硫黄島という所は滅多に客が来ない所で、旅館の主人が珍しがってあちらこちらと案内してくれる親切な所です。

肥後　あゝ、そうですか。

平田　はい。徳躰神社とか、俊寛が庵を結んだ所とか、此処に毎日俊寛が来て薩摩の方を眺めていた所だとか、いろいろな所へ案内してくれます。

肥後　今度、２１・２２日に俊寛碑落成記念で旅行計画があります。

平田　あゝ、そうですか。

肥後　一泊で、原口先生が案内。

平田　それは面白いかも知れませんね。

肥後　なんか抽選らしいですよ。

平田　あゝ、希望者が多いでしょうから。夏に一人で行く方がいいですよ。誰も行かない時に。今は七面鳥の島です。繁殖し過ぎています。他になければ前半はこれで終わりましょう。

小園　久しぶりに来たけど、これは何？

平田　吉田東伍の『大日本地名辞書』。

小園　あゝ。

平田　これは明治何年にできたのかな。早い時期に出来ている（明治２８～３３年）。これを少しづつコピーして読んでいくことにします。ちょっと休憩しましょう。

地名で探る大字の特色

平田信芳

今回は米原先生にお願いしてあったのですが、ワープロが故障して資料が間に合わないとのことで私が話をすることにしました。準備した資料は「末吉町に多い苗字」とあるのを表紙にしたもの。終わりは「出水における交通地名」、それと地図。これらをもとにして話をします。

１月末に末吉町の「メセナ大学」という社会教育の講座で話をしてくれとのことでしたので資料を作りました。それまで末吉町に行ったことがなかったので、まず電話帳で末吉町の苗字を調べました。県下の電話番号が１冊の電話帳になっているものは、昭和４８年３月のものが最後のものです。これは各市町村の苗字を調べるのに一番手頃で意外に役に立ちます。これを大事にとっております。現在電話帳は各地区に分かれております。それを全部集めるのは大変な仕事ですし分厚い量になります。県立図書館に行けば全国・全県下の電話帳がありますが、例は少なくてもパーセンテージはそんなに変わらないと思います。末吉町に多い苗字を拾いあげてみました。

１０例以上あるものを拾いあげたら、これだけになりました。５例以上あるものを拾いあげると大体１００になります。１０例以上あるものだけでランキング３１位になります。

今から番号を云いますからチェックして下さい。６番の一番下の谷口。一番左に順位が書いてあります。左側に６がずーっと並んでいるところがあります。その一番最後に谷口があります。１５番目の最初、内田。１５番目の最後、山口。１９番目の最初の有馬。１９番目の最初の方、大川内。１９番目の終わりの方、山田・中山。終わりから３番目、３１番目の佐野。３１番目の最後の矢上。実はこれだけが『末吉町郷土史』の門名にないものです。あとは全部門名にあります。したがって末吉町の苗字の残りは山下さんは山下門、吉田さんは吉田門、中村さんは中村門というように門名を苗字にしたということが判ります。門名にない苗字は高山とか大口とか、西目から移った人たちです。西目からの移住者の子孫と考えてよい。

末吉郷は新しい郷で、日向国と大隅国の境界になりますから、いろいろ争いごとがあった地域で、郷が出来たのも新しいわけです。そのために高山とか菱刈あたりから移住させて新しく固めた所です。そう云ったことで移住者が多いという特色があります。

日本全国を調べると末吉という地名が１７ケ所ほどあります。末吉というのは平安末期の開発名主：末吉という人の名前に因んだ地名と考えられます。末吉の人達は住吉神社がありますから「すみのえ」が「すみのえよし」というふうに読まれて、それが「すえよし」に訛ったんだと理解してますが、「末吉名」という開発名主の名前に因んだ地名と考える方がいいと思います。日本全国の末吉を比較する必要があります。

苗字ランキングで、山下・吉田・中村・前原・坂元・池田・田中という人達が古くから末吉に居た人達でしょうから、こう云った人達の墓を調べ、こう云った苗字の家に伝わる風俗などを調べたら民俗的にも古いものをつかむ手がかりが残っているのじゃないでしょうか、と。そういうふうに古い電話帳は利用されたらよい、と末吉町の苗字について話しました。

３ページ以下は末吉町の地名になります。ワープロで末吉町の小字を全部インプットしてみました。ワープロでこういう作業をすると、新しいものを打ち込んで行きやすいので整理が容易です。

信仰地名を大字ごとに整理しました。２番目は館・城郭・集落地名、３番目は人名が付いた地名。そう云った視点で分類し、統計的に処理しました。二之方は信仰地名が20.3%、交通地名が11.9%。大字にある総数193の小字の中で11.9%が交通に関する地名だということです。そういう特徴が出て来ると、此処に重要な交通路が集中していたとの見当が付きます。

下の方に自然地名・位置地名・目印地名というのがあります。いわゆる自然地形を示した地名で、これが各大字とも大体40～50%を占めます。５万分１図に出て来る地名というのは普通50%ぐらいは自然地名ですから、その地域・大字の特徴を示す自然地形名が集中的に登場します。地理学的な特徴は自然地名を分析すればよいわけです。例えばシラス台地であれば「平」とか「原」とか「段」などの地名が集中的に見られます。これらは地理学的に分析できる地名です。

最後の意味不明というもの。これは無理に解釈せずに意味不明のまま残しておればよいのです。意味不明ということは、　意味が判らなくなっていることですから逆にいうと歴史的に古いと見ることができます。

今度は、各小字についてどのような視点で眺めたかということ。信仰地名とは、二之方の例でいうと伊勢とか霧島とか権現。それから宮が付くもの、住吉・天神・弁財天・地蔵とか寺の名前。民俗に関連する地名、水神とか田之神、柴立・射場・供養迫・鬼の島・姥返・大人。これはいわゆる巨人伝説ですが、そう云ったのは信仰地名に分類しました。これを民俗信仰地名などと細かく分類すれば、もっとはっきりして来るかも知れません。

説明を要するのは、南之郷の一番下、弓場ケ迫・鬼弓場。これは弓を射てその年の豊凶を占う所になります。馱羅窪というのは、ダイダラとかダイダラボッチとか大人足とか、そういうのは巨人伝説に因む地名とみなして、そこに入れてあります。

岩崎の下から２行目、終わりの方に柜ケ立。「立」地名は柴立・矢立・馬立など、何か意味がありそうな信仰地名です。その次の「失五郎」というのは「矢五郎」の間違いだと思います。弥五郎伝説に由来する地名です。これも巨人伝説として信仰地名に入れました。

「松永」というのは、松が永く続くことを願う瑞祥地名。これは植生地名に入れてもいいし、人名地名に入れてもいいかも知れませんが、そこに入れました。

諏訪方で説明を要するのはないようです。２行目の真ん中辺に「光神山」というのがありますが、荒神の当て字です。それと４行目の終わりから二つ目、胡麻窪というのは護摩壇に由来するものと考えました。胡麻を植えた窪地にもとづく植生地名かも知れませんが、現地を見ていないのでそれ以上のことは云えません。

(2)館・城郭・集落地名。「堀之内」がそれに当たります。役所・村が付くのもそうです。南之郷では、「陣」を入れました。「陳」になっていますが、それは当て字です。これを当て字に使っている有名な例が野田郷の熊陳馬場です。

この集落地名で注目に値するのは深川の最初にある「大領」という小字です。これは郡の長官「大領」に因むものでしょうから面白い地名です。障司ケ元、荘次ケ下。これは庄園の役人すなわち庄官をいう庄司。その次のゲシガ牟田。これは下司に関わる地名だろうと思います。末吉町の方に大領・障子ケ元・ゲシガ牟田。この一帯は遺物がどのように散布しているかを調べて下さい、とお願いしました。

(3)人名地名は、大丸とか次郎丸とか日の丸、こう云ったもの。これらは平安期から鎌倉期にかけての人名に由来する地名です。稲留・徳留・中留。これらは「門」に因んだ　地名かも知れませんが、人名に因んだ地名もあり得ると思います。

それから、何兵衛・何左衛門という人の名前が出て

来るもの。徳兵衛平とか十左衛門平とか、そう云った名前が出て来るのは近世の開発地として注目すべき地名です。県下の人名地名だけを拾いあげてみても開発の歴史が整理できます。一つのテーマとして充分です。いろんな時代の開発を示す地名が残っています。古代末の「別府」、中世の「園」、近世になったら「大山野（うさんや）」「仕明地（しあけち）」「抱地（かけち）」、そう云ったものが開発地名になります。

その次、(5)田・畑地名。語尾に「田」が付くもの、「田」の字を含むものをあげてみました。これも整理の必要があろうかと思います。水田地帯はどうしても「田」地名が多くなります。例えば、国分などは「田」地名が非常に多い所です。「田」地名を整理することによって、どの時代に開かれたかの見当が付くだろうと思います。

(6)水利地名。これは「樋」とか「井戸」とか「井手」「落し」「溝」など、そう云ったものを分類しました。これも開発に関わる地名です。

(7)市場・交通地名。「市」が付くとか「坂」の付く地名。これは以前にも話したことがあります。大字に二つか三つ「坂」の付く地名があるのが普通ですが、六つも七つも「坂」地名が見られる所は交通の要所であったとみてよい。「坂」地名を整理するのも古道を探る方法になろうかと思います。

末吉町には「渡」地名が多いのも特色です。末吉という所は面白い所で、大淀川の上流と安楽川・菱田川の上流が集まっている所です。その意味で末吉というのは交通の要所だったなということです。

こう云った所の真ん中に住吉神社があります。嘗ては大隅半島で唯一の県社でした。今でも流鏑馬が行われております。住吉神社背後の山から見ると肝付と島津が雌雄を決した国合原の古戦場が見えます。国合原（くにあいばら）の合戦で肝付が負けて衰退して行くことになります。島津氏がこの地域を初めて押さえることになります。

国合原の「合」の意味は、日向国と大隅国の境・間ということです。これがヒントになって姶良郡の姶も「アイ（間）」ということだろうなと推定できます。いわゆる言葉としては「山間（やまあい）の里・山里」という表現がありますが、「山の中の」「山の間の」ということ。そういうことのヒントになります。

『三国名勝図会』を見ますと、末吉郷は大隅国に入っております。財部郷は「建久図田帳」では大隅国曽於郡に入っておるのですが、これらは元禄年間に作られた「元禄絵図」を見ると、財部郷も末吉郷も日向国。志布志・大崎・松山も日向国ですから、末吉郷はどちらかというと日向国寄りの土地になります。志布志郷だけは古くから知られていますが、鹿児島県の郷土史家は日向国との境界地域のことはあまり取りあげていないなと感じました。日向国と大隅国の境、そんな感じの所が「国合」のでです。

(8)職業・産業地名。鍛冶屋とか牧、そういうものを当てました。(9)門地名は「門」が付いている地名だけをあげました。先程、苗字で説明しましたが、門名を苗字としたものが沢山あります。苗字を「門」地名に入れるべきだったかも知れませんが、これをインプットする段階では『末吉郷土史』を見ていませんでしたので、それだけになりました。末吉町の門数は結構多いようです。

次に、自然景観地名というのは、谷・原・迫・山・崎など、そう云ったもの。深川の後半の方ですが、原口野久尾とか徳留野久尾とか、野久尾（野首）が付く複合地名が見られます。これも一つの特徴です。普通は「野首」と書きます。「野久尾」は「ノクオ」と読みがちですが、「ノクビ」です。野首とはどんな所かというと、岡と岡との間の細い連結部分を云います。鹿児島語でいうと喉首（のどくび）が縮まった形になります。「ノクッを絞めろ」と云います。城の背後の急所が「野首」という地名になります。鹿児島県に

は非常に多い地名です。それが深川で特に多く見られました。

(11)位置地名というのは、谷のどこにあるかとか山の下にあるとか池の脇など、そう云った地名を分類したものです。「山下」などは古い集落がある所です。

(12)目印地名。市五ケ迫は苺。鎌牟田は蒲。松とか芦とかの植生が目印となっている地名。それから狐とか鳥とか鳶とか蛇、そう云った動物を目印とした地名を拾いあげました。大半が植生地名です。

(13)気象地名というのは次のようなもの。雨包・天包（あまっつみ）。雨に包まれているようないつも湿っぽい所。耳取は次回、米原先生から説明を受けますが耳を取られるような感じの寒い所。風呂は風呂のように四方が囲まれた所で蒸し暑い所。帯取は帯を取ってはだけるような暑い所だと思います。そう云ったようなものを気象地名としました。

(14)擬音地名。轟（とどろき）はその通りです。深川の堂目木。これはドヨメク→ドヨメキ→ドウメキの変化。ドウメキという地名は日本全国あります。

(15)争論地名というのは「論」が付くもの。論地原とか論田とか、その昔、争いがあった土地。これは未だに疑問なんですが、「中次（なかっぎ）」という地名、中継地点という意味に解釈しました。御竿泊は検地で土地を測量した時に、検地の竿がそこで泊まったというような地名でしょうから、それから類推して「中次」はこのように解釈しました。横枕は土地を割り振って行った場合に地形上中途半端なものが出来ます。横に枕を置いたような地割りということから横枕という地名が付けられたようです。日本各地で見られます。

(16)意味不明は、文字通りです。南之郷の１行目終わりから３つ目に、「竹友原」があります。これは「ちくゆうばる」と読むのだそうです。肝付方の大将、肝付竹友という人物が国合原の合戦で討ち取られたそうです。その人の名前をとって「竹友原」というのだそうです。戦争に勝った記念に敵の大将肝付竹友の名前を残した所らしいです。

それから「西留」。持留という開発地名がありますから、その一つかもと思ったのですが、意味不明です。

このように分けてみると、大字ごとにそれぞれの地名がどういうパーセンテージを占めるかで、その大字の特色がつかめることになります。それぞれ川内とか国分で調べられたら、どの集落はどんな地名が多いということが判って来ると思います。

今度は「出水郡の市・交通地名」。これは歴史の道調査の各地区担当者の研修会が２月初めにあり、出水郡の人達に話をしました。その時の資料に「出水郡の市・交通地名」を整理した次第です。これも大字ごとに整理してあります。

上大川内には 100の小字があって、そのうちの５％が交通地名。下大川内は 126の小字のうち5.6%。この中で上大川内の一番最後、「市野々」という地名。これは今後注目する必要があると思います。市野々という地名はどこにあるかというと、他に気が付いているのでは。

二見　加治木の辺川に市野々。

平田　辺川に市野々がありますね。霧島町永水にも市野々があります。それから入来から蒲生へ向かう所に市野々があります。これは「楪野駅」の一つの比定地となっている所です。これらは古代の交通路上で市が開かれた場所ではないか、ということで注目すべき地名だろうと思います。

小園　市野々は場末の山の中になっている。

平田　人は集まらないの？

小園　そうですね。

平田　交通路に近いということは云えます。要注意の地名だということです。なお（　　）の中の数は小字数です。下鯖渕に34の小字があってそのうちの14.7%が交通地名になります。境町は境・針原など米之津

に続く肥後国との国境地帯で、そこには19.1%の交通地名があります。御手洗（おてあらい）道上というのは殿様が手を洗った井戸の道上・道下のことです。

丹荷は旦過とか辻堂という旅の僧侶が泊まることが出来る堂。それが旦過です。朝早く起きて通り過ぎるという意味です。辻堂とか旦過という所に修業僧たちが泊まったのです。旦過という地名は日本全国各地にあります。

下鯖渕・境は野間関近辺ですから交通地名が当然多く見られます。知識、五万石、西出水。これらは出水高校の近辺です。この辺も交通地名が多く、重要な交通路があったことを示します。パーセンテージでみると西出水は22.2%で高い数値になります。しかも此処には岩重町とか休次郎町とか関屋町などの小字が多く見られます。関屋町は関所があった所なんでしょうが、史料にも出て来ません。これは現在の出水高校の位置になります。

高尾野町でパーセンテージの高い所は柴引の14%で、下水流の13%は海岸を通る道になるからでしょう。野田町には古い道があるのですが、交通地名が少ないのは意外でした。

こういうやり方をやってみても、まともに出て来ないのは阿久根です。波留、此処は近世のいわゆる新しい阿久根麓の所在地です。山下は古い阿久根麓になります。しかも延喜式に出て来る英祢駅は山下にありました。山下集落の背後の山が莫祢城跡になるのですが、交通地名のパーセンテージが低いのは意外でした。阿久根の場合は近世的な地名に変わっていたのかなと思います。此処は地名からそれを探れないという例になります。

東町・長島町。此処は港が中心ですから交通地名としてはパーセンテージに出ませんでした。

これは出水平野の２万５千分１図のコピーです。自由にいろいろ書き込めるようにコピーしたのですが、コピーの場合、周辺部の拡大率が微妙に違ってうまく繋がりません。国土地理院の地図を買って継ぎ合わせて作った方がよいと思います。オレンジ色の点は、渡瀬口とか境町とか仲町、古市・石坂・太鼓橋、いわゆる交通地名を示しました。此処が先程パーセンテージが高いと云った西出水になります。このように交通地名が並んで現れ、近世の道路を浮かび上がらせます。

此処は莫祢城があった所、そして古い英祢駅になります。近世は波留に麓（外城）が移って、こちらの方を近世の道路は通るようになります。

赤色の点。これは『三国名勝図会』に出て来る城を落としてみました。安原城・朝隈城・松尾城・井上城などが安原・朝隈・松尾・井上の地名で地図に見られます。城の位置を落として行くと、市・町・交通地名と大体並行して中世の城跡の名前が出て来ることが判ります。中世の城は交通路をちゃんとにらんで配置されていたのです。

山に入る所にも赤い点があります。此処に出て来る城跡もこの道を押さえた城に違いないのです。これは高尾野から横座峠を通って高城に出て薩摩国府につながる、いわゆる高尾野往還といわれる道を押さえる城としての役割を持っていたということが考えられます。

この地図を作って意外だったのは此処です。これは木牟礼城です。総州家島津氏の本拠地として歴史書に大きく書かれているのですが、こういう道路と城の配置から見ると、木牟礼城は全く孤立しているのです。この辺の豪族たちから無視されたというか、てげてげに（軽く）見られている、いわゆる新参者扱いです。周辺に城跡が見られないのです。

地名で大字の特色を探るために交通地名などを拾いあげ、さらに別の観点で城跡を配置してみると、昔の道が浮き彫りされて来ます。今までは地名は地名を調べる者、城跡は城の専門家、古道を調べるのは歴史地理学者と、ばらばらにやっていたわけです。総合的に眺めると実体がはっきりして来ます。

次にわれわれ地名家がやる場合は（笑い）、こういう小字復元図を作って眺めます。これが先程云った近世の街道になります。字界がこのようにはっきり出て来ます。昔の道路を境界にして字が区切られていますから、字界が直線的に連なっている所は昔の公道：幹線道路だと思うのです。また、この図を見ていくと此処に東内城・西内城・谷城という小字が出て来ます。これが『三国名勝図会』に見える内城だと思うのです。また『三国名勝図会』には知色城：別名尾崎城というのがあり、出水麓から「戌亥方一里十一町」と書いてあります。一里十一町とは此処になります。この辺にそういう小字があるかを探すと、此処に「栫」という地名があります。此処を知識（知色）城：尾崎城と考えるべきでしょう。広瀬川・米ノ津川が此処を流れていますから、出水の本拠地に向かう所を押さえる城が知識城：尾崎城だと思うのです。『出水郷土誌』は尾崎城をこの辺（内城の位置）に当てているのです。知識城もその近くに当てています。此処を何故尾崎城としたかというと、此処に尾崎という集落があるからです。尾崎城：知識城については『三国名勝図会』を見直す必要があると思います。

私が以前から主張していることですが、出水郡家と出水駅の問題があります。此処に「市木」という小字がありますが、出水市教委は先年此処を発掘調査しました。遺物は相当出土しましたが、氾濫原の中にあるのです。こんな所に市来駅が求められるのか、疑問視しています。市木という小字の形で集落からはずれた所に市来駅の遺称が残っているのか。どうして出水駅というものが出て来ないのかを考えるべきです。駅家の中心地に当たるのが出水高校と西出水小学校近辺。さもなくば出水麓に出水郡家があったかのどちらかだと思います。この両方にトレンチを入れて調べていくのがオーソドックスな調査方法になるのではないかと思います。

昨日、南日本新聞で紹介されましたが、市来町大里に大きな遺跡が見つかったようです。私は、市来駅は市来町の方を有力視すべきだと思います。日置郡家の所在地でしょうし、今回出るべき所に遺跡が見付かったと思います。延喜式では市来駅の順序が書き間違えられており、出水駅が脱落したと理解した方がすなおに理解出来ると考えます。

地名をいろいろなジャンルごとに整理して大字ごとの特色を調べていけば、どんな所でも集落の歴史を切り拓いていくことが出来ると思います。以上で説明を終わります。

〔質疑応答〕

市野々

二見　市野々というのはどのあたりですか？その地図でいうと。

平田　これには載っていません。山越えで水俣に抜ける道の途中です。肥後の国への旧道は、海岸の道が近世以降の道ですが、山越えの道も考えられるわけです。従来、駅路は海岸沿いか山越えかと議論して来たわけですが、両方考えてもいいのじゃないでしょうか。古代の場合でも。

平田功　市成に「内野々」という所があります。そういうのは？

平田　内野々も沢山ありますが、意味は判りません。

宮之浦

肱岡　末吉に「六浦（むら）」と読むのですかね。

平田　六浦（むつのうら）ですか。

肱岡　志布志町に田之浦・四浦などとあります。私は田之浦に２年ぐらい居たのですが、「浦」という地名は大体海岸でしょう。おかしいなと思って調べてみたら「川の上流」という意味も書いてありました。

平田　「ウラ」というのは古語では「先端」の意味です。鹿児島県では山奥に「浦」の付く地名は沢山あります。例えば吉田町の宮之浦、蒲生町の西浦などです。山奥に「浦」の付く地名はあり得ることです。

古語に「末（うら）」というのがありますから。

小園　確かに蒲生町西浦は川の上流。蒲生から川内に行く通路の所。あすこは中世は水上交通があったと思っているのです。水上交通の関係で西之浦という。吉田の宮之浦というのは「宮」があるわけです。あすこは何かな、八幡か。

平田　若宮八幡。

小園　あの浦は、ウラでも裏返しの「裏」が間違ったんじゃないかということもあるんだけども。吉田の一族は祢寝の系統ですから、そのつながりがあると思うのです。宮之浦は「宮之裏」という解釈

平田　山奥にあることから先端地と考えた方がよいと思う。それと交通路の話がでましたが、以前から云っていることですけど川の場合は船が遡るには限度があるわけです。普通は河口に湊（港）が出来ます。それから帆船が遡って行ける所というと、川内の場合は渡唐口までしか行けないのです。それからは櫓で漕いで行く舟に変わる。それが宮之城あたりまで行くと思うのです。そう云った所には船津という地名が出て来ます。浦（末）はさらに奥ですから舟が登って行くことはちょっと考えられない。

小園　蒲生の場合は近世に年貢なんかを運ぶ時に川を利用している。

平田　筏で運んだの？

小園　筏でなく小さなボート：舟。と言うことで納得がいくのですけどね。

肱岡？　志布志の田之浦は都城とちょうど中間の所、四浦は串間の山のてっぺんになるのです。到底舟なんか行けないでしょう。昔の表現であったことはうかがえるのです。常識ではすぐ海岸を考えますので、なんでやろかいと調べてみたわけです。

小園　吉田の宮之浦は山奥でしょうね。

納　「ウラ」について、これは私が兵隊の時、軍隊で習ったことです。材木の場合、根っこの方を元木（もとぎ）、先端の方を「ウラ」と云いよったです。湊に関係なく川の一番上流という意味で「ウラ」という名が出て来たのじゃないですか。私はそのように解釈しているのですが。

肱岡　辞書にはそう載っていますね。

平田　万葉集には末（うら）・末（うれ）とルビが振ってあります。末端部とか先端部という意味になります。

納　そうすると末吉の「末（すえ）」もそのように解釈していいわけですね。

平田　末吉は「うらよし」とは云わんですからね。（笑い）。あれはやっぱり末吉という開発名主の名前だったと思うのです。

納　末吉（うらよし）だったのが、後にどこでどうなったのか判らんが末（うら）が末（すえ）に読み変えられたということは考えられんですか。

平田　あゝ末吉の位置は川の先端部ですからね。でも無理でしょうね。

川の呼び名

松田　川内川の場合、宮之城からずーっと先の方まで川内川という名前ですよね。

平田　それは現在の呼び名ですね。川の名前というのは地域・地域によって呼び名がいろいろあります。ほとんどの場合は河口の町・集落の名前をとって付けるのです。川内川の場合、川内が薩摩国の中心だったから、それにつながるという意味で川内川という云い方をしたと思うのです。

松田　福山の牧ノ原に菱田川というのがあるのですよ。志布志のあっちにある川。あの上流になるのですか。

平田　そうです。

松田　どうしてあすこら辺に菱田川と付けにゃいかんのかなと思って。（笑い）。

平田　河川行政の便宜から名前：呼び名を付けるのであって。

納　私のうちの近所の田上川。普通は「新川」と云います。私が知っているのは、ちょうど鹿児島大学

の裏側から下流の方が新川で、それから上流の方は田上川になります。それからずーっと入って行ってあすこは五ケ別府、いや西別府入口か。あの辺でも呼び名は田上川。さらにその上流を西之谷川と昔は呼んでいました。昔は橋の柄杜にそれぞれの地域での川の呼び名が書いてありました。しかし県の河川地図を見ると、全部「新川」になっています。

平田　その方が河川行政としてやり易いわけでしょう。どの川はどのような年度計画で遂行中であるとか、ただそれだけのことに過ぎないのですが。

納　　県の工事現場で聞いたことがあるのです。今云われた通り県の人も云うたです。行政上の便宜でただ名前を付けてあるだけだ、と。

平田　甲突川の水源でもとらえ方が時代によって違います。『三国名勝図会』の水源は吉田の三重山です。『鹿児島県地誌』になると花尾山に移っています。そして現在、新聞では「甲突池」と紹介されます。完全に水源を変えています。

小園　水源は一カ所ではないですからね。姶良町の別府（びゅう）川。別府川は船津あたりまでを普通は別府川と呼ぶ。その上流は蒲生川。しかし地域によっては山田川の呼び名があります。全体では別府川としながらも。

平田　川の呼び名は近世以降の行政的な感覚で付けた統一的な名称になっている。

小園　新川も同じです。田上川によって鹿児島大学のキャンパスのあたりが出来たわけですから。唐湊あたりまで船が来たと云われているのですが、あすこに新川：新しい川を作ってしまった。田上川が本当なんですけどね。新川と云ってみたり、田上川と云ってみたり。

射場その他

肥後　１ページの信仰地名、二之方の射場、これは狩猟の射場じゃないですか。

平田　なるほど。

肥後　財部の山の中にあるんですよ。現在は国分市に入っているのですが、射場という地名があります。

平田　弓場とか破魔射場という云い方があるので、それらと似た表現とみて、そう云った神事的なものと考えて信仰地名に入れました。狩猟の場だとすると、産業地名に入れた方がいいかも知れませんね。

肥後　ほんの山奥なんですよ。

平田　それならば狩場の射場ということ。

肥後　狩猟の「射場」じゃないかなと思ったのです。

平田　そういうのも出て来ると思います。兎に角、ワープロを打つ時の独断と偏見で打って行くものですから。（笑い）。

小園　最後の部分に「大人」と書いてあるのは何と読むの。「ウシ」と読むのじゃないの。

平田　「ウシト」とか「ウシ」だろうね。

小園　「ウシ」だろうね。「大人」の後の陀羅窪とその上の段の胡麻田。信仰地名には違いなにのだけどこの陀羅は陀羅尼経の「ダラ」じゃないかな。ダイダラボッチだけじゃなくて。

平田　陀羅尼経？

小園　陀羅尼。仏教に関係のある表現。

肥後　何行目の話ですか？

平田　南之郷の最後の行。陀羅尼経の「ダラ」、なるほど、その方が判り易いな。

小園　それから諏訪方の４行目、胡麻窪とあったでしょう。栽培の胡麻じゃなくて「護摩をたく」というあれかもな。寺前とか堂前とかあるのを見ると、このゴマはどうも寺院に関係が深い。

平田　護摩壇の方でしょうね。その方が地名の命名としては自然だろうと思います。

二見　５ページの宇都というのは、どういう地名を云いますか。

平田　狭い所、狭くなった所。

二見　私の近所にも宇都という所があるんです。あっちこっちに似たものがありますね。

平田　宇都は自然地形と理解すればよい。それに信仰的な名前が付けば進行的地名にも分類する。分類する場合二通りを考えて分類作業をすればよい。

小園　宇都という所は集落の中でも人家が少ない地域。

平田　そう、狭い所。

小園　宇都というのは、からっぽの宇都。

平田　ウトラの宇都？（笑い）。それはまた別。

小園　大体宇都というのは山裾の原野とか狭い所に多い。

平田功　宇都小路（うとんすっ）とか聞きます。

二見　これだけのものを分析するとは。

平田　ワープロに打ち込むのに一月かかります。

松田　牧場はどうなりますか。

平田　牧は産業地名に入れました。４ページの（８）のところに牧とか後牧とかがあります。あの辺は牧場が多いでしょう。そこに完込（ししごめ）とあります。「シシ」には「イノシシ」と「カノシシ」がありますが、「猪」でしょうね。そこに入れておきました。他になければ片づけて終わりにしましょう。

坂本　次はいつですか。

平田　６月です。米原先生のワープロが直り次第ですが、都合が悪ければ肥後先生の「十二支に因む地名」になります。どちらかになります。

他に希望があれば、どんどんやって下さい。

末吉町に多い苗字

（S.48. 鹿児島県電話帳より抽出）

1.	山下	３０	―――	池山上(8)
2.	吉田	２５	―――	川内前(13)
3.	中村	２４	―――	大園(4)、西祝井谷(4)、中園(3)
4.	前原	２２	―――	掛上(7)
5.	坂元	２１	―――	大園(6)、上新地(4)、岩崎(3)
6.	池田	１９	―――	法楽寺(4)、寺田(3)、二之方(3)
6.	田中	１９	―――	寺田(6)
6.	谷口	１９	―――	田村(3)、下高松(3)、二之方(2)、福留(2)、菅渡(2)
9.	宮田	１７	―――	南之郷(2)、麓(2)、二之方(2)、向江(2)
9.	和田	１７	―――	川内(6)、二之方(3)
11.	上村	１５	―――	大園(9)
11.	川崎	１５	―――	西祝井谷(3)、諏訪方(3)、二之方(2)
11.	末永	１５	―――	西柳井谷(10)
11.	中原	１５	―――	柳井谷(10)、深川(3)
15.	内田	１４	―――	川内(5)、二之方(3)、高校下(2)
15.	小田	１４	―――	中原(7)
15.	小園	１４	―――	大園(12)
15.	山口	１４	―――	各地区に散在
19.	有馬	１３	―――	深川(6)
19.	稲留	１３	―――	和田(7)
19.	大川内	１３	―――	二之方(3)、田村(2)、中原(2)
19.	大窪	１３	―――	掛上(3)、中原(3)、二之方(2)
19.	中留	１３	―――	大園(6)、仮屋(5)
19.	橋口	１３	―――	二之方(3)、本町(2)、飯塚(2)
19.	山田	１３	―――	二之方(5)、池山(2)
19.	山元	１３	―――	二之方(4)、森田(3)、本町(2)
27.	中山	１２	―――	川内(7)
27.	福元	１２	―――	種子田(3)、高松(2)
27.	渡辺	１２	―――	岩崎(12)
30.	大園	１１	―――	川内後(9)、高松(2)
31.	佐野	１０	―――	檍(4)、柿木下(2)
31.	丸山	１０	―――	檍(4)、二之方(2)
31.	矢上	１０	―――	掛上(3)、森田(2)

末吉町の地名

	二之方 (193)	南之郷 (264)	岩　崎 (489)	諏訪方 (340)	深　川 (603)	計 (1889)
信仰地名	20.3 %	14.8 %	7.6 %	16.2 %	13.3 %	(250) 13.2 %
城・集落	3.6	3.4	2.7	6.2	3.3	(70) 3.7
人名地名	1.0	0.8	4.1	0.9	2.0	(39) 2.0
開発地名	4.7	1.1	5.1	3.2	4.0	(72) 3.8
田畑地名	12.9	12.3	12.8	13.5	9.0	(227) 12.0
水利地名	2.6	4.2	5.1	2.6	2.5	(65) 3.4
交通地名	11.9	3.6	5.9	6.8	9.1	(143) 7.6
産業地名	2.1	1.1	3.9	3.8	4.1	(64) 3.4
門　地名	0.5	0.8	0	0	0	(2) 0.1
自然地名	9.3	17.0	11.0	10.6	19.7	(272) 14.4
位置地名	16.6	20.1	24.1	15.0	12.8	(331) 17.5
目印地名	9.8	9.8	9.2	11.5	9.1	(184) 9.7
気象地名	1.0	0.4	0.4	1.2	1.0	(15) 0.8
擬音地名	1.0	0.4	0.6	0	0	(6) 0.3
争論・他	0.5	0	0.8	1.2	0	(9) 0.5
意味不明	3.6	4.7	7.4	3.5	8.8	(125) 6.6
	(196)	(265)	(491)	(327)	(595)	(1874)
	+3	+1	+2	−13	−8	−15

（１）信仰地名

二之方（３９）－－－伊勢免・霧島・霧島段・権現下・下権現下・権現ヶ尾・権現谷・権現向・権現向ノ上・権現向下・住吉・天神下・宮田谷・宮之後・社ヶ谷・弁才天・地蔵免・地蔵免ノ下・本真昌寺・本竜真寺・寺田・寺谷・寺ノ上・寺ノ前・堂作・上堂ノ谷・下堂ノ谷・玄蕃塚・玄蕃塚谷・石仏岡・石仏迫・水神下・田神下・柴立・射場ヶ迫・供養迫・鬼島・姥石・大人

南之郷（３９）－－－権現原・神田・宮ノ後・宮ノ下・宮迫・宮ノ脇・宮田・宮田ノ下・田神迫・水神ノ下・水神平・山之神・老神ノ上・荒神免・考神前・早馬前・早馬後・早馬東・本神免・屋敷寺・大休寺前・寺山・寺ノ前・本堂・堂園・胡麻田所・胡麻田原・地蔵免・霧島塚・小塚・砂塚・塚原・塚元重・墓之下・立山迫・射場迫・弓場迫・鬼弓場・陀羅窪

岩　崎（３７）－－－稲荷山・霧島・霧島段・権現ノ下・諏境・神田・宮田・宮ヶ迫・宮脇・九日田・霜月田・光神免・田ノ神平・池ノ王・観音ノ前・薬師平・寺岳・門前岳・堂ノ岳・堂ノ下・堂ノ後・堂ノ迫・堂田・堂ノ山・堀口堂免・坊ノ下・坊主田・仏法田・山坊シ山・墓ノ下・飯塚・座頭塚・天堂免・枦ケ立・失五郎・上松永・下松永

諏訪方（５５）－－－伊勢免・稲荷山・今諏訪・諏訪前谷・諏訪山・諏境・霧島谷・霧島塚・霧島塚岡・光神山・光神山ノ下・年ノ神・鳥井ノ谷・守ノ王・山ノ神・下山神・星ヶ崎・宮薗・宮ノ脇・九日田・次米田・ヒカン田・下ヒカン田・仏田・上塚田・下塚田・法楽寺・見中庵・地蔵ノ下・下地蔵ノ下・十王下・胡麻窪・寺前・堂田・堂之尾・堂尾頭・堂ノ崎・堂之谷・中堂ノ谷・下堂之谷・宇堂谷・堂ノ前・堂免・免崎・五位塚・塚ノ段・塚ヶ段・立野・柴立・弓場ヶ迫・鳥バミ・五山・下五山・五山ノ山・上五山ノ谷

深　川（８０）－－－権現前・大明神・天神ノ下・四ケ所・四ヶ所ノ下・十五・十五ノ下・十五原・宮田・宮ノ前・宮ノ脇・白楽田・修理田・神ノ久保・神牟田頭・神牟田上・神牟田中・神牟田槲・神牟田南原・田ノ神・田之神上・山神・山ノ神前・牛之神・早馬田下・三王免・薬子免・不動ヶ尾・持宝院・万歳堂・本光明寺・本千眼寺・今寺・寺山・大寺山・上寺山・中寺山・小寺山・小寺山原・寺山迫・中寺山谷・下寺山谷・寺薗西原・堂薗野首・堂ヶ尾・堂ノ上・堂ノ尾・堂崎・堂ヶ迫・堂前・堂ノ後・道場田・塚田・大塚・小ヶ塚・狐塚・唐人塚・留塚・墓之山・六堂原・六堂原窪・南六堂原・外薗堂免・慶正防・坊屋敷・尾建・大立・立野・向へ立野・立野崎・立元・中立元・立元下・立山・立山下・鬼ヶ久保頭・九曜岡・九曜下・九曜ノ岡下・弓場元

（２）館・城郭・集落地名

二之方（７）－－－堀内・堀ノ口・麓・本役所・島屋敷・島屋敷下・外村

南之郷（９）－－－栫井ノ下・内ノ丸・中ノ丸・中丸下・陣ノ下・陳ノ前・陳ノ山・東陳ノ山・乙名陳

岩　崎（１３）－－－栫井・仮屋ノ下・御納戸・御納戸ノ向江・西ノ城戸・曲山城戸・上東郷谷・内屋敷・本屋敷・中村・下村・原ノ村・原之村

諏訪方（２１）－－－城ヶ尾・城ヶ中・旧城山・犬ノ馬場・蔵ノ町・蔵ノ町下・郷原・上郷原・中郷原・下郷原・上郷山・屋敷ノ下・屋敷ノ下谷・下屋敷・名頭屋敷・大村・大村下・田村・西村・豆村・村ノ下

深　川（２０）－－－大領・障子ヶ元・荘次ヶ下・ゲシガ牟田・堀ノ内・城ヶ尾・古城下・中ノ丸・小倉・小倉迫・小倉迫谷・小倉前・神屋敷・陣ノ尾・陣ヶ原・小陣・今村迫・今村谷・内村大迫・村山

（３）人名地名

二之方（２）－－－大丸・斉藤　　南之郷（２）－－－大丸・入道

岩　崎（２０）－－大丸・中ノ丸・中丸ノ尾崎・神ノ丸・神ノ丸尻・次郎丸・日丸迫・目丸迫・稲留・徳留・中留・吉留・重久・福重後・福市・吉永・有馬迫・有馬田・渡辺・　寿左エ門迫

諏訪方（３）－－－大丸・長ヶ丸・乙次郎

深　川（１２）－－小丸・末広後・徳留後・福元・十郎兵衛迫・万蔵岡・万蔵頭・畩ヶ山・畩ヶ山谷頭・畩ヶ山谷中・畩ヶ山入込・畩ヶ山後原

（４）開発地名

二之方（９）－－－布別府・堀切・西ヶ切・西ヶ切ノ上・新地ノ下・上新地・新川・大薗道添・柿木薗

南之郷（３）－－－布別府・窪田堀・大八重

岩　崎（２５）－－今別府・西別府・大園・小園前・中ノ園・西園・西ノ薗・北ノ薗・槇薗前・久保園・迫ノ園・迫ノ薗・外薗・三薗・内堀・内堀込・堀込・下ノ切・土切・新田ノ上・岡作・道添・開キ下・大戸免・大戸ノ免

諏訪方（１１）－－今別府・宮薗・堀切・堀切北・堀切谷・下堀切・開キ・池添・小添・馬場添・浮免原

深　川（２４）－－末別府谷・末別府原中・末別府原下・末別府前・大薗・小薗・北ノ薗・堂園村・外薗・外薗堀切・毛割薗・毛割薗ノ上・和田薗・新地・新原・新堀・大膳堀・内添・上道添・轟木道添・原口道添・山牟田道添・河野山野・古藤山野

（５）田畑地名

二之方（２５）－－芋田・上鍛屋田・下鍛屋田・門田・川田・桑木田・津田・角田・野田・野田後・野田谷・浜田・春口田・百田・松田出口・松田下・宮田・山野田・上五反田・下五反田・七反・八反・上畑・後畑・町畑

南之郷（４１）－－池田・後谷田・槇田・大内田・川原田・川原田元・小永田・小永

田原・下小永田・胡麻田・沢田ノ下・沢田迫・杉田・砂田脇・谷ノ口田・十真田・永田迫・永田前・二反田・野中田・東田・平田・前田・前田下・下前田・宮田頭・宮田前・山下田・山ノ田・田方・高代・八貫・後原畑・二町畑・東原畑・前畑・前畑原・前畑免・山畑・焼山・焼山宇都

岩　崎（６１）－－荒田・有馬田上・有馬田尻・岩田・丑木田・上後田・下後田・賀井田・堅貫田・鎌田・久保田・黒田・高良田・次木田・角田・永田・上長田・小永田谷・浜田・前田・内前田・大沢津前田・曲田・松木田・上向田・下向田・狢田・狢別田・柳田・下山田・中山田・吉田・田中・二反田・二反丸・阿栗畑・荒畑・乙畑・桑畑・柿木畑・覚蔵畑・金畑・権兵衛畑・作左ヱ門畑・次郎太畑・四郎畑・甚畑・西瓜畑上・大衛畑・鶴ノ畑・藤次郎畑・戸左エ門畑・長畑・西川畑・早崎畑・前畑・前畑段・有持前畑・政畑・向畑・山畑

諏訪方（４６）－－飯島田・植田山・槇田・大隅田・カマ田・下カマ田・川原田・黒月田・桜田・迫田・大迫田・下大迫田・嶋田・ツル田・鶴田ノ下・流シ田・永田・下永田・野中田・畑毛田・肥田・小平田・フシ田・前田・松木田・水田・上水田原・中水田原・下水田原・柳田・柳田谷・上山田・上山ノ田・中山田・下山ノ田・和田・田方・七反・八反・下八反・後畑・合戦畑・諏訪前畑・法楽寺改畑・前畑・茶緑ヶ尻

深　川（５４）－－アドフ田・アドフ田西・池田・井手田・黒木田・黒木田頭・黒田迫・桜田・上桜田・南桜田・瀬戸田・千田・高井田・種子田・種子田西原・外山田・永田・上永田・下永田・流シ田・枦田・御平田・深田・袴田・前田大迫・前田岡・前田ノ原口・丸田ノ上・御田・柳田・山ノ田・吉田・吉田下・和田下・和田脇・北割田・南割田・一町田・三反・三反頭・六斗米・大田畠・三枚畠・長畑・前畑・畩ヶ山前畑・下稲前畑・原口前畑・柚窪前畑・松尾畑・道畑・西畑・南畑・南畑原

（６）水利地名

二之方（５）－－－樋掛・樋口・樋脇・掛上り・コミドリ

南之郷（１１）－－井手上・井手筋・井手前・井手元・掛尾・大沢津・樋ノ口・樋渡・水窪・東水窪・三ケ迫

岩　崎（２５）－－井手迫上・井手ヶ迫上・井手下・犬坊井手ノ下・井手元・井手ノ元・井戸谷・岩井谷・落ノ尻・落通・落道ノ下・落元・狢ノ落元・沢津山・沢津山下・築土手頭・貫ノ上・火頭・樋迫・樋迫上・樋迫尻・福井・溝川・溝口・尻溝

諏訪方（９）－－－井川谷・井手ノ上・井手元・井手ノ脇・小井手・下トヒ・長緑・堀・浜川

深　川（１５）－－井川迫・井手ノ上・五位塚井手上・山下井手上・山下井手下・十五井手元・井手山・落シ上・落本・落ノ脇・掛ノ下・樋掛・樋ノ口・樋口井手元・楠木樋口

（７）市場・交通地名

二之方（２３）－－下市・志布志口・上白坂・中白坂・下白坂・頭垂ノ下・茶屋ノ下・土橋・町・町ノ下・洗入道・今諏訪通・新道・中道・道合・中小路・佐渡・管渡・管渡迫・中谷渡・野田近渡・朴木渡・本明渡り

南之郷（１３）－－市林・出口・赤坂・乗越・馬越・中津ノ下・登尾・浮橋・並松・見帰・渡り・渡り上・大内田渡

岩　崎（２９）－－坂ノ上・内堀ノ坂上・大園坂上・徳留坂ノ上・宝持ノ坂上・坂口・坂口坂・坂下・開キ坂・橋口・大橋ノ口・橋場・街道口・路之下・山路ヶ迫・中尾筋・通り迫・手島野道・野道取・手島野渡・管ヶ牟田渡・飛渡尻・下飛渡・平原渡・福留渡・宮園ノ渡・馬渡・渡り揚り・渡口

諏訪方（２３）－－出口・戸ゴシ・コシケ山・石坂・坂ノ上・小坂元・関山・関山谷・関山西・上橋・川路・川路西・川路山・下川路・近ミチ・浜戸道・柳井谷道・下作渡・白毛渡り・下管渡り・飛渡瀬頭・水田渡り・渡ノ口・

深　川（５５）－－市川・旧駅所・小坂・坂口下・坂本・坂ノ上・西坂上・東坂ノ上・小倉坂下・十文字・関山通・茶屋ノ頭・早ヶ茶屋・辻・通山上・通山ノ川路・通山東・通山西・御野建場・上ノ馬場・見帰北・見帰谷・見帰原・街道ノ下・外戸口・川路・川船・川船頭・蔵町通・小倉道・大丸道・高木山中道・本道原・四ツ枝道・柳井谷出口・中崎入口・中崎通り・中崎道・中崎渡り・渡り・牛ヶ渡・牛ヶ渡口・帯渡・蔵町渡り・五位塚渡り・五位塚渡り下・猿路渡り・シカンニウ渡り・十五之渡・東渡・柚窪渡り・馬渡り・馬渡頭・馬渡ノ下・村山渡

（８）職業・産業地名

二之方（４）－－－上鍛屋田・下鍛屋田・小牧谷・小牧段

南之郷（３）－－－牧・牧ノ尾下・後牧

岩　崎（１９）－－草場谷・獅込・獅子込向・馬込・丑牧ノホキ・仮牧・小牧・小牧ノ段・西之牧・目倉牧・牧内・牧ノ内ノ下・牧境・牧崎・五牧ヶ谷・中牧ノ谷・新牧ヶ谷・牧原前・秣場平

諏訪方（１３）－－西鹿倉谷・草場・猿氏・完小積・高取・牧・上牧・葛牧・牧ヶ入佐・牧口・牧原・牧原ノ下・猪ノ川内

深　川（２５）－－塩硝ヶ谷・塩硝ヶ谷甲・塩硝ヶ谷頭・塩硝ヶ谷中・塩硝ヶ谷南・塩硝ヶ谷南上・カナクソ段・後木場・後木場上・杣ヶ山・上杣ヶ山・荒牧・牛牧・牛牧入口・牛牧下・中牛牧・仮り牧・牧内・牧之谷・牧段・牧原・西牧原・牧野山・豆付ノ谷・焼山

（９）門地名

二之方（１）－－内門

南之郷（１）－－垂門

（１０） 自然景観地名

二之方（１８）－－笠ヶ宇都・高尾・千代ヶ尾・丸尾・八久保・百入窪・舟迫・千丈島・玄蕃塚谷・大段・丸鶴ノ下・小中野・上花面・中花面・下花面・ホキ谷・尾崎山・寺田湾津

南之郷（４５）－－池谷・赤尾・上岡野尾・宇都・宇都口・宇都谷・赤宇都・小宇都頭・小宇都谷・三枝・三枝之下・千川原・中薗川原・大窪・大久保原・岩崎・大迫・平沢・広瀬・馬ノ瀬・野久尾・井ノ上野久尾・柿木野久尾・水流野久尾・寺野久尾・小平・広底・広底宇都・田代谷・細谷・湯ノ谷・水流・黒仁田・仁田久保・長ヶ原・平原・平原前・三淵・古川・曲野・西俣・東俣・水洗・高牟礼・長牟田

岩　崎（５４）－－池ノ谷・池ノ子谷・池山・笠ヶ宇都・長江・四ツ枝・七ツ枝・亀甲・川原・下川原・崩入・久保・久保平・小久保・船久保・水洗ノ久保・鳥越・鳥越道・大迫・長迫・長迫ノ段・鍋迫・船迫・山迫・丸岳・瀬ヶ谷・大段・飯山ケ段・笠木　段・高尾ノ段・手島野・野久尾・内堀野久尾・天司ノ野久尾・破損・千早原・池平・金ヶ平・琵琶区・琵琶ヶ迫・石ケ淵・沖田ホキ・西俣・二俣・川路・三重・笠ヶ峯・小山・平山谷・森山・藪山・藪山頭・古川・山川

諏訪方（３６）－－鐙木・宇都・下中尾・中尾段・岡山・大久保・七ツヶ久保・船窪・大崎ノ山・角サキ・大迫・中大迫・回迫・中須・中ノ谷・前ノ谷・湯之谷・前床・上小鍋・中小鍋・野久尾・上原・西原・平原・北平・田平・火打袋・西俣・水洗・浮牟田・牟田川・下牟田川・鶴牟田・蓑牟田・内蓑牟田・二つ山

深　川（ 119）－－七ツ石・石峯・宇都之谷・宇都之平・カブリケ宇都・七枝頭・切ヶ尾・岡・上岡前・下岡・高牟礼岡・前岡・前川内丸岡・亀ヶ尾・亀ノ首・大川・下切り・窪・上水窪・下野窪・久保原・戸越・大崎・川崎・小崎・下小崎・中崎・中崎大迫・早ヶ崎・早ヶ尾崎・真方尾崎・迫・畦ノ迫・後迫・大迫・上大迫・大迫頭・北俣迫・中迫・梯迫・俵迫・船迫・船ヶ迫・水ヶ迫・南之迫・山川迫・両足迫・中須・川瀬・桶底・入谷・大谷・表ノ谷・北山谷・東谷・東ヶ谷・二子谷・山川谷・下山川谷・大段・中段・泰野段・段ノ入口・段中・段ノ中・段ノ南・段原・東段原・水流・前床・野久尾・上岡野久尾・小野久尾・末別府野久尾・大明神野久尾・高井田野久尾・寺薗野久尾・徳留野久尾・原口野久尾・前田野久尾・和田薗野久尾・野間・原・芝原・東国原・西国原・国原前・国原山・二反原・野中原・東原・平原・平原岡・又原・蓑原・上蓑原・下蓑原・向原・本向原・大平・東平・西平・南平・北平・樽ヶホキ・東俣・北俣・後牟田・荷牟田・脇ノ牟田・カズラ森・カツラ森谷・北山　打出・尾ヶ山谷・鍋山・下山・野枯山・矢崎山

（１１） 位置地名

二之方（３２）－－小牧谷頭・中ノ谷頭・小牟田ノ上・竹谷上・耳取ノ上・岩下・竹下・山下・山下谷・下ノ段・中尾・中谷ノ中・中鶴・東方・西・町畑西・南原・北俣・北俣谷・松尾前・前牟田・後谷・横尾・朴木向・牧ノ向・沖原始り・沖原終り・崎原・社ヶ谷・山野谷・山野原・国合

南之郷（５３）－－池谷ノ頭・後谷頭・谷ノ頭・東ノ頭・瀬戸口・谷ノ口元・池ノ尻・崩ノ上・土ノ手ノ上・森田ノ上・山ノ上・山ノ上原・後谷下・上原・下原・高尾ノ下・谷ノ口下・野下・平原ノ下・村ノ下・山下・山下谷・中尾・中尾原・中川原・中崎・中ノ迫・中ノ谷・中原ノ下・東・東原・西ノ迫・西原・西ノ原・北迫・北谷・上北谷・中北谷・前原・舞迫・梅木前・谷ノ口前・平原前・後谷・後原・山ノ根・石ノ脇・崩之脇・小脇・谷ノ口脇・緩毛向原・山景・国合原

岩　崎（ 118）－－大迫頭・迫頭・久保頭・小有持頭・高野頭・茶園ヶ迫頭・中牧谷頭・山頭・山ノ頭迫・吉ヶ谷頭・頭原・上瀬戸口・中瀬戸口・下瀬戸口・谷口・谷ノ口・堀口谷・堀口段・溝口・賀井田ノ尻・川路ノ尻・崩尻・黒鳥迫尻・迫尻・篠目山尻・手島渡ノ尻・東郷谷尻・虎迫尻・中牧谷ノ尻・朴木山尻・山尻・池ノ尾・蛇ケ野入口・池ノ原出口・上平・池ノ上・稲荷山上・岩ノ上・沖田ホキノ上・長ノ上・後藤　平上・篠目山上・田ノ上・竹山ノ上・藤後段ノ上・中野ノ上・朴木ノ上・前谷ノ上・溝上・狢ノ上・森ノ上・山ノ上・植谷・池ノ下・笠ヶ宇都下・中ノ下・新留ノ下・西ノ下・曲山下・町木ヶ岳下・丸岡ノ下・山川ノ下・山下・下平・中尾・中島・中ノ谷・中段・中西原・小中野谷・中野・中野平・中前・中山・東ノ谷・東ノ段・東野・東原・西川山・西ヶ迫・西ノ迫・西俣ノ前・前ノ谷・前ノ原・前平・池原前・上平ノ前・西ノ前・後迫・後谷ノ口・後ノ原・中馬後・船窪後・宝持ノ後・先キケ迫・先キノ谷・池平向・大丸向・竹ノ山向・古川向・山ヶ根・堀ノ元・山元・脇・西ノ脇・西堀ノ脇・外薗之脇・沖・境・瀬辻境・二之境・南境・栄川・市ノ谷・中市ノ谷・下一ノ谷・三ノ谷・寅迫

諏訪方（５１）－－前迫頭・谷頭・谷ノ頭・水田迫頭・川内尻・池ノ上・カミヤダノ上・正宿谷ノ上・仲ヶ山ノ上・鳥山ノ上・上川路山・上中尾谷・上中原・池谷下・小山ヶ下・棚木之下・出口下・前下・山下・下段・下中段・下中ノダン・下中尾谷・下原・下横尾・中尾・中尾北・中尾迫・中川路山・中原・中横尾・野中田谷・東原前・東原北・西中野・西横尾・入佐西・後原西・五山西・南中原・中原北・北横尾・入佐ノ前・光神山前ノ谷・前ノ谷・後原・横尾・椿ヶ段入口・中尾入口・川路山・坪山谷

深川（７７）－－頭桜谷・大谷頭・亀ヶ尾頭・北山ノ頭・谷頭・野中原頭・松ノ元頭・小山口・高木山谷口・谷ノ口・瀬戸口・原口・原口谷・堀ノ口・松下口・松ノ下口・上鶴木・上村山・池ノ上・宇都之上・桜谷ノ上・瀬戸上・瀬戸ノ上・芹牟田ノ上・高木山ノ上・鳥巣ノ上・野間ノ上・梯子迫上・下稲原上・下桜谷・下柳ノ谷・岡下・槲下・亀ヶ尾下・木ノ下・小山ヶ下・迫ノ下・竹下・堤ノ下・鶴木ノ下・中崎ノ上・ホキノ下・堀ノ下・本横手ノ下・山下・四ツ枝下・蕨ヶ入佐下・中桜谷

・蕨ヶ入佐中・高木山東・又原ノ東・又原東迫・山下林東・大谷西原・柳井谷西・南下稲原・切ヶ尾北・中島前・前ノ岡・前川内後・前川内後谷・後迫・国原後谷・後迫前谷・後牟田上・小倉後・迫後・植木ノ元・大谷入口・真方入口・松ヶ迫入口・柳井谷入口・池端・小畦脇・小倉坂脇・沖原・浦ノ迫

（12） 目印地名

二之方（19）－－市五ヶ迫・櫂木・鎌牟田・コモ池・薦池尻・竹谷・チシャノ木・朴木・上ハゼム田・中ハゼム田・下ハゼム田・松ヶ迫・松原・松ヶ平・壱本松・狐ヶ宇都・黒鳥・飛山・蛇島・

南之郷（26）－－檍・檍ノ下・檍ノ前・檍山・芋ヶ迫・岩松ノ前・梅木ノ下・柿木前・栗平・小麦迫・桜谷・篠ヶ迫・菖蒲ケ宇都・杉ノ本・一本杉・チシャノ木・チシャノ木原・松崎・松ヶ迫・小松谷・松ヶ野・上吉原・下吉原・猿走・鳶巣・蛭迫

岩　崎（45）－－宇部山・瓜ヶ迫・榎木元・柿木後・柏原・桐木段・平楠・桑迫・桑迫谷・上桑鶴・下桑鶴・桑木元・軍ノ木・コモ池・篠目山谷・杉ヶ宇都・杉ノ元・杉山迫・竹迫・竹ノ下・竹山・茶園ヶ迫・黒葛尾・椚木原・檜迫・藤木・朴木山・町木岡・松サキ・松ヶ迫・松ヶ迫谷・松長谷・一本松ノ下・柳場・ユスノ木川・吉ヶ谷・狐ヶ迫・狐迫段・黒鳥迫・蛇ヶ野・蛇ヶ野段・狢・小倉迫・小屋ヶ谷

諏訪方（39）－－梅川・梅木・カツラ迫・桐木・クスギ・楠元・グミキ・桑崎・桑ツル・大角豆迫・大角豆ヶ迫・上椎木・下椎木谷・唐竹山・上唐竹山・竹ノ下・竹ノ谷・棚木原・椿ヶ段・萩崎・萩寄原・高松・高松迫・上高松・中高松・下高松・松木田谷・狐迫・五位ノ谷・五位ノ原・上小鳥・下小鳥・上高須・中高須・下高須・鳥山・上鳥山・下鳥山・馬牟礼迫

深　川（55）－－下稲原・梅木迫・梅木ヶ段・梅ヶ迫・梅ノ谷・槲・桔梗ヶ尾・桐木・椹木元・楠木岡・楠迫・楠ヶ迫・柊木・大桑木・桜谷・桜谷打出し・正ヶ谷・杉ノ下・須木ノ段・管谷上・芹り牟田・高木山・唐竹山・茶園ヶ尾・黒葛ヶ迫・黒葛ヶ谷・堂木迫・蓮ヶ谷・朴・松ノ上・松ヶ迫・松ノ下・松尾谷・松元・松根岡・松バ迫・小松ヶ尾・柳ノ谷・柳井谷後・柚窪・蕨ヶ入佐・猪ノ尾ノ上・馬ヶ迫・猿島・島廻り・狸山・鶴木・鶴ヶ迫・鳶巣・飛山・鳥巣谷・鳥巣原・八ヶ迫・蛭ヶ尾・蛭ヶ迫

（13） 気象地名

二之方（2）－－－雨包・耳取

南之郷（1）－－－風呂ノ口

岩　崎（2）－－－帯取・帯取迫

諏訪方（4）－－－雨堤・風呂ノ上・風呂ノ下・耳取

深　川（6）－－－雨堤・雨堤ノ上・雨堤東・稲干・風呂ノ元・風呂ノ元下

（14） 擬音地名

二之方（2）－－－轟木・轟木谷　　南之郷（1）－－－轟木

深　川（3）－－－堂目木・轟木・轟木ノ上

（15）争論地名・その他

二之方（1）－－－論地原

岩　崎（4）－－－論田・中次後・中次迫・御竿泊

諏訪方（4）－－－論地ヶ窪・論地ヶ迫・論地原・横枕

（16） 意味不明

二之方（7）－－－大高良・荷原・百入窪・東百入・西百入・行分・緩毛

南之郷（17）－－秋月・カナド・岸良・二熊・郷敷・逆水・竹友原・土合原・所迫・西留下・箱根・犬房・黒房・花房・フヅキ谷・緩毛・緩毛谷

岩　崎（36）－－有持・有持城戸・飯永下・犬房・犬房ノ谷・伊屋谷・下喜平・打出し・各川面・川勘・小有持・小清・小間・後家行・後藤瀬・後弁当・雑菜・敷根・高野志・竹六・地ノ子・チン亀田・椚郷・長筈ノ上・上長筈・下長筈・白慶・府敷・藤里谷・筆無シ・奉公迫・面原・狢庵図・山吉・六浦・七林

諏訪方（12）－－有ノ木・浦木・下浦木・京元・口弁木・七面・正宿谷・白毛・新帰・唐尾・仲ヶ山・本曲

深　川（53）－－アツワタ・アドフ谷・委細工・委細工ノ上・芋久保・芋尻頭・芋尻中・芋尻下・入込・入料・入料入口・入料越・入料谷・入料原・臼科・臼科川路・打出シ・ヱザリ・ヱザリノ上・ヱザリ之下・江戸迫・江干方・下江干・買手原・隈元・黒餅迫・黒餅原・腰折・権税子・大竿・シンガニウ原・鈴向上・鈴向中・鈴向下・鈴向谷・セッタウ・セッタウ東・セッタウ谷・仙ヶ迫・仙ヶ山・反恒・忠心平・土切・手取・所迫・仲角・鼻クイ・羽根木・原ヲロシ・ホサ山・見ノ崎・ユロフ・楽床

出水郡の市・交通地名

（１）出水市　(1679)

上大川内(100)　5.0 %　－－　馬流・越地・坂元・内坂元・市野々

下大川内(126)　5.6 %　－－　里道・猪ノ越・竹越・一ノ渡瀬・平渡・村渡・岩坂

上鯖淵　(243)　4.9 %　－－　通山・通山口・通山川内・小坂ノ元・溝越・車掛・橋ノ上・橋ノ口・橋ノ下・渡瀬口・折敷町・白金町

下鯖淵　(34)　14.7 %　－－　坂下・永坂・永坂下之段・川路・関外

境　町　(47)　19.1 %　－－　御手洗道上・御手洗道下・永坂・永坂下ノ段・坂元・旦荷・茶屋ノ下・茶屋ノ元・関外

美原町　(37)　8.1 %　－－　大道田・小坂元・竹原町

六月田　(14)　0

武　本　(450)　8.9 %　－－　中尾筋中・中通下・通山迫・木引道・打越・瀬越・瀬越下・瀬越西・下瀬越西・鳴小路・平岩道・上宮道・赤坂・城ノ坂・城ノ坂口・砂坂・野坂・野坂ノ口・野坂尻・弥陀坂・向逢坂・向逢坂東・坂ノ上・坂ノ下・坂ノ東・坂元・庄左衛門渡・長野渡・広瀬渡・上広瀬渡・東広瀬渡・市ノ渡瀬・古川渡瀬・入口橋・高橋・下高橋・木上町・休甚町・遠屋町・山ノ上町

上知識　(53)　5.7 %　－－　坂口・ハゼ町・半次郎町

下知識　(35)　11.4 %　－－　福ノ江通・山中通・大野橋上・町ノ西

上知識町(30)　6.7 %　－－　馬溜・新馬溜

下知識町(48)　4.2 %　－－　上松道下・津山

明神町　(46)　4.3 %　－－　渡口・町川原

五万石町(42)　14.3 %　－－　石坂・石坂ノ上・並木堀・大迫町・土器町・簗瀬町

西出水町(63)　22.2 %　－－　中通・中通ノ上・中通下・中通東・中尾筋・中尾筋中・中尾筋東・岩重町・休次郎町・関屋町・時吉町・野村町・万次郎町・靴掛

福ノ江町(51)　3.9 %　－－　石橋・南石橋

今釜町　(51)　7.8 %　－－　橋ノ上・町ノ前・町ノ後・町之西

中央町　(61)　9.8 %　－－　洗越・五筈坂・辻・市之住連・東旦花・西旦花

向江町　(51)　15.7 %　－－　橋ノ上・橋ノ口・古市・下古市・西古市・観音町・庄屋町・天神町

荘　(89)　6.7 %　－－　中道・脇道・道添・外戸口・乗越・町

（２）高尾野町　(642)

大久保　(170)　10.6 %　－－　車道・上使道・上使道上・上使道口・出シ道・出シ道下・出シ道東・中道・西道上・道添・橋ノ上・橋口・橋ノ元・東町・本町・町口・並松ノ上・並松ノ下

柴　引　(128)　14.1 %　－－　道下上原・上小路・下小路・上馬場・中馬場・東馬場・西馬場・横馬場・馬子せ場・加治屋町・本町・下本町・中永中庵本町・町口・上垂・中垂・下垂・東垂・

下高尾野(108)　10.2 %　－－　横道・道上・道下・道添・石坂・上石坂・滑坂・馬場園・市園・鈴見町・垂

唐笠木　(43)　7.0 %　－－　大通・出シ道・横馬場・

上水流　(73)　8.2 %　－－　中ノ道・道下・小道・石橋・大助橋・橋ノ下

下水流　(115)　13.0 %　－－　蔵道・浜道・中浜道・東浜道・西浜道・道荒・道上・道添・三文路・掛越・峠神・石橋・石橋上・石橋下・橋口

江　内　(158)　6.3 %　－－　新海道・道上・道下・外戸口・古外戸・上町・中町・下町・南町・泊

（３）野田町　(677)

上　名　(520)　2.9 %　－－　大道原・路上・辻・辻ヶ段・石坂・越地・下越地・馬渡・橋掛・下橋掛・橋口・橋口原・本町・森町・町原

下　名　(157)　4.5 %　－－　大道添・辻ヶ迫・橋上・橋下・西橋下・井町・茶屋ヶ迫

（４）阿久根市　(1272)

波　留　(93)　8.6 %　－－　駒道・上大橋・下大橋・橋ノ本・倉津・小倉津・倉津東前迫・町

山　下　(87)　4.1 %　－－　餅越・坂元・猿渡・乗溜

鶴川内　(144)　4.9 %　－－　通山・道下・坂ノ下・柴越・柴越段・乗越・船ヶ処

赤瀬川　(65)　6.2 %　－－　大尾道・坂ノ上・橋ノ上・小田峠

折　口　(89)　9.0 %　－－　上道・桐野道・慶堂ノ元・十文字・川越・潟渡・甚右衛門橋・橋ノ谷

多　田　(68)　1.8 %　－－　尾越

西　目　(98)　8.2 %　－－　通山・廻道・上越・中越・下越迫・猿渡・深浦・浦山

大　川　(158)　5.1 %　－－　大道下・上道尻・下道尻・今越・中ノ越・中山越・小峠・橋ノ口

脇　本　(470)　4.9 %　－－　通山四ツ割・ヲロ道・中道・山大道・道添・外戸ノ元・古外戸・古外戸山迫・辻ノ元・打越・尾越・上尾越・黒越・小越松・壱ノ坂・坂口・土橋迫段・橋口・村ノ城戸・関ノ穴・登津・破止上・破止山

（５）東　町　　(517)

山門野	(90)	4.4 %	ーー　合戦場越・鍛治屋越・柳之渡・渡口
川　床	(157)	5.7 %	ーー　道下・外戸迫・宇都越・え小坂・坂元原・橋川・吉之渡・渡之上・京泊
鷹　巣	(108)	6.5 %	ーー　道下六合・外戸・馬場ノ下・辻・渡・中渡・戸渡内
浦　底	(58)	5.2 %	ーー　友浦・深浦・船津留
諸　浦	(33)	12.1 %	ーー　市ノ坂・小浦・本浦・満ヶ浦
獅子島	(71)	1.4 %	ーー　京泊

（６）長島町　　(580)

平　尾	(191)	8.4 %	ーー　立道・道添・小路・古外戸・赤坂・上赤坂・菖蒲ノ渡・尊ノ木渡・下尊ノ木渡・ノ渡・竹柳ノ渡・赤渡瀬・下赤渡瀬・並松・津山・碇川内
蔵之元	(69)	8.7 %	ーー　盛道・渡・上渡・渡平・舟津・舟津平
指　江	(130)	6.2 %	ーー　通山・通り道・立道・道添・道畑平・外戸口・一ノ坂・桜渡
城川内	(155)	7.7 %	ーー　浜道・道上・道下・道添・外戸ノ元・内馬場・本馬場・坂ノ下・坂ノ下平・桐木渡・金礎渡・渡ノ元
下山門野	(35)	2.9 %	ーー　大道